

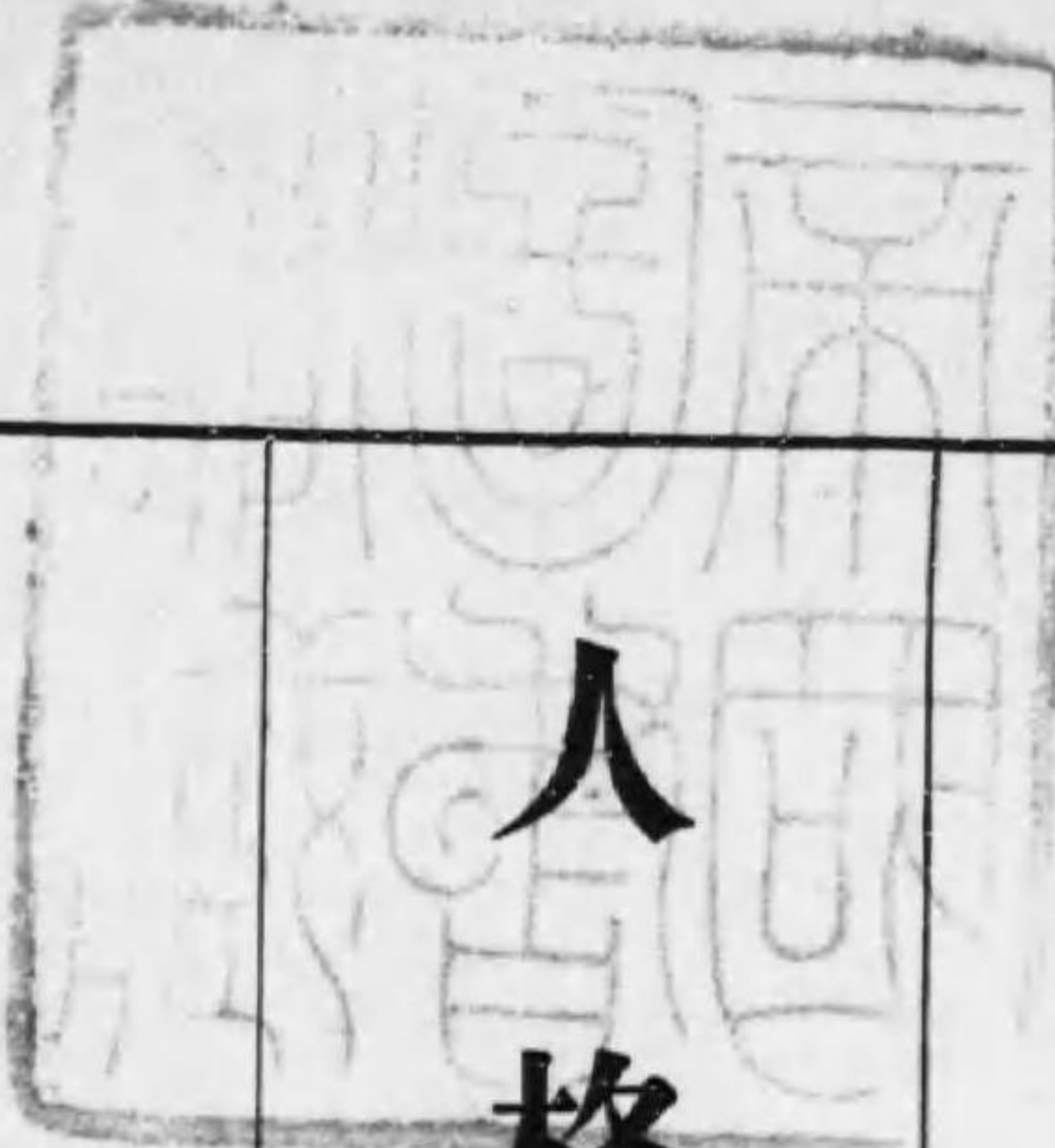
503
61

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



503-61



人格の出發

文學士 島本愛之助著

東京 日進堂藏版

大正
11. 3. 18
内交

序 言

今や著者は不惑の齡を踰えた。不惑の齡を踰ゆると共に少年時代の宗教的經驗が日々に甦るのを覚える。塗行く葬儀の靈に對しても何んとなく嚴肅な感がして人知れず帽を脱するようになって來た。此の心をせめて修身講堂の壇上に味ひたいとは豫ねての願である。然し今は其心も常に亂され勝ちなのは洵に惜念である。

本書の内容は過去數年に亙つて二三の専門學校及大學豫科の學生のために日々講じた修身講話である。果して是が現代我國の青年の道德的要求を満し得るやは充分の自信がない。然し著者自に採つては比較的ユニークな心持ちが現はれて居る積りである。其故に廣く之を天下の青年の前に公開することとした。

元より本書は理論を追ふことを目的とせない。成るべく平易に日常の經驗的常識の上に立つて自身の心持ちを述べた積である。勢ひ理論としての缺陷は讀者の特に諒せられんことを願ふのである。

卷尾の附録は主としてホール氏著青年期の心理を参考して書いたものである。著者は最近教育ある青年の自殺が日々増加するのを見て強く刺戟を受けた一人である。其故に現代の青年は自己の心理を反省する要あることを深く信じて之を附記することゝした。終に本書を上梓するに就て菊池國康君の多大の援助を感謝する。

大正十一年二月十一日

千駄木寓居にて

著者誌

人格の出發(目次)

個人生活

- 一、人格の出發……………一
- 二、知を行に徹する迄……………一九
- 三、所有本能と創造本能……………三五
- 四、現代より見たる武士道的精神……………五〇
- 五、修養の二方面……………六三
- 六、快樂は不道德か……………七〇

社會生活

- 一、自我論……………八九

| | |
|------------------|-----|
| 二、個人的本能と社會的理想 | 二六 |
| 三、個人的自由と社會聯帶責任 | 二八 |
| 四、社會的正義の成立及破壊の原因 | 一四三 |
| 五、國家生活と人類生活 | 一五六 |

人類生活

| | |
|-----------------|----|
| 一、國民精神の相互の理解と尊重 | 六 |
| 二、不朽の生命 | 三四 |
| 三、宗教への心 | 三〇 |
| 四、全體心と部分心 | 三四 |

附 錄

| | |
|--------|---------|
| 青年期の心理 | 二四三—二九九 |
|--------|---------|

| | |
|-----------------|-----|
| 第一章 序 論 | 二四三 |
| 第二章 心理一般の觀念 | 二四五 |
| 第三章 胎兒の心理 | 二五三 |
| 第四章 乳 兒 | 二五八 |
| 第五章 兒 童 期 | 二六四 |
| 第六章 青 年 期 | 二八〇 |
| 一、青年期の社會的心理 | 二八一 |
| 二、青年期の兩極性 | 二八六 |
| 三、青年期の身體は精神上の疾患 | 二九二 |

人格の出発

個人生活

一 人格の出発

島本愛之助著

「道德は總て人格といふ處から出發するのである。此出發點が無かつたならば、道德は力なく、基礎の無いものになつて仕舞ふのである。」

世の中の人ゑもすれば道德といふものは嘗だ便宜の爲めに、手段の爲めに有るものであつて其れ自ら權威のない、又力のないものであると考へて居る。然し若し斯の如く道德に權威なく、亦力がなければ道德に絶對的價値がないと云つてもよいのである。世の中の人ゑが道德に絶對的價値

なしと思ふ處の理由は、凡そ二つある。其の一は、人の一生は嘗だ生存する丈が目的である。恰も一般の下等動物の様に生命を維持する事丈が目的であつて、其他のものは總て何等價値ないのである。人間が生きて行くといふこと丈が道德的であつて其外に道德の根據といふものはない。其故に世の中の道德者や宗教家等のいふ處の生命以外に道德的理想ありと稱するが如きは全く空想の事であるといふのである。此の考へ方は今日の様な時勢に於ては、世間一般に流行する處の思想である。唯物主義の社會の如きは、喰ふ爲めの人間であつて、其の喰ふといふことの外に何等人生の意義なしと唱る。之等の見方を一言で謂ば自然主義の見方である。即ち自然界に於ける有らゆる物の如く、嘗だ人間の生活を理想なき一つの物質であると云ふ考へ方である。然し果して此考へ方で我々が日常生活を續けて居るかといへば、吾々は決して其れ丈を以て満足して生活して居ない。反つて物質的の肉體を資本として、其の資本に依つて他の目的理想に進まんと努力を續けて居るのであるまいか。斯く見ることに依つて、道德は目的其自又理想其自を實現することにあるといふことが出来る。

今一つの見方は道德は便宜の爲めに存するものであると云ふ考へである。例へば財産を造る爲

の方便として道德がいる。「正直は最善の商略である」といふ諺の如きは道德を極端に方便的に見たものである。其れは恰も病人が自己の命を取り止める爲めに、藥を呑むといふのと同じであつて即ち道德は藥と見ると等しい。他に或る目的があつて其目的を果す手段と見てあるのである。斯の如き道德觀は所謂便宜的道德觀と稱する。若し斯の如く道德が金錢の便宜の爲めに、欲望の便宜の爲めにありといふ事ならば、強いて吾々は道德を守るの必要はないのであるまいか。例へば人に嘘をついてはならぬといふ事は人間として必ず守らなければならぬ人道であるといふことであつてこそ道德であるけれども、時々詐を云ひ、便宜の爲めには詐を云つても好いといふことであつたならば、道德といふものは甚だ曖昧なものとなつて了ふのである。元來道德を便宜の爲にあるといふ考へ方は多く人間の人格的獨立といふものを認めない考で、嘗だ人間は境遇に支配せらるゝものだと云ふ思想である。又一つの境遇に順應するといふことを恰も道德だと考へて居る人々の考へ方である。然し人間の價値といふものは海月の如く嘗だ水の流るゝ儘に動搖して居るものではない。例へば外部の境遇が既に大いなる影響を與へるとしても、其境遇に對して飽くまで切抜け、奮闘して、其の境遇を自己の自由の力に依つて整頓する點に、人間の價値がある。

此根本的價値を指して人格的價値と稱するのである。

4
諸て然らば人格といふことを如何に説明して好いか。之は甚だ至難な問題である。然し、人格と云ふことをば凡そ人間の行爲の上に考へるならば二つの點を以て説明する事が出来る。其一つは行爲の出發點であり、他の一つは行爲の歸着點である。今少し言ひ換へれば行爲の出發點といふことは行爲の自發點といふことである。即ち自身の力で一つの行爲を行つたといふことにある。例へば此處に自己の親友が病氣で倒れて居る。之を自ら進んで其親友を看護するといふ事がありとせんか。此場合に於て誰か他人に強られ又社會に強られ、境遇に強られてしたと思ふものがあるか。此の場合、自己の親友に對する親切は決して他力的で非ずして、自力であるといふことを感ぜないものはない。若し此場合第三者の命令の爲め、其他事情已むなくして友に親切をしたとすれば、決して吾々の良心の満足を購ふ事が出来ない。此行爲が自ら發したと云ふことで満足するのである。此の點を指して行爲の出發點と謂ふ。亦哲學的に謂へば意志の自由と稱することも出来る。

今一つは行爲の歸着點と稱するものである。歸着點と謂ふことをいひ換へれば、責任といふことである。自ら行つた行爲の結果に對する責任を指していふのである。即ち自身の爲した行が巡り巡つて遂に自身に歸ると云ふことを謂ひ表すのである。世の中は此歸着點を充分に持たないで事を行ふ人がある。殊に青年時代に於ては、自己の意志を以て行爲を始むるけれど、其行つた行爲の結果に對しては責任を盡さぬ者が尠からずある。卑近な例を擧げて謂へば、青年諸君が學校に於てクラスの代表者を選擧する。其ときに果して充分責任心を以て選擧するかと謂ふと、多くは其責任心を持つて居ない。其れが證據に、其後に於てクラスに事の起つた場合に直に自己の選舉したる級長を事に當らしめて、啻だ之を背後から冷淡に見て居るに過ぎない。亦時としては望觀するのみならず、其の級長の失敗を笑ひ、更に進んで其級長の失敗せんことを心密に望むといふ様な事は極めて有勝なことである。斯の如き行は所謂出發點のみあつて歸着點なき行爲といふのである。又自由あつても責任なき行爲と云ふのである。此の點は敢て青年に止まらず我國民一般の缺點である。我國民生活に於て自治性が發達せない事は明に之が原因して居る。我國は既に代議政體を組織して數十年の年月を経て居るのである。然かも依然として其の代議政體は發達せないのみならず、年々歳々代議士の質が墮落して行く傾向がある。之は代議士個人の責任ではない。

寧ろ之は選舉人の罪である。選舉道徳は要するに其選舉人の眞の自由と責任ある行爲に俟つべきである。然るに我國民一般は未だ道徳的に低級であつて、此人格の二要素を甚だしく持つて居ないのである。若し今後の我國民をして、眞に文化ある國民として世界に誇んとするならば、須く此の人格心といふものを養はしめなければならむのである。

元來眞の自由と眞の責任といふものは必ず併行したものである。自由あつて責任なしと謂ふ事もなく、況んや責任あつて自由なしといふことも無いわけである。前に自由のみあつて責任なしといったことは誤りである。若し眞の行爲の自由を持つて居る人があれば、自然其人は責任心を持つて居るのである。自由といふことは我儘放埒といふ事ではなく、必ず自己の爲した行爲は皆だ自己一人の意志に出すると信ずる故に、其の行爲に對しては深き自己責任感を持つて居る可き筈である。學生が級長を選舉するといふ場合に、皆だ無責任に選舉したとすれば、其は選舉した者の眞の自由から出たのでなくして、多くは他人の眞似をした結果である。勢ひ強い責任感といふものが之に伴はないのである。現代の人々は自由といふ事を頻りに要求するけれども、其の自由といふ事は責任の伴はない自由である。時としては自由を要求する事が恰も衣服流行の如く

考へて居る。亦其等の人は兎角群衆心理に支配されて流行の叫をする人である。斯の如き人々に如何で眞の自由を味ひ得る事が出來ようか。之を要するに人格といふことは人間の行爲の上に現はれて、自由と責任の二要素に依つて説明する事が出來るのである。之を倫理哲學上に於ては人格上の自律性といふのである。

二

翻つて宇宙萬物を見渡すと、其の萬物の中には價値の非常に高い物と低いものがある。之の價値の相違といふものは何に依つて定めるかといふと、今日の倫理や哲學の大問題となつて居る。色々之に對する説明があるけれども、其の價値の標準といふものは矢張前に謂ふ所の出發點と歸着點、自由と責任といふ事の二つの點で見分けられる。今日の哲學者の中にも多く此説を唱へる人がある。例へば佛蘭西のベルグソンと云ふ有名な哲學者の如きは、宇宙の萬物に對して進化の程度に因つて説明して居る。換言すれば宇宙の萬物の内で比較的に進化せぬものと非常に進化して居るものとある。其は何に依つて定めるかといふと、自由といふ性質が多いもの程進化して居るといふ事が出來ると云ふのである。謂はば、自由を以て進化の標準とする説である。ベルグ

ソンの言ふ處に従へば、最も自由の少ない世界、即ち最も進化の遅れた世界は無機物界である。例へば金屬鑛石の如きものである。鑛石は其れ自らの力で働くことが出来ない。即ち石には自發點が缺けて居るのである。若し石が自ら動んとすれば他の力に依らなければならぬ。即ち他力に依つて動くのであるから、絶對的に自由なしといふ事が出来る。然して石が轉んで人を傷付けたといふ場合は、石に責任が無い。謂ば石には自由も責任も缺けて居るから此世界には道德がないと謂へるのである。

無機物界に次て稍進化した世界は植物界であるとベルグソンは言つて居る。何んとなれば、植物界は多少自發性が現はれて居る。例へば、日々地中から水分を吸収する。其枝は絶えず光線を吸収する爲めに日向へと自ら運動して行く。高尚な植物になると其の葉の上に止まつた昆蟲を捕へて、之を自己の餌とする。之等になると餘程進化して自由又自發力を持つに到つて居る證據である。然し大體から謂ふと植物は未だ極めて不自由な物である。自ら欲する處に自由に動く事が出来ない。之が今一步進んで動物の世界へと入ると、益々自由の性質が増大して行くのである。動物界に於ては其名の示せる如く自己の欲する處に、自由に活動する事が出来る。表面から見た

自由は殆んど絶對的に與へられて居るといつても好い。従つて犬は己の欲する處に食を求め、猫は己の欲せざる處を捨て、主家に歸る。以上のものうちでは動物界は最も自由を與へられて居る。換言すれば進化したる世界であるとベルグソンは言つて居る。

乍然、熟ら動物界を觀察して見ると、其の動物の内にも人類と人類以下の動物との内には確然たる區別があるのである。何んとなれば下等動物の行爲といふものは所謂前述の自發點と歸着點と云ふものが充分に現はれない。例へば犬が主家の臺所に入つて魚を盗むといふことは、一見自由な様であるけれども、少しく深く考へて見ると、之は人間の自由とは餘程趣が違ふ。人間の道徳的自由といふのは、前に述べた様に、必ず責任といふこと、關連した自由である。然るに之場合の犬の行爲は更に責任を持たないのである。従つて犬が魚を取つたといふ事を道徳的に之を責める事は出来ない。成程其犬を指して吾々は泥棒犬と呼ぶ。然し其は實だ人間の泥棒に比喻して名付けた名稱である。決して其犬を捕へて道徳的の責任を尋ねる人もなければ又之を法律的に制裁し様といふ處の人もない。何んとなれば、犬の其行爲を吾々は眞の自由と認めないからである。即ち責任の附屬する自由と認めないのである。一般の動物の行動が自由であるといふことは極く

表面的の解釋か、さもなければ低級の自由といふ意味である。犬が腹を減して主家の臺所に肴を取つて喰つたといふ事は、實は自己意志ではなくて他力に依つて動かされた結果である。石片が飛んで人に傷を付けたといふのと大いなる差別はないのである。犬は飢と云ふ單なる生理的原因から本能的にやつたことである。言換へれば犬の行爲といふものは、矢張眞の自由ではなくて、反つて他力で動いたと謂はねばならぬ。故に右の場合に其の道德的責任を問ふ事が出来なかつたと同様に、犬の行爲に對しても重大なる道德的責任を負せる事は出来ないのである。

此點に於ては人間の行爲といふものは初めて眞の道德的自由、即ち責任といふ事と密接に結合した所の自由といふものが現はれて來る。其處で始めて人格あり、亦道德的價值ありといふのである。未だ嘗て如何なる學者と雖も、人間以外の動物に人格ありと言つた人は無いのである。尤も人間の内にも兒童は未だ充分に此の人格を發揮せない處から、一般動物の如く嚴重なる道德的責任を之に科せないといふ事は世の習になつて居る。或年齢までは法律的の制裁を兒童に科せないことになつて居る。然し之は一般下等動物と兒童とが同一であるといふことではない。人間は生ながらにして人格を持つて居るけれども、嘗だ其れが行の上には現はれて來ないといふ處から、

道德的及法律的の責任を許されて居るのである。成人した人々は既に此人格を最も能く行爲の上には現はし得るものである。即ち自己の行つた行爲は自己の自發力に依ることを信じ、亦同じく其の行爲に對しては既に責任のある事を自覺して行ふことが出来るからである。斯の如き行爲を指して自律的行爲と稱するのである。即ち人格ある人の行爲といふものは、常に此自律的精神に依つて行つて居ると云ふ處から、眞の道德的價值が見出さるゝのである。其故に眞の道德といふものは人類のみ許されたる特權であると謂はなければならぬ。

以上人格の説明を法律上に應用する。法律上の權利義務と云ふ事も、其の原因は此出發點と歸着點、亦自由と責任といふことに當て填るのである。吾々が法律上、權利を持つて居るといふことは謂はば道德的自由を持つて居ると云ふこと、換言すれば社會が吾々に與へた職業を實行する爲めには自身に採つて是非無くてはならぬ資料を要求するといふ權利である。例へば如何なる職業に従事すると雖も、自己の生命を維持するだけの衣食住の資料が無くてはならぬ。其が爲め憲法は住居權、職業權、所有權、著作權等をそれぞれ人に與へて居る。其の代りには其の權利に依つて、國家に對する、又社會に對する職務を果して行く義務が負はされて居るのである。吾々が

他人の物を盗る事が出来ないといふことは、其盗まんとする財力を以て、他人が社會國家に對して奉仕して居るからである。之を裏面から謂へば其人が自己の所有品に對する權利を他人に依つて侵害せられないといふ憲法上の保證がある。即ち法律上の權利義務といふ事は、其根據を人格の自由と責任と云ふ處に深く根指して居ると云ふことが出来るのである。故に道德上から謂へば例へば、假に法律上表面、權利を與へられて居ても、其權利を國家社會の目的の爲めに活用するの
でなければ、眞の道德上の權利を持たないと云つても好いのである。現代の我國に於ては以上の意味に於ける人格的價值を具へた人が少いのである。現今の青年に於ても今猶ほ人格に覺醒せぬものが甚だ多いのである。此世の中の社會改造を唱へる人々も、社會の組織のみを改造して、社會が改善せらるゝものと思ひ誤つて居る。然し眞の社會改造は此人格的觀念を個々の人々に植付ける事に依りて始めて成就するのである。水を方圓の器に入れても、其の水が油に變ずることはない。水は元のまゝの水である。社會も組織を改めたと云つて、決して人まで良くなるものではない。先づ内面生活の改造から根本的に行り直さねばならぬのである。

三

以上述べた處で大體人格とは如何なるものであるか、亦總て道德的行爲といふものが、必ず人格から出發せなければならぬといふことも大體解つたと思ふ。最後に、然らば其人格を如何にすれば養ひ得るかといふことを述べて見たいと思ふ。人格其れ自らは如何なる人々にも先天的に備わつて居るものである。其故に今更人格を、改めて養ふ必要はないのである。然し乍ら斯かる先天的の人格といふものは他の色々の心の作用で反つて人格の輝が現はれて來ない事が多い。殊に物欲に捕らはれた人々は其の人格の力を現はす事が出来ないものである。其故に多くの人は人格を所有しながら遂に死に到るまで之を發揮する事が出来ない。其の結果、人格を養ふといふ事柄が大切になるのである。

人格を養ふ方法は色々あるけれども、就中、大切な方法は二つあると思ふ。即ち其の一つは獨を慎むといふこと。今一つは誠を致すといふことである。獨を慎むといふことは、古來東洋に於ても、西洋に於ても、均しく道德上大切にせられた事柄である。「言で謂へば、人は自己一人ある所に於ても己の行を慎むといふことである。」人が見て居ないと思へば、吾等は屢々不善を爲し

て平氣で居る場合がある。其れに反して、多く人の居る所では其人々を憚つて行を慎むのである。殊に然ういふ外面的の道德を實行する人は、前述した如く道德を便宜と考へて居る人々に多いのである。人から悪く思はるれば結局自身の不利益になるといふ處から、人前を憚るのである。元より人前を大切にするといふことも禮儀上重要であるけれ共、道德といふものが單に人前丈けのものがあつたならば、其の道德は極めて根のない、又權威ない道德と言はねばならぬ。兎角人は人前を飾るときには其人の眞心といふものは現はれない。謂はば偽善に陥り易いのである。從來の我國の道德には此種類の道德が可成り世の中に行はれて居つた。即ち偽善的の道德であつて、眞の人格に根ざした處の自發的の道德といふものは比較的少なかつたのである。其の證據には、我國古有の「旅の恥かきすて」と云ふ諺がある。此諺は眞に、我國民性の弱點を示して居る。島國根性を好く示して居る。青年諸君か修學旅行にでも行く場合には、此先祖傳來の恥づ可き習慣が未だに附絡つて居ることを屢々見うける。多くの知人や朋友の居る處では周圍を憚つて又社會的の輿論を恐れて、不徳義の事柄をせないけれ共、少しく馴ない土地に旅行すると、周圍は己を知つて居る者が無いので、勢ひ徳義に叛く様な行動を平氣で行ふ事がある。腹の中では旅だもの大

膽に遣れといふ様な考へが萌して來る。斯くの如き心持と云ふものは、所謂獨を慎む反對で、即ち非人格的行爲と謂はなければならぬ。吾々が眞の道德を自身の心の中に養ひ立てようと志すならば須らく常に獨居の際に心を用ひなければならぬ。己の人格的責任といふことを、深く深く反省せなければならぬのである。總て道德は内面的生活である。外面に依つて事を決するといふことは道德的には人格の劣等なる事を證明するのである。昔の諺に「小人閑居して不善を爲す」と云ふ事も皆同じく一般の人間の人格的性質に缺けて居ることを示したものである。道德は飽までも自己のものである。他人の爲めにあると考へる事は、決して道德の根據にはならぬ。若し道德の根據を始めから他人の爲めと定めて懸れば、勢ひ其の道德は所謂、他律的の道德となる。丁度吾々が法律的の制裁の爲めに己むなく善をすると云ふのと同じ事である。自身の心から爲すのでなければ本當の道德ではない。一種の餘所行き道德である。丁度人が内らに居ては至つて質粗な着物を附けて居る人が外に行くときは餘所行き着物と云ふものを着るものと同じく、道德も餘所行き道德・即ち衆人に見せる爲めの道德ならば、眞の道德といふことは出來ないのである。然し乍ら茲に注意すべき事は、それならば他人の爲めの道德と云ふものが全部惡と云ふのかと云ふと決して

道徳の根柢

然うではない。吾々が友人の爲め、兄弟の爲め、社會の爲めに盡すと云ふことは大切な道徳である。然し嘗だ思ひ誤つてならぬことは、其の社會の爲め、友人の爲、兄弟の爲といふことを偽善的に遣つてならぬ。言ひ換れば、心から誠心誠意遣つたのでなければ其れは一つの偽善である。社會の爲、兄弟の爲、朋友の爲に計つて其れに依つて自己の名譽を博そうなどと卑屈な考へであつたならば其れは偽善である。非人格であると云ふ意味である。更に言ひ換れば、道徳的の根據としての人格と云ふ事が大切であるのである。今日、社會運動等にたづさはる青年が澤山あるが其等の人々が眞に心から社會の爲めを思つて居るか、甚だ怪しい。

現今の我國の一般の道徳的缺點は多く此人格的精神の乏しいと云ふことである。換言すれば、總て人は根強い道徳的の根據を持たないといふのである。又己に顧みて己の人格的責任といふことを充分悟らないことにあるのである。近頃は大部に世間の人が斯る處に心附いて來たと思はるるけれ共、未だ舊來の餘風が残つて居て、兎角、道徳といふものを便宜的に、又悪い意味に於ける社會的に考へて居る人が多い。我國從來の慣習は全く個人の人格的獨立性といふものが缺けて居つて、嘗だ何んとなく御上に頼るとか、大きなものには卷れるとか云ふ様な一種の事大主義

的習慣が多かつたのである。従つて其結果は社會の方からも個人の人格的獨立性を無視する傾向が強かつたのである。其餘風が今尙ほ深く我國民生活の中に刻込れて居る。其結果現今はあらゆる西洋の新しい社會組織を輸入したけれども、其形丈けを輸入して、其れに填る處の國民の道徳的精神と云ふものが未だ充分養はれて居ない。其結果社會の組織を改めても、更に其効果が現はれない。一例を擧げて謂へば、我國のあらゆる代議制が未だに發達せないといふ事は皆此處に原因する。代議制とか、自治制とか云ふ様なことは、其國民個々が充分に人格的獨立性を持つて居なければ出來ることでない。其點に於て西洋人は比較的従來から此人格的道徳を理解し體驗して居つた。故に其効果が擧つたのである。今や我國に於いて普通選舉を叫ばれんとする時代になつて居る。其秋に於て、猶此人格的獨立性が國民精神中に植付けられねば、何を以て國是の基礎を確立し得可きやである。

「人格を養ふ事の第二方法は誠を致すと云ふことである。誠を致すと云ふことは吾々が事に當つて誠心誠意其の一事を爲すと云ふ意味である。此事は東洋古來の道徳に於て非常に喧かましく教へられた處である。此點は西洋に於ても同じ事である。誠を致すと云ふ事は赤心事に當ると云ふ

ことで、其處に利害の觀念、名譽の觀念と云ふ様な不純な心を混じない事を言ふのである。名譽心、利益心といふ様なものがあれば、自然吾々の行は他律的になる。名譽の爲めに駈けられ、利欲の爲に駈られ眞實社會を思ふ事が出来なくなるからである。亦誠心、誠意、一事を爲すと云ふ場合には多くの場合、必ず其一事は爲し遂げらるゝものである。然るに其處に策略をとり、權道をとると言ふ事になると、一時は成功する如くであつても、到底、世間の人々の満足を購ふ事は出来ないのである。若し赤心を以て人に對するときは必ず其心が其結果の如何に係ず他人の心に直覺して圓滿に事が進むのである。昔の人は此の誠心誠意を指して忠と謂つたのである。此の忠の心を以て君國に當れば忠となり、親に當れば孝となり、友に對しては友道となるのである。之等の道德は要するに其根本は一つである。即ち人格的誠意といふものを以て他に對するといふ事である。西洋の倫理學者として有名なカントは矢張り人格の根據を「善なる意志」の上にあると謂つた。「善なる意志」と云ふ事は東洋の言葉では忠と云ふことに當る。忠は即ち心の中と云ふことである。我國の彼の有名なる大鹽平八郎といふ人は此の忠と云ふ事を非常に尊んで、其門に入つて學ぶ所の學生に對して、以下の言葉を用ひたと言ふことである。

入_ニ吾門_ニ學_レ道_ニ以_ニ忠信_ニ不_レ欺爲_ニ主本_一。

以上の二つの方法一つは獨を慎むといふ事、今一つは誠を致すといふ、この二つの方法に依つて吾々の人格的修養が必ず爲し遂げらるゝと信するのである。斯くて養ひ得た人格的精神は有ゆる社會的道德の出發點となるのである。

二 智を行に徹する迄

一

普通人は智識と云ふものと行爲と云ふものとは別々に考へて居る。智識を持って居るからとて必ずしも其れが行爲に現はれるとは考へてゐない。早い話が學者が必ずしも實行家ではない。醫者の不養生と云ふ事も同意味である。然し果して智識と行爲とは全然別のことであるかと云ふと左様ではない。兩者は決して離れて居るものではない。必ず智識が完全になれば行にまで徹して行くべき筈のものである。例へば此處に菓子が甘いものであるといふ事を知つた人は必ず其れを喰ふに相違ない。亦其菓子を甘いと知つて喰はない人は未だ其菓手に對して一分の疑を持つてゐるから

である。若し智を徹底させれば必ず行の上に現はる可き筈のものである。青年諸君が勉強は好い事であると知つて居ても、怠惰に陥るといふ事は、未だ其知に一分の疑があるからである。

昔から智と行とは必ず一致するものだと言ふ事を信じて居つた人は尠からずある。就中、其を信じた有名な人の内ちにソクラテスがある。ソクラテスは道德と云ふ事を色々説明したが、吾々の智識が缺けて居る場合、即ち無智である場合に不道德が起るのであると考へた。若し完全な智識を持つて居る人があるならば、必ず道德を實行するに相違ない。例へば、攝生と云ふ事を善いことであると云ふことを知つた人は、必ず攝生をするに相違ない。生のを喰ふて其れが爲めに病氣に罹つて苦んだ人は、其の生のもが如何に人體を傷付けるかと云ふことを徹底的に知る故に、二度と其物を喰はないのである。之れ明に攝生に關する智識が完全になれば必ず之れを實行する明瞭な證據である。總て道德は其の意味に於て、自己の幸福と云ふことと合致するのである。従つて自己の幸福を希ふものは、必ず道德を守る筈である。之を守らぬのは、未だ其道德が自己を幸福にする事を充分に知らないからである。例へば、此處に一人の青年があつて、自身の勉強と云ふものが、必ず、將來自身の一生の幸福を齎すものだと言ふことを確實に知つたならば、必

ず其青年は他力を俟たずして進んで勉強するに相違ない。之がソクラテスの智行合一の説と謂ひ、又福徳一致説とも云つて有名なものである。

此のソクラテスの説は確に眞理が含まつて居る。然し悲しいことには、實際を見てみると、必ずしも世の中の人は善いことを知つて居つても之を實行しない場合がある。勉強すると幸福になると云ふことを吾々は充分に知つて居つても、其を實行する事が出来ないと言ふのは、何か其處に理由がなくてはならぬ。其一つの理由は元よりソクラテスの云ふが如くに、其將來の幸福と云ふ事を充分に理解せない事にも原因して居るのであるが、併し其れ丈ではない。其外に尙一つ別の理がある。其れは人は永久の幸福と云ふよりも、目前の快樂を欲すると云ふ性質がある。例へば、諸君に向つて二年間勉強すれば百圓を呈する。若し明日ならば五圓を與へると云つた場合に二年後の百圓を待つ者が一人位はあるかは知らないけれ共、多くは明日の五圓を欲する人々であらう。之れは忍耐力が少い事、目前の利益快樂を望んで將來の幸福利益を捨てるといふ一つの間人の弱い性質から來るのである。斯くの如く見來れば、ソクラテスの智行合一説も實際の上に於て困難が起つて來ると謂はねばならぬ。然らば果して此の困難が全く除く事が出来ないか。換言

すれば吾々の智と云ふものを行にまで徹する事が出来ないかと謂へば、決して然うではない。此點を今少しく深く考へて見よう。

二

此智行一致説は東洋の方が比較的昔から發達して居る。支那の儒教の教に於ては昔から知るといふことと行といふことは一つに考へて居つたのである。殊に其の考へを明瞭にしたのは、明の時代の王陽明といふ大人物であつたのである。此人は一方に於て非常な學者であつた。同時に他方に於て非常な政治家であつた。己の學問上から間違のないと考へた事は必ず實行した人である。此の人の遺した有名なる傳習録といふ書物の中に、次の様な事が書いてある。

知者行之始、行者知之成、聖學只一箇功夫、知行不可分作三兩事。

此意味は、知ると云ふことは行といふことの始である。なぜならば知らなければ行ふ事が出来ないからである。攝生が自身の身體に好いといふことを、醫學上から知つて續いて之を行ふのである。然して之を裏から謂へば行といふことは其の攝生の智識が完全に成つた事を意味するのである。以上の事柄を充分會得したならば、其れで聖人の學問といふものが皆な解つた事と同じいと

云ふ意である。昔の孔子や、孟子と云ふ様な人達が、色々吾々に教へた事も、要するに此の一つの事柄丈である。根本的には、其故に智と行といふものは二つの異つた事柄でなく、只程度の問題である。智の方が淺くて行の方が深いといふ丈の相違であるといふことを述べたのである。

此王子の學派の人々は以上の事柄を説明する爲に色々な卑近な例を擧げて説明した。即ち吾々が物を知ると云ふことと、其れが吾々の實行の上に現はれると云ふことは色々な實例に依りて説明が出来る。例へば此處に一つの比喻を以て説明する。昔支那の山里に一人の樵夫があつた。

或日深山に入つた處が一疋の猛虎に出會した。今少しの處で喰殺される處を、漸くのことにして虎口の難を通れ、里に歸つて來た。歸るや直に多くの里人を呼び集めて、其の猛虎の恐しかつた事を里人の前で物語つた。然るに其の大勢の人々が皆冷淡に聞いて居つて、一向恐ろしいと云ふ感を持たない様に見へた。然るに其多數の中に只一人其話を聞いて顔青さめて、恐しさの餘りに震へて居るものがある。之を見た其人は非常に不可思議に思つた。自分の話が何故に斯くも違つた感じを人々に與へるのか。多くの人は冷々淡々として居るのに只一人のみが恐ろしがつて居る事は不可思議なことであると思つて、群衆の去つた後で、其顔青さめた人をとらへて恐怖した理由を

聞いたのだつた。然うすると其人は答へるには自身は嘗て同じく一猛虎に出會したのである。今汝の話聞いて、丁度其時の恐ろしかつた光影が思出されて恐怖したのであると答へた。以上は一つの比喩に過ぎないのである。然し此場合の猛虎に對する人々の智識といふものに、如何に相違があるか、程度があるかといふことが一見明瞭である。即ち嘗だ説明丈で、未だ嘗て虎に出會した事のない人々の虎に關する智識と、一度出會つた人の智識とは斯くも格段の相違があるといふ事を説明したのである。此の場合の話丈で虎の恐ろしい事を知つた人の知識は、所謂紙の上の智識、書物の上の智識と同じであつて、眞の體驗から出た知識ではない。一度虎に出會つた人の智識は之が所謂眞の智識である。王陽明の云ふ所の智識である。即ち徹底的の智識であると云ふことが出来るのである。亦他の比喩を以て以上の智識の程度を説明したものがある。例ば此處に非常に美味なる食物があつて、其食物に關して多くの人々に説明をする。或は化學上から分析をして其美味なるを説明する。又其美味が如何に甘いかといふことを繰返し説明したとして、其聽衆の中で未だ味つたことのない人と、一度たりとも味つた人とは其處に非常な智識の相違が分れる。嘗て其の美味を味つた人は、所謂垂涎の狀を以て其れを聞く。未だ味わない人は其美味なる所以

を到底知る事は出来ない。茲にも明瞭に智識の格段の相違があるといふことが明である。前者は所謂淺薄なる智識であり、後者が眞の體驗の智識である。體驗と云ふことは言ひ換へれば行の上には現はれる意味の智識である。之等の點から見ると王陽明の云つた智行一致の説といふものは實に好く當つて居るのである。

三

以上智行一致の説は支那の學問に於て昔から非常に有名になつて居る處のものである。之れを普通、陽明學と稱するのである。此説は元より今日と異つて、充分學問として、完全な説明ではない。然し其内には侮る可からざる眞理が含まれて居る。進歩した今日の學問から見ても、此王陽明の説は大いに當つて居る。今日の心理學等では人間の智識の働も意志の働も其根本に於ては同一のものであると見て居るのである。只智識の働は意思の働に比して力の弱きものである。意志は其の智識の働の程度が強烈に成つたものを指して云ふのである此の學說から見ても、王陽明が智は行の始め、行は智の成と云つたことは誤りない事柄であるで、知は行の輕小なもの、行は知の深きものと云ふ意味になるのである。即ち智と行とは程度の差である。

此智行一致説は今日は一般の教育上に多く應用されて居る。今日の教授法で、最も新しい教授法と言はれて居るのは、最近教育學の方で筋肉運動主義と云はれて居る事柄である。筋肉運動主義と云ふのは、出る丈け其教へる事柄に就いて生徒の筋肉を働せると云ふ意味である。例へば、語學を教授する上に於て生徒に其の語學の智識を徹底的に教へ様とするならば、當だ目で書物を読むとか、亦、教師の發音を聞かしめるといふ丈けでは足らぬのである。必ず之を手の筋肉や、亦口の筋肉やの上に其れを現はさせる様にせなければならぬ。口の筋肉を動かすといふのは即ち會話を遣らせるといふことで、一旦教へられた言葉を應用して、生徒自身が自身の口に依つて話をするのである。手の筋肉を動かすと云ふ事は、一旦教へられた語學の智識を以て、生徒が自ら作文を造ると云ふ様なことを謂ふのである。即ち筆を用ゆるとか、口の筋肉を用ふるとかと云ふとを指して筋肉運動主義と云ふのである。昔は此の筋肉運動主義と云ふ様な教授法は未だ無かつた。其に反して直觀教授法と云ふものが用ひられて居た。此方法は學ぶ人の目や耳を使ふ丈けで即ち智識を生徒の頭腦の内に入れる、丈けの役をしたのである。然るに今日の筋肉運動主義と唱へられて居るものは、智識を更に吐出させる方法である。一旦、目や耳に依つて教師から與へられた

智識を、更に生徒が自身の筋肉を使つて其れを外に出す事を云ふのである。其興へらるゝ處の智識よりも、生徒自身が活用する處の智識を重んじて行く方法である。茲に謂ふ與へられたる智識

と云ふのは、前に述べた淺薄なる意味の智識である。筋肉に依つて活用されたる智識と云ふのは即ち行の智識又意志的智識を云ふのである。即ち深い體験的の智識を云ふのである。

此新しい教授法は一言で謂ふと、從來の教授法が極めて淺薄な記憶的の智識を學生に與へて居つたに反して、更に深く行即、體験の上に現はるゝ智識を養ふの目的として居るのである。

體験と云ふ事は淺薄な智識は單に頭の中に止まつて居るに反して、身體中に活きゝした智識を蓄へることを謂ふのである。總て圖に示せる様に、人間の智識は必ず一方の感覺神經から入つて、他方運動神經に出て行くのである。入つたも



のが出ると言ふと、其折角入つた智識が消滅する様に思ふのは大なる誤りである。精神上の働と云ふものは、一旦入つた智は幾ら出しても決して消滅するものではない。反つて、出すことに依つて、益々智識が磨かれ又確實になつて行くのである。昔の教授法は圖に示せる様に、學生の頭の内に智識を感覺神経によつて入れる丈けに骨折つたのである。然るに最近に於ては、反つて學生の應用力に依つて、智識を外に出す事を主とする事が大切のようになって來た。例へば英語を教へんとするには音だ本を教へる丈けでは駄目であつて、會話や、レシテイションや、更に進んで英語を用ひ芝居をする事まで必要になつて來た。芝居と云ふものには、身振、即ちゼスチユアーと云ふものが必要である。英語を話しながら身振をすると、口の筋肉と同じに身體中の筋肉を動すのである。其結果、其學生の英語の智識が體驗となつて現はれて來る。體驗と云ふことは言ひ換れば行爲の上に現はれた智識と云ふことである。而して其れが眞の智識であるとして見ると王陽明の言つた知行合一と云ふ説が即ち今日の新教授法たる筋肉運動主義に當るのである。従つて陽明學と云ふものは大に味ふべき眞理があると云はねばならぬ。亦前に述べた例に於て、虎の恐ろしきを知つて居る人は、只其の恐ろしきことを目や耳を使つて他人から教へられた丈では

判らぬ。本の上で虎のことを教へられても眞の虎の恐ろしさは判らぬ。只一度、山中で虎に出會つたらば、其際、全身の筋肉を動して其の虎の恐ろしさを體驗するのである。之が眞の虎に關する智識である。以上の様な教育上の實例は世には色々ある。極く簡單なものを採つて謂へば、例へば水泳に關する智識である。所謂疊の上の水練は實際何んの役にも立たぬ。例へば、大友流の水泳に従つて手足の動し方を教へられ、身體と手足との關係を如何なる角度に動かすと云ふようなことを親しく教師から學んでも、實際の水中に溺れた時に於ては其智識は何の役にも立たぬ。然るに一旦水中に溺れて、其刹那に習ひ得た處の水泳術は、以上の疊の上の説明に比して遙に役に立つ。之も要するに水中に於ける全身の筋肉を動して得たる體驗であるからである。即ち淺薄な抽象的の智識でなくして、行の智であるからである。亦、例へば木馬を飛ぶ場合、亦或は機械體操の如き場合に於て、好く教師が要領と云つて居る事も一種の體驗的智識を謂ふのである。音だ科學的亦分析的の説明では此の要領は知り得られない。必ず自身で實際に行つて見て、始めて得られる智識である。之等の實例を深く考へて見ると、明に人間の深い亦完全なる智識と云ふものは行の上に、即ち體驗上に現はれると云ふことが一見明瞭である。青年諸君が學校に於て學べる智識は

大方は淺薄なる智に止つて居る。嘗だ書物を讀んで之を腦中で記憶して居ると云ふに止まる。少しく極端に謂へば、試験の爲めの勉強智識である。故に一度試験が済めば皆消滅してなくなる。行の智は試験の有無に關係せない。終生忘る可からざる智となるのである。此種類の智識を養はなければ人間の一生の幸福は決して得られないのである。

廣く道德に於ける智識と云ふことも矢張り此意味である。道德上の智識は就中行の上に現はれなければ眞の智識といふことが出来ない。知つて之を行はないのは知らないのと同じ事である。其故に西洋に於ても東洋に於ても、古來道德を實踐といふことに重きを置いて來た。前に述べた處の王陽明の説の如きは、就中之に重きを置いたのである。昔徳川時代に始めて我國に陽明學を起したのは中江藤樹先生である。先生は近江聖人と謂はれた人である。此人が其門弟を教へるに常に其心懸けで教へて居つた。中江藤樹に弟子の熊澤蕃山といふ人がある。此人が始め青年の時代に岡山を出て京都に上つた。當時京都の學者は非常に澤山居た。然し、何れも自身の心に叶ふた學者が見當らなかつた。然るに或日他所に出て歸る時に一挺の駕籠を雇ふて宿に歸つた。歸つて間もなく夜中に宿の戸を敲くものがある。宿の主人が出て見ると前の駕籠擔である。其駕籠擔

の云ふのには自身が宅に戻る途中駕籠の中を調べて見ると、御金の入つた胴捲が忘れてあつた。之は定めし前の御客の所有品であらうと思つて、取敢ず急ぎ持つて來たのであると告げた。蕃山は其由を宿の主人から聞いて非常に驚いた。眞に今頃にしては珍しい心懸の駕籠擔である。駕籠擔風情にしては餘りに奇特であると思ふたので、直に其駕籠擔を呼び止めて如何にして斯くも心懸が好いのであるかと聞いた。處が其駕籠擔が云ふのには私は江洲小川村の者である。私の村には近江聖人と謂はれる中江藤樹先生が居られて、村の者は皆其の先生の感化を受けて居る。私の村には泥棒も居なければ自然、夜も戸を開け放て寝る位で、私風情のものも其の御蔭で正しい行をするようになったと答へた。蕃山は非常に感心して幾何の金を與へた。其翌日、早速小川村に出掛けた。中江藤樹先生の門を敲いたが、先生は謙遜にして容易に學を教へ様とは云つてくれない。仕方なしに數日間、晝夜其門に佇んで去らなかつた。之を見た處の藤樹先生の母が我子に説いて是非蕃山に會て遣れと云つた。其れが爲めに遂に許されて藤樹先生に面會をすることを得た。藤樹先生が蕃山に謂ふには御前は俺に會つて何を學ぶと云ふのであるかと。蕃山答へて、忠孝の道を學びに來たと。暫く黙して居た藤樹先生は君に兩親があるかと問ふた。蕃山は兩親は居る

けれども今は遠國に住つて居ると答へた。處が藤樹先生は立所に君の志は甚だ宜敷くない。孝の道を學ぶに親を棄て、置いて學ぶと言ふ事は出来ない。親に仕へるのに眞心を以てするといふ事が孝の學問である。其外に孝の道といふものはない。嘗て書物の上で學んだものは眞の孝の智識ではないと云つた。蕃山大いに感心して直に其より兩親の元へ旅立をして、兩親に會つて共事を話し、遂に兩親を伴ふて再び藤樹先生の下に來たと云ふことである。之等も明に智行一致の説を藤樹先生が説明したのである。

偕て以上述べた様に人間の智識には明に深淺強弱の度がある。淺弱の智は眞の智識ではない。只だ頭の中に貯へた記憶的の智識に止つて居る。従つて多く實際の用をなさないのである。之に反して深い強い智識は身體全體に漲つて居る智識であつて、人生は此の種類の智識を養成する事が何より大切なのである。世に修養と云つて居る事も、此外にはないのである。其れ故に昔の人は人間の智識を上中下に區別して説明した。其の一例を擧げると孔子の如きも論語の内に述べて居る。

子曰、知之者不_レ如_二好_一之者、好_レ之者不_レ如_二樂_一之者。

此意味は知ると謂ふことよりも、好むと云ふ事の方が上手である。亦好むといふことよりも樂しむと云ふことの方が更に上手であるといふことを謂つたのである。之れを言ひ換れば人間の智識には上中下の區別がある。謂はば、下智は知ると云ふこと、中智は好むといふこと、上智は樂しむといふことであるといふ意味である。孔子が知ると言つたのは書物を讀んで知るといふ位の智識で、云はゞ學校で習ふと云つた位の智識を言つたのである。此種類の智は前に屢々言つた様に極めて淺薄なる智である。其より一段高い智は好むと云ふ智である。例へば、吾々が或一事を非常に好んで遣るといふ様な場合、例えば子供の時に非常に繪が好きであるとか、又數學が好きであるとか、文學が好きであるとか云ふと、學校で習ふ前に自ら進んで其繪や、數學や、文學を一生懸命に勉強する。其結果は單に試験の爲に遣つた所の他の學科の智識よりは非常に早い速力で發達する。諺にも「好きは上手の始め」と云ふのも其意味である。多く世の中の名人と云はるる人は皆此種類の智を持つて居る人である。先づ普通の人には、此程度の智識を養ひ得たならば、凡そ行の智に達するのである。其上に孔子は最も高い智識として樂むと言つたことは、殆んど常人では其境界は知る事が出来ない。蓋し此種類の智識は絶對的のものであるのであらう。凡そ察す

るに、樂しむと云ふ事は我を忘れて其一事に没頭することを云ふのであらう。此處まで進めば、其一事と我とは全く融合する状態になる。此處に到つて智識の極致である。行と知とは此處に至つて全く一致する。

以上の智識の程度に就いては、昔の宗教家も此事を謂つて居る。例へば親鸞上人の初めた淨土眞宗に於ては教行信證と云ふ教へがある。其意味は矢張り孔子の智、好、樂の三の區別の様に、先づ第一に教と謂ふ事は、一般的の智識に當り、次の行と云ふ事は體験的智識に相當し、更に其奥に信及證と謂ふ種類の絶對的智識があると教へたのである。佛を只だ書物で知るといふのは未だ淺薄な智識である。其智識が深くなるに従つて遂に信仰といふ程度まで進む。更に進んで佛のある事を證明し得るといふ意味である。普通の人は宗教は迷信であると云ふけれども、其れは間違つた事である。眞の智識の終局は、信仰に到着するのである。例へば朝太陽が東から昇ると云ふ事を誰か疑ふものがあるか。之れは正に信仰であると謂はなければならぬ。決して迷信と言ふとは出來ない。以上に依つて吾々の智識は次第に深くなるに従つて、益々智識が完成して行くのである。人生の目的は此の最も深き智識を養ふ事にあると謂はなければならぬ。

三 所有本能と創造本能

人類の色々の本能の内ですべて所有本能と創造本能とは社會的文明に最も深い關係を持つて居る。吾々が社會を造るには、個人的本能は直接社會生活に關係がない。其れに反して、社會的本能と云ふものは社會を構成する上に於て非常に重要なものである。例へば名譽的の本能であるとか競争的の本能であるとか言つた様なものは其の例である。自身の名譽を欲する所から他人に直接、間接影響を及ぼす。其が相寄つて社會的活動をする。或は政治的活動とか、或は軍事的活動とか、皆之等は人間の社會的本能から生ずるものである。以上の社會に影響を及ぼす本能の内ですべて所有本能、創造本能と云ふ二つのものは特に今日の社會經濟に深い關係のある本能である。今此の兩本能に就いて少し述べようと思ふ。抑も廣く近世の人類文化を研究して見ると殆んど此の二つの本能が其の文明の基礎になつて居るのである。就中歐羅巴の戰爭前迄と云ふものは此二つの内ですべてとして所有本能の方が多く社會生活の基礎を造つて居つたのである。殊に第十七八世紀頃からは

其の傾向が著しくなつて來た。斯る社會的傾向は依つて存する原因があつた。其の原因の一つは第十八世紀に於て英國を始め、歐洲大陸諸國に於て工業革命が起つて、機械工業が一時に盛んになつたと云ふ事である。今一つは第十五六世紀即ち文藝復興期以後現今に到る迄、文明の特色が著しく個人主義的に傾いて居たと云ふ事である。

先づ其の後の方から謂へば、近世の文明は世人の熟知せる如くに、文藝復興期と稱して古代希臘の文明が復興したのである。中世期に於ては基督教の文明が盛んであつた爲に、一時希臘の文明が社會地平線下に潜むで居たのである。其れが一時に希臘文明に成り變つた事を文藝復興と云ふのである。文藝復興と云ふ事は嘗だ希臘の文學藝術のみが復興した様に考へられるけれども其れは誤りである。實は希臘文明が文藝と云はず政治、科學、教育、哲學あらゆる方面に現はれて來た事を云ふのである。希臘の文明的精神は色々の特色があるが一言にして云へば個人主義的であると云ふことが出来る。例へば個人日々の經驗を重んずるとか、又日常生活に於ける科學的精神を重んずるとか、或は亦人間の自由競争を重んずるとか、乃至教育上人々の個性を重んずるとか云ふ様な點にあつたのである。従つて何事に就いても個人と云ふ事を中心として考へると云ふ風があ

る。其結果、社會文化といふものも要するに個人の自由意志を重んじ、自由競争の精神を尊重すると云ふ風であつた。此精神が凡そ第十五六世紀から次第に近世に掛けて世の中に流行して來た。其上に第十九世紀になると科學的進歩と共に、彼のダウインの生物進化の論が現はれた。之が又當時の歐羅巴のあらゆる社會生活に非常な影響を與へたのである。處が此のダウインの生物的進化説といふものは、之れ又個人主義を鼓吹する處の大いなる原動力となつたのである。何んとなれば生物の進化と云ふ事は進化其ものは生物全體の事柄であるけれども、實狀を研究すると生物が露骨な生存競争をして行く事から進化と云ふ事が現はれて來る。言ひ換れば、力の強い生物は力弱き生物に打勝つて己の生命を保存してゆく。尙そのみならず、己の子孫を繁榮さして行く。之れに反して弱き生物は自ら強き同類に敗北して是の地上から消へて行くのである。其結果、進化と云ふことが起るのである。此の進化の原則を人類社會に用ひるならば自然、個人主義になるのである。即ち社會を發達する爲めには其れ丈け人が勢力を各自に得てゆくと云ふ事が大切である。此の考へから政治でも、又教育でも、又經濟に於ても、總て世の中の組織が輓近になつて益々個人主義になつて行つたと云ふ事は充分察せらるゝのである。就中、人類の經濟的生活に於ては、

此個人主義が著しくなつて來た。生存競争と云ふことが意識的たると、無意識的たるとは問はず、益々盛んになつて來た。従つて世の中は個人的努力に依つて富の獲得と云ふ事が流行するに到つた。此の事實と關連して一方に於ては輓近所有本能が人類の心に益々増加し來たのである。

元來人間が所有本能を持つて居ると云ふ事は一方から謂へば非常に好い事である。然し他方から見ると屢々其れが爲めに人類生活の幸福を破壊する様な事がある。元來人類の所有本能は時としては非常に極端に走る事がある。殊に前に述べた如くに、近世の文明が個人主義になつて來たと云ふ事は益々此の人間の所有本能をして促進せしむる事になつた。殊に之れが第十八世紀以來の工業革命の結果、所謂機械工業と云ふものが盛んに起つて來て、資本主義の經濟組織と云ふものが著しく發達して來た。此の主義はもとより長所もあるけれども、人間の所有本能と云ふ方面からのみ考へて見ると時として非常に人類生活の全般に對して脅威となる事がある。資本制度の下に現はれて來る資本家と云ふものが管だ己の所有本能の満足を目的として出來る丈け生産高を増加する。費用を少くして生産物を廉價に市場に販賣すると云ふ風になる。其の結果は資本主の懷中には多くの富が益々増加するけれ共、其下に使はるゝ處の一般の労働者と云ふものは、資本家

が利益を吸収すればする丈け、勞銀を低下せしめられる。其故益々生活に困難になつて來る。その上に今迄の労働者は未だ現今の如く組合組織を造らず全く自由労働者であつた場合に於ては益々其の現象が著しくなるのである。何んとなれば自由労働者間には絶へず個人的競争があつて、其れに乗じて資本家は労働者の勞銀を低下する様にするからである。斯くて第十九世紀の末二十世紀の始めになると資本階級と労働階級との貧富の懸隔が益々甚だしくなつて來た。遂に其結果が現今の種々なる經濟上の社會問題を起すに到つたのである。謂はば今日の社會問題は殆んど此人間の所有本能と云ふものを動機として現はれたものと云ふことが出来る。即ち所有本能が社會の正道を通らなくて多少極端になつたと云ふ事が現代人を悩す社會的煩悶となつたのである。之等を以て見ると所有本能と云ふものは餘程注意して發達せしめなければ人類の社會生活の上に大なる防害を爲す場合が起るのである。

二

以上の如く人類の所有本能は稍もすれば不道德的となつて、社會問題を引起す事になるのである。然るに之れに反して一般に創造本能の方は遙か道德的性質を持つ場合が多い。所有本能の方

は茲に假に十の富があるとして之れを十人の人が所有しようとする場合に、各々の人が一の富を持つと云ふことになる。此の場合には富の分配は平等で、自然十人の間は平和である。然し若し一人の強者が居て、他の九人に打勝つて一人で二の富を所有すると云ふ事になると、少なくとも十人の中の一人は全然富を所有せないこととならざるを得ないのである。従つて其れが世の中の亂を起す原になるのである。然るに創造本能の方では十の富からして更に十一十二の富を殖してゆくと云ふ働きである。一人の人が非常に優れた創造本能を持つて居る場合に、更にそれに一の富、二の富を附け加へて行くと云ふ事になつて、所有本能の場合の如く富の分配から起る争は無い譯である。尤も世の中には一定の物質があつてそれを増加すると云ふ事は困難である。然し其の自然的物資を元として種々なる發明、發見をすると云ふ事になると、凡そ從來の物資を二倍にも三倍にも爲す事が出来るのである。其れ丈け人類の幸福を増進する事になる。

偕て創造本能と云ふ事は實際色々の方面に現はれて居る。例へば、學問上の研究、又機械の發明土地の發見、鑛脈の發見、化學上の發明其他醫術文學、藝術等に從來非常に多く現はれて居る。例へば經濟的の方面に於て化學的發明であるとか、又工業の場合に於ける機械の發明の如きは、

從來何れ位經濟界の生産力を増加したかしのれない。第十八、九世紀以前に於ては今日の如き機械工業が未だなかつた。従つて、生産品は家内工業に依つてのみ造られて居た。従つて其の生産力は到つて貧弱で又生産額と云ふものは殆んど云ふに足らない程であつた。然るに一時に生産額が増大した。以前の家内工業と比すると殆んど天壤の差別があつたのである。斯の如き人類の福音は皆當時の機械工業上の發明發見の賜であつたのである。

現今は創造本能と云ふことを主として經濟的に見て行くことが流行するけれども其丈けでは未だ充分でない。寧ろ創造本能は精神上的の事業に於て多く見る處である。就中是を道德的に見ると多なる興味がある。廣く精神的に見て創造本能は先づ藝術、文學詩等の上に現はれる。音樂の如きも天才の豊かな創造が世の傑作として古來残つて居る。ウェトウベンやワグネル等は實に音樂的大創造家であつた。古來有名なる作曲者は皆創造的心理を以て作曲をした。作曲する人の心の中には絶えず音樂が鳴り響いて、それが夢の如くにして曲に成つて現はれたと云はれて居る。斯の如き天才の創造的心理は美術彫刻の上にも古來多く現はれて居る。例へば彼のミカエルアンゼロの如き天才の彫刻家は、一つの大理石から飛ぶ石の斷片が恰も雨を降らすが様で、瞬く間に其の一

つの大石片から人像が表現したと傳へられて居る。其の瞬間の天才の働きは創造本能の最高度に働くときであつて、殆んど後ちから見て奇蹟の如くである。古來の文學者、詩人と云ふ様な人の心の働きも、一度筆を採れば忽ちにして詩想が油然として現はれて來る。其の創造作用は眞に驚嘆す可きものがあつたのである。

以上の如き文學者や藝術家の創造力は一般平凡人の持つて居る所有本能とは其價値に於て非常なる相違がある。文學者、藝術家は例令へ貧艱であつても其れを憂とはせない。絶えず心に創造の歡喜を湛へて、平和と楽しみに満ちた生活を續けて居たのである。平凡人は只だ所有本能のみであるから日日營々致々として其所有慾のために苦しめられて居る。是の兩者の心的状態は眞に天地の違ひがあると言はなければならぬ。

三.

以上述べ來たつた處の創造本能は廣く考へれば、單に文學藝術の天才のみに就いて云ふ必要がない。例へば學者、宗教家、教育家の如き者も皆均く創造の世界に住んで居る。學者は己の名譽と利益を捨てて、日日眞理の發見の爲に努力をして居る。宗教家は日々神の心を多くの人々に傳

道することの喜びを以て日々努力して居る。教育家は自己の教育的理想に依つて、多くの天下の子弟を教ゆる事を楽しみにして居る。之れ等も皆一種の創造であつて、決して所有本能に依つて行はるゝ事柄ではない。然し世の中には金の爲の學問を爲し、名譽の爲めの宗教や教育を行ふものも尠からずある。之れ等こそ創造本能の學問、宗教及教育に非ずして、實だ似而非なる所有本能の學者であり、宗教家である。昔の宗教的大人物は多く所有本能を捨て創造本能を逞しくする事に依つて多く其事業を成就したのである。例へば基督や、釋迦はあらゆる己の名譽と所有を捨てて傳道に従事した。神を信する者は常に「神と財とは兼ね仕ふる事能はず」と言つて、出來るだけ所有本能を捨て、創造本能を増進する事を人々に忠告した。彼等の言ふ事は符を合する様に己れの私有的富を捨て、神佛の心を己れの心とす可き事を述べたのである。

元來、所有本能は吾々の自由を阻害する場合が多い。吾々が或一事を決行せんとする時に若し多くの財産が有る人ならば、其れが爲に其の事業を決行する勇氣が出ない。一般の人々は己れに財産の無い事の爲に不自由を唱道するけれども、其の意味の自由は決して眞の自由ではない。只だ財産は精神的の自由を助ける手段になるけれども、斯る場合は極めて尠い。反つて財産の有る

爲めに己れの自由の精神が囚はれて、新しい創造的作用を妨止する事になる。寧ろ創造は貧者の特權である。世の中に發明家、發見家と稱せらるゝものは未だ嘗て富者で有つた例はない。寧ろ艱苦と戦つて絶えず發明發見を樂しむ人が眞の創造的天才者である。其の意味に於て創造本能と自由と、又所有本能と束縛とは多く連絡のあるものと言はなければならぬ。

昔の學者は屢々、此の創造の樂しみに就いて物語つた。人間の眞の心の樂しみと云ふものは多く所有本能からは現はれない。反つて創造本能から現はれると物語つた。一例を云へば貝原益軒の如きは其の著述の樂訓の中に清貧の樂しみと稱して此の創造の樂を論じて居る。彼が學者として日々明窓淨机に向つて書を繙く事を樂しみ、又時としては山川を跋涉して、名所古蹟を訪ふ事を人生唯一の樂しみと考へたのである。斯の如き樂しみは何程の金錢を費す事なく、亦酒食の樂しみと異り己れの身體を害ふ事なく、眞に清貧な樂しみであると言つた。元より其の意味は直接の創造の樂しみではないけれど、之れ亦一種の創造の樂しみと云ふ事が出来る。即ち他人の所有を羨む事なく、古今聖賢の持つて居つた其の創造的精神を間接に己れの心に植へて、之れを樂しむ意味である。總て創造の樂しみは人の貧艱と云ふ事と常に聯絡して居る。貧艱と云ふ事は一

面から見ると物質的の不自由の如くであるけれども、之れを他面から見ると心は常に所有慾の爲に苦しめられる事なく、極めて豊かな心の自由を味ふ事が出来るのである。若し人間が所有本能と云ふ事に依つて己れの貪慾を逞しくするならば、常に煩悶苦痛の日を送らねばならぬ。益軒も言つた様に天下の山川風物は誰の所有と云ふ事なく、吾々は之れを自由に樂しむ事が出来る。若し之れを所有して他人の樂しみを妨げ様とするならば、反つて己れの心に苦痛が生ずる。東海道に於ける秀麗なる富士の山頂は誰一人の所有品でなくして、多くの旅人の目を樂しませる。之れを天下の富豪が假りにも己れの所有とし他人の見る事を妨げ様としたならば、幾億幾十億の財力ありとても其の所有慾を完ふする事は出来ない。實に之れを以て考へても創造の樂しみは無限にして、所有本能は人間苦痛の本源であると云はねばならぬ。

古來青史に名を止めた人々は多く創造本能の優れた人であつた。昔から金持で歴史の上に名を止めた人は無い。總て文化と云ふ事は人間の創造と云ふ事と密接なる關係がある。所有と云ふ事は之れに反して、直接文化に影響を與へる處がない。前に述べた發明發見家、學者、又文學、藝術の天才は直接に人類の文明を増した人々であると云ふので、尙今日も歴史の上に於て其名を殘

して居る。是は世界の人類が感謝の意を表して居ると同じである。然るに古來の多くの富豪は己れ一代に於て豪奢なる生活を營んだけれども、世界の人々は之れに對して何等の感謝の意を持たなかつた爲めに遂に皆歴史上から没したのである。之等を以て考へて見ても、創造本能が所有本能に比し如何に道德的であるかと云ふ事が知らるゝのである。

以上述べた處に依つて創造本能は比較的道德的である。即ち社會の文化に寄與する處が多くて所有本能は比較的文化に寄與する事がないと云ふ事が出来る。然し本能其ものを直に善惡と見る事は間違であつて、嘗だそれが社會國家の目的に叶ふ結果を齎すかと云ふ事に依つて善惡が定まるのである。而して其の社會の目的は時勢に依つて變化する。正に現代は所有本能よりも創造本能の必要な時代である。自から創造本能が所有本能に比して道德的であると謂はるるのである。

四.

此の兩本能に就いては現今の思想界に重きを爲して居る處の英國のラッセルと云ふ人が詳しく論じて居る。ラッセルは社會改造の原理と云ふ著書の中で、從來國家の組織は總て所有本能の上に造られたものである。従て世の中の人々は總て己の私慾を懲いまいにし、其結果、個人の間には

争闘が起り、國家の間には戦争が起る様になつたのである。又經濟上の資本制度と云ふものも其れから始つたものである。又軍國主義と云ふ様な政治主義も現はれて、世界の各國家の間に國家的私慾に基く戦争と云ふものが頻りに現はるゝに至つたのである。其故に今後は創造本能と云ふものを主眼として、人々の創造的能力を發展せしめなければならんと言ふことを論じたのである。此の議論は現代に能く適中して居る處がある。然し他面から見ると此の説は盾の一面を見て他面を閑却した嫌がないではない。

元來創造本能と所有本能と云ふものは名目上區別し得るものであるけれども、人間の心の中に現はるゝときには多くは此の兩本能が連絡して現はるゝのである。即ち創造本能は絶えず所有本能の助を得、又刺戟を得てそれ自らの發達を見るのである。其の關係を最も明瞭に觀察し得るのは兒童の心理發達状態に於て見る事が出来る。兒童の心理は其慾望の形式が矢張り、初めは所有本能となつて現はれるのであつて、早や二三歳にも成ると、頻りと他人の持つて居るものを欲しがる。兄が持つて居る菓子を己の分前以上に欲しがる。此の種の所有本能の傾向は年を増すに従つて次第に増加する。然るに六七歳の頃になるとその慾望の形式が尠しく變つて來て、創造的傾向を帶

て来る。六七歳の兒童は何事も自身の手によつて一事を成就する事を悦びとする様になる。或は
風を飛ばし・繪を畫き・玩具を造り、其の他、歳長するに及んで種々なる手工的楽しみをする様
なる。今日の小學校に於て手工科と云ふ學課目の置かるゝようになったのは皆此の創造本能を發
達せしむる目的である。一介の粘土を以て自己の好む儘に、或は馬を造り、或は犬を造り、或は
人間の胸像を造つて、彼等は己の創造本能を満足させる。此の創造本能は歳長するに及んで、益
々複雑になり、亦高尚になる。成長したる兒童は或は軍人遊びをして一定の軍略を創造して敵を
攻撃する事を悦びとして居る。亦更に進んでは學問的研究、又文學上の作品を作つて彼等の創
造本能を満足させる。斯の場合に當つて全々所有本能が皆無であるかと謂へば、其の實は非常に所
有本能を發揮するのである。その場合の所有本能は皆他人の所有を掠取るのを目的とするので
はない。言ひ換れば他人の所有して居る完全なものを欲しるのではない。嘗だ欲しがるのは己れ
の創造本能を満足させる爲めの資料を欲するのである。例ば粘土を欲しがるとか、或は又玩具を
造る木片を欲しがるとか、總て未成品を所有したがるのである。之れを要するに己れの創造本能
を満足させる爲に所有本能が同時に兒童の心に働いて居るのが分るのである。此の關係は敢て兒

のみではない。總て人間一般を通じて皆同しく現はれてる處である。斯の如く考へ來たれば、彼
のラツセルが言ふが如く全く所有本能を捨て創造本能のみを助長すると云ふ事は到底出來難い事
である。例令へ人類の創造本能を助長するにしても、必ず一方に於て所有本能と云ふものをも同
時に發達せしむることが、擴い意味に於ける人類教育の原則でなくてはならぬ。

之れを廣く社會の組織として考へて見るときには、此の兩者の關係と云ふものは常に離して考
へることは出來ない。絶えず一方に於て創造本能を刺戟する様な社會状態が必要である。同時に
他方に於ては、其の創造能力を援助する處の一般所有本能と云ふものをも社會制度の上から保護
して行かなければならぬ。然し乍ら現代世界の趨勢は所有本能と云ふ事に重きを置くよりも先づ
創造本能と云ふものを中心とす可き時代が現はれて來た。之れに依つて今後の政治、法律、其他
あらゆる社會組織を改造して行かなければならぬ。例へば從來の一般社會組織に於ては、社會に
於ける個人の所有權と云ふものを最も強く考へられて居つたのであるけれども、今後は其の所有
權以上に人々の創造權と云ふものを重んずる必要が現はれて來た。例へば發明發見に關する特許
權、又學者の著作權、一般工業商業上の發明發見に關する創造的權利を大いに保護して行かなけ

ればならぬ。

現今社會問題の中心となる處のものは經濟上に於ける資本と勞働の對立問題である。此の問題は今尙世界一般の非常に困難な問題になつて居つて充分の解決が就かない。我國の如きも從來この問題の爲に非常に國家的の惱を感じて居る。然し之れを解決するに就いても、單に經濟上の組織からのみ考へては甚だ困難なのである。寧ろ以上述べた様に人間の創造本能と所有本能との關係の上から考へるならば、此の社會問題が解決せられない譯はないと信ずる。即ち資本家と云ふものが勞働者の創造本能を尊重し、亦勞働者は其の創造を援助する處の資本家と云ふ者を尊敬すると云ふ事に於て、必ず其解決の糸口を見出し得るものと信ずるのである。

四 現代より見たる武士道的精神

一、

武士道と云ふ事に就いては現今の人は、一般に最早や世の中に用の無い事柄であると考へて居る。昔或武士階級と云ふものがあつて、其の階級を維持する爲めに武士道と云ふものが必要であ

つた。今や人類生活が改つて、總ての人が階級的精神を必要とせない時代であるから従つて特に一階級を保護する道徳は必要でないと考へて居るのである。然し其等の論者に今日程、組合や、團體や、國家聯合等の如き團體主義の多く必要とする時代は他にないことを知らしめたらば蓋し思半に過ぎるであらう。武士道的精神は今日は非常に必要になつて居る。只だ其精神を現代に活かすと云ふことが其以上必要のことである。即ち現代の鞞に入れて、之を更に新に造り改れば武士道的精神は正しく現代に於て活用し得べき大精神であると信ずるのである。

從來我國の武士道と云ふ事に就いては、世の中に誤り傳へられて居ることが多い。武士道と云へば例ば武士の切腹する事だと直ちに誤解する。武士は「死を見る歸するが如し」とか、又「死を鴻毛の輕に比す」とか、總て死と云ふ事と直ちに聯想する様になつて居る。其れ故に外國人は兎もすれば、武士道と云ふものは全く非人間的精神であると考へて居る。斯の如く武士道は世の中から非常な誤解を蒙つて居るのであるが、其内容をよく研究して見ると決して斯の如きものでない。寧ろ現代に共通した精神があると信ずるのである。

二

先づ其の第一に武士道の現代に適用し得る精神は社會奉仕の精神である。武士道に於ては社會奉仕と云ふ言葉は用ひない。其の代りには奉公と云ふ言葉を用ゐる。奉公と云ふ言葉は寧ろ今日の奉仕と云ふ言葉よりも文字としては遙か好い文字である。己れのあらゆる利慾を抑へて國や君の爲に一身を捧げると云ふ事を奉公と云ふ。今日の社會奉仕と云ふ事も、實は此の武士の奉公の精神と其の根本に於て共通である。

現今は歐羅巴の大戦を劃して世界のあらゆる社會状態は一變して來た。戦争前は總て個人主義であつて善にも惡にも自由競争と云ふ事が流行したのである。例ば我國に於ても明治維新の際は西洋諸國に於て最も此の個人主義の盛んに興つた時代であつたから當時の社會現象は總て西洋の個人主義、自由競争を金科玉條として輸入したのである。其故に當時の武士道の如きは、此の個人主義に最も反對した思想精神であつたので、世人は武士道を弊履の如く捨てさつて顧みなかつた。武士道は個人主義に反對して、飽までも全體主義を採つた。従つて、國家主義、君主々義を其中心精神としたのである。蓋し、其點に於ては到底個人主義と相容ざるものである。故に當時のハイカラを以て任じた人々は武士階級の打破を叫ぶと同時に、直ちに武士道的精神をも放棄したの

は當然の事柄である。然るに今や時勢は逆轉して世界は總て個人主義が衰へ、反て全體主義へと戻つて來た状が見ゆるのである。其がため我邦に於ても此の世界の大勢に應じて再び一種の武士道的共同主義の精神が必要になつて來た。それが證據には明治此方、獨立自營の精神を以て個人主義の上に立つて巨萬の富を蓄へた人が、今日に於ては、恰も社會の共同の幸福を無視して居る不道德漢の如く罵らるゝ様になつて來た。之等は皆時代の趨勢であつて、從來の個人主義と云ふものか衰へて全體主義、共同主義と云ふ様な考へが盛んになつた證據である。今日の社會主義と云ふが如きものも、主として經濟的意味であるが矢張り時代の趨勢で、個人主義に對する社會共同主義と云ふことを主張するものである。之等の點から、今日の社會が要求して居る道徳は、出來る丈け個人の生活と云ふものを質素にして、社會全體の爲に又國家全體の爲に奉仕せなければならぬと謂ふ考へになつて來た。其れからして今日社會の連帶責任と云ふ様な考へも益々唱導せらるゝ様になつた。

翻つて武士道の精神を考へて見ると矢張り之れと同じである。武士は出來る丈け、私的生活を質素にし、其の餘力を常に君國の爲に用ゆると云ふ考へである。武士が金錢を輕んじたと云ふ事は

只だ表面の事實であつて、其の精神とする處は金錢を愛する處の私的精神を出来るだけ少くして、常に國家の爲に、又公共の爲に、己の身を献げん事を願つたからである。武士の忠義の心と云ふものは今日の社會奉仕の心である。社會全體の爲に、國家全體の爲めに、又國家を代表する君主の爲に、私身を献げると云ふ心を指して言ふのである。斯の如く考へ來たれば、歐洲戰爭以後の最近の世界的道德と我國の過去の武士道の精神とは正に一致するものと謂はなければならぬ。

三

次に武士道の精神を現代の道德的精神に活用し得る點は、内面的生活の尊重と云ふ事である。現今の世の中は外面的生活を重んじ益々内面的生活を輕んずる様になつて來た。人は只だ成功に忙しく、己れの内面的修養と云ふ事を顧みる人が段々少くなる。斯く云ふ内面的反省力の缺亡するは二つの原因から來る。一つの原因は現今流行である處のデイモクラシーである。眞のデイモクラシーでなくて、半可通のデイモクラシーが流行して居る事に原因して居る。眞のデイモクラシーと云ふ事は、各個人の充實したる内面的生活を尊重すると云ふ意味であつて、即ち各人の人格的道德を重んずると云ふ事である。然るに現今我國に多く誤解されて居るデイモクラシーは營

だ物質的亦經濟的の平等と云ふ事で、云はゞ人は皆平等に享樂を爲す可きものであると言ふ位の意味にしか解釋せられて居ない。従つて世の中の人々は他人の物質的生活を羨望し、又己の享樂の足らざる事を悲しんで居る。斯くて益々人々は外面的、物質的になりつゝあるのである。今一つの原因は現代人が餘りに成功を急ぐと云ふ事である。今日の成功と云ふ意味は一攫千金を夢見る事で、即ち投機的成功である。其結果は忍耐とか克己とか云ふ事が漸次失はれて番々外面的生活に囚れつゝあるのである。斯る時代に於ける最も大切なる道德は、飽まで内面生活を尊重するといふ事にならなければならぬ。

武士道は此點に於て非常に内面的であつた。鎌倉時代の武士は非常に質素儉約であつた。質素儉約と云ふ事は即ち此の内面生活の表現である。現今の儉約と云ふ事は低級の實際道德としての儉約貯金と云ふ事である。儉約貯金と云ふ事は元より大切な道德ではあるけれども、比較的に低級の道德である。武士の内面的生活から生れて來る質素儉約と云ふ事と比較しては遙か低級な考へである。貯金と云ふ事は一種の外面的生活の尊重から來る道德である。之れに反して、武士が質素儉約したと云ふ事は内心の修養の結果現はれて來た高級道德である。内面生活が充實すれば

必ず人は外面を輕んずる様になる。之れが眞の質素の道德である。鎌倉時代の武士は當時我國に輸入せられた處の禪宗の感化を受けて心の修養に重きを置いたのである。當時の武士は皆禪寺に行つて參禪を事とした。其結果當時の武士は己の物質的生活に對しては、餘り興味を持たなかつた。當時武士の克己修養したと云ふ事に就いては多くの話が残つて居る。例へば北條泰時、亦時頼の如きは、國民の福利の爲に出来る丈け自己の私的生活を儉素に保つた。時頼の如きは自ら僧侶となつて、諸國を巡歴し、民の苦難を察したと云ふ事である。當時又は青砥藤綱と云ふ武士が、滑川に幾何かの金を、落して、其れを拾ひ上げるにそれ以上の松明を使つたと謂はれて居る。之等は今日の經濟的、同時に外面生活から見れば、最も無益の費用の如く見ゆる。然し之れは單に斯の如き經濟的觀察を以て評價す可きでない。其の一事に依つて當時の武士の精神を教養する爲めの一つの手段であつた。其他、執權職時頼の母、松下禪尼が時頼を迎へる時に、自ら障子の繕をした。然るに侍臣が天下の執權職の母たるべき方が自から繕はるゝ事は如何あるかと戒めた處が、松下禪尼は立ち處に是を斥けて「此の母の心を子に知せんとする」のであると答へたと云はれて居る。之等は皆鎌倉時代の武士の内面生活を物語るのである。

四

武士道的精神を現代に應用し得る第三の點は男子的精神と云ふことである。元來世界の道德には二様の道德があつて、其性質が全く違つて居る。然も其の違つて居ると云ふことの爲に反つて社會の進歩を促すのである。その二様の道德と云ふのは、一つは男性的道德、一つは女性的道德、之れを言ひ換れば前者は奮闘努力の道德、後者は平和的道德である。女性的道德は從來の多くの宗教が之れを代表して居る。例へば、基督教の道德は人類平和を旨として、飽までも戦争と云ふ事を否定して居る。例へば、現代青年間に流行する處の、トルストキの無抵抗主義と云ふが如きも、基督の平和主義の道德を標榜したものである。亦佛教に於ても大方の道德は柔和・慈悲とか忍辱と云ふが如き教を旨とするものである。現今は此種類の道德が世間一般に唱道せられて、男性的の道德が動々もすれば閑却せらるゝ有様である。然し道德は單に平和主義ばかりのもの丈けでは到底社會の必要に應ずる事が出来ない。一方に於て男性的即ち奮闘努力の道德がなければならぬ。彼のニイチエも此の種類の道德を主張した。彼は基督教を罵倒しつゝ奴隸の道德であると言つた。其の言葉は多少過激に亘る嫌は有るけれども、其の中に大いなる眞理が包まれて居るので

ある。

今回の歐羅巴の大戦以來、世界の人々は著しく平和的に爲つて來た。世界の思想家も従つて平和主義を鼓吹する様になつて來た。元より平和主義が悪い事ではない。然し平和主義と云ふものは其反面に於ては人類の精神的向上の力を衰はしむる恐がある。平和主義は動々もすれば妥協主義になる。妥協主義は人をして稍もすれば墮落に導くのである。奮闘努力の精神を失つて安易の生活を貪る様になるのである。即ち平和主義の弊害は社會の人心を沈滞せしめ、其の結果、人類文化の進歩を妨げる。彼の古人の如きも人心は常に活動を必要とする。恰も水の流れの如くに周流して窮まりなければ、始めて進歩發達を見ると云ふ通りである。平和主義の腐たらしめる弊害は例ば池の水の停滯して腐敗せる如くであつて奮闘努力の道德は恰も激湍の奔流するが如く常に清水をたゞへる事を得るのである。兎角、平和主義が人心をして腐敗せしむることは現代の世相に於ても見ることが出来る。現今流行する總ての社會運動を見ると、動々もすれば人をして個人の努力奮闘を妨げ、唯だ社會的環境に依頼しようと云ふ種類のものゝ多いのを見ても證明せらるゝ。斯かる時代に於て最も必要なる道德は男性的、所謂武士道的の精神でなければならぬ。

武士道の男性的精神に就いて動々もすれば世人は誤解をして居る。即ち奮闘的精神は人をして軍國主義に赴むかしむるものであると考へて居る。然し其れは大なる誤りであつて、軍國主義と云ふのは其の精神を單に外面的に解釋したる結果である。男性的道德は元々内面的のものである。彼の王氏の言つた様に、外の敵には勝ち易いが内の敵には勝ち難いと言つた其の意味と同じである。心の内に現はるゝ強敵に打勝つて、正しき自己をして凱歌を奏せしむることの意である。吾々の日用の生活には絶えず内面的の敵が現はれて來る。食欲、性欲、貪欲あらゆる内面的敵が現はれて來る。之れを征服する事は吾々に採つて如何に困難であるか。常に妥協的精神に沈滞した人は之れ等の内面的の敵に打ち克つことが出來ぬ。常に之に降服して享樂の生活を營んで居る人である。之れに反して最も奮闘的、男性的道德主義を持して居る人は幾百万の内面的敵が現はるゝとも、常に心の劍を以て之れと奮闘し、一步一步之れを征服し、向上進歩の凱歌を上げる人である。彼の孟子が千万人と雖も我往かんと云つた意味は實は内面的の敵に對して言つた事である。昔の宗教的大人物も常にその内面的の敵と戦つた。例へば佛陀の出家する前には、百鬼が現はれて彼を誘惑し様とした。基督が神の道を傳んとする際に多くの悪魔が現はれて、彼を誘惑せ

んとした。之れ等の百鬼惡魔は決して目に見えたものではない。基督や佛陀の心の中に現はれた百鬼惡魔であつた。其の内面的の敵に戦つて彼等が勝利を得た故に、遂に精神界の大人物となつたのである。

現代の青年は此の時代の妥協的精神に多く感染して、動々もすれば安易なる生活と、肉慾的享樂に囚はれんとするものが多々あるのである。又成功と云ふ事を奮闘努力の成功とは考へないで専ら投機的方法に依つて成功を求めんとしつゝある。實に現代に於て大切な道德は此の奮闘努力の男子的道德と謂はねばならぬ。

五

最後に武士的精神を現代に應用し得る點は安心立命と云ふ事である。安心立命と云ふ事は昔の武士の最も心を用ひて修養した處である。例へば、鎌倉時代の武士は當時初めて輸入せられた禪宗の僧侶に就いて、専ら修養をしたのである。鎌倉五山に這入つて參禪し、専心修養をしたのである。元來禪宗と云ふのは自力宗と稱して自力に依つて自己の精神を修養する宗派である。之れに依つて修養されたる武士は戰場に馳驅して更に恐るゝところが無かつたのである。斯くして安心

立命を得た武士は身を君國に奉じて、聊かも私心をさし挟まなかつた。故に大事に處して沈勇を守り得たのである。

現今は元より昔の如く總ての人が常に戰場に臨むわけではない。殊に今日は華盛頓會議の結果尠く共、此處十數年間日清、日露又歐洲戰亂の如き大戦役は無いものと思はなければならぬ。即ち平和の時代である。然し平和の時代には又平和的事業の上に種々なる方面から益々安心立命を必要とするに至つた。例へば、飛行機の如きは今猶發達の途中に在つて、幾多の生命を犠牲に供しつゝあるのである。亦益々機械工業の盛んになるとともに之れ又日々人命を損じつゝあるのである。其他一般化學の發達に伴ふて知らず知らずに多くの人の生命を奪ひつゝある。例へば醫術の發達せる今日に於ても、傳染病研究の爲に其の傳染病の感染から、多くの醫學者が年々命を捧げつゝあるのである。其他化學的研究の爲め、屢々不時の危難に遭遇する事も年々歳々増加しつゝある状態である。安心立命と云ふ事は決して戦時に於てのみ必要な事柄でなく、平和の時代に於ても絶えず必要な事柄である。或意味に於て戰場は人をして恐怖を感じしめない。反つて非常の決心を以て進み得るのである。然るに平和の際の個人的危險に對しては、反つて非常なる

勇氣と大なる安心立命の精神が必要になるのである。

平和の時代に於ける安心立命の必要は以上述べた様な有形的事業の上ばかりでなく、反つて無形の精神的事業に就いても非常に大切である。例へば今日の學術研究の如きは安心立命の精神が學者に無くては到底成功せぬ。今日の學問は學者一代に於て其の研究の目的を果し得る様なものは一としてない。即ち學者が特殊の研究を數代引繼いで、幾十年、幾百年の長日月を経た後に於て其の目的を果し得るのである。例へば一つの科學上の發見にしても、其發見を遂行する迄には幾十人の學者が非常に多數の實驗を繰返す事に依つて遂に其目的を達するのである。斯の如き事情で有る故に、現今の學者は自己一代に名を爲す事は出来ない。従つて今日の學者は己の名譽心、利益心に依つては研究を爲す事が出来ない。反つて己の主觀を超越して、其研究に没頭せなければならぬのである。勢ひ今日の學者は學問的良心を持つて居る程、安心立命の心がなくてはならぬのである。

以上の武士の奉公の精神、内面的生活、男子的精神、並に安心立命の心と云ふものは、今日の如き平和の時代に於ても益々缺く可からざる道德的精神となるのである。

五 修養の二方面

一

人間の日常の修養を廣く考へて見ると二つの方面があると思はれる。一つは消極的修養と言ひ他は積極的修養と云ひ得る。一つを克己主義と謂へば一つを勤勞主義と云ふ事が出来る。元より積極、消極と云ふ事は決して其の修養の方法としての價值の高下を云ふのではない。嘗だ修養の方法性質が積極的、消極的であると云ふに過ぎない。何れも修養として大切である事は言ふ迄もないのである。然し嘗だ古來言ひ傳へられた處の修養と云ふことは、主として消極的修養方法であつた。其故に積極的修養方法は現代に於て益々大切な事柄となつて來たのである。

二

從來、主として個人の修養方法と云はれたのは茲に云ふ消極的修養方法である。宗教家や、道學者等が専ら云つたことは心を鎮めて自己反省の習慣を附けると云ふ點にあつた。古人が日に參度び省ると云つたのも、謂はば此の意に外ならなかつた。殊に東洋に於て専ら唱導された修養法

は此の意味の修養法であつて、積極的方面に就いては餘り考へられて居なかつた。其の結果、古來精神的の偉人は皆陰者の如き生活をし、或は山に隠れ、或は僧院の内にあつて靜座瞑目したのであつた。然し現代の様な多忙なる社會に於ては到底斯の如き修養法では用をなさない様になつて來た。幸にも日日、餘暇を持つて居る人は其の餘暇を利用して靜座することが出来るけれども、一般の人々は斯の如き餘悠さへもない。嘗だ、日日營々として己の職務に追はれて居る。従つて其の靜座の餘悠だにも見出す事が出来ないのである。茲に於てか他の方法に依て自己修養の道を求めなければならぬ。即ち其の他の新しき修養法を指して積極的修養法と稱するのである。

茲に云はんとする積極的修養法は比較的西洋古來の哲人の間に既に注目せられた處である。尤も西洋に於ても、古は一般に東洋と等しく消極的修養法を重んじたのである。殊に西洋諸國の宗教家の生活は僧院の中に於ける生活であつて、今日に於ても猶その生活が修道院に於て繼續せられて居る。修道院の生活は物質的の生活資料と云ふものは社會の寄附に依つて送られて居つて、何等、生活上の不安を感じる事はない。嘗だ專心道を修める事のみ其の日を費す事が出来る。尤も西洋の昔の實際道德學者の中にも、此の宗教家と同様に消極的修養を唱道した人々があつた。

例へば希臘時代に於ける克己學派と稱するものは、其の一例である。彼等は嘗だ克己修養を目的として、出来る丈、質素の生活を勵んだのである。其の極に流れて互に乞食の様な生活を競争して行つたと云ふ事である。昔の傳説の一つとなつて居る有名な話は、彼のデオゲネスと云ふ哲人が極端な乞食生活をした當時、希臘を捲席した處のアレキサンダー大王が、或日其の有名なるデオゲネスを訪問した。然るにデオゲネスは當時家を持たないで只路傍に横たはれる桶の中に日向ぼこりをして居た。アレキサンダー大王はこれを見て一驚を喫した。天下の學者とも謂はれるデオゲネスが斯くも憐れなる生活をして居るか、同情の念に驅られてデオゲネスに尋ねた。何か欲する處はないか。我は天下の王者なれば如何なる汝の望みをも果して遣る事が出来る。汝の欲する處の何物たりとも望めと言つた。處がデオゲネスが立ち處に己の欲する處は一物もない。嘗だ大王が我前に立つ事を止めよ。我は今、自然の日光を浴びて楽しんで居ると答へたと云ふ。是は一場の話であると思ふけれども、當時の克己學派の人々が如何に極端なる粗野なる生活をして居つたかと云ふ事が此話によつて想像されるのである。元より克己的習慣は例令へ必要であるとは云へ、斯の如きは餘りに極端である。しかも當時の克己派の學者の一樣に誤りに陥つて居た點は、

克己を以て人生唯一の目的と考へた事である。然し、道徳上から云へば克己其のものが決して道徳の目的ではない。反つて克己は他の理想に進む一つの手段であると云はなければならぬ。

現代の青年は屢々克己修養を輕んずる傾向がある。殊に文化生活と云ふ意味を享樂生活と誤解して、克己は昔の僧侶の行つた無益の業であると考へて居る。然し其の點は克己學派の人々が克己其のものを目的と考へた誤りと同様に、文化生活を嘗だ享樂生活と考へる事は非常な誤りである。眞の文化生活は常に理想の憧憬を持つて居るものでなければ云ふ事が出来ない。行く手の先きに人生の理想を望みつゝ、一步一步其の高き理想へと向上して行く事が眞の文化生活である。従つて文化生活には克己修養、向上努力と云ふ事が必要で、恰も高き山に登るが如く、一步一步進む毎に愉快なる人生の光景が吾々の前に展開して來るのである。此の文化の眞意義を體驗するに非ざれば、決して文化的生活を營む事は出来ない。殊に青年の修養は將來、社會に立つて精神的修養を爲す前の準備時代である。従つて積極的の修養よりも消極的の修養が大切である。就中、學校生活を營みつゝある青年にとつては、最も克己修養が大切である。現代は昔の宗敎家の如く特別に時間の餘裕を持つて居る人はない。只だ學校生活をして居る學生が僅に自己修養の時間を

持つて居る階級である。其れ故に、日日多忙にして靜座修養の追のない社會の人々に比較して此の自己修養の餘裕ある學生は専ら消極的の修養を勵まなければならぬのである。亦それが學生にとつての何より特權であると云はなければならぬ。

三

以上述べた消極的の修養は學生生活の如き特殊の場合に於てのみ現代に於ては行はれ得る。然し一般の社會の人々は最早過去の時代の如く生活に餘裕ある時代ではなくなつた。尙其の上に生活に餘裕あるものは暫の間と雖も座食する事は許されない。必ず社會奉仕の爲に多忙なる日日を費さなければならぬ。斯の如く何れの場合に於ても多忙を極むる現代の生活に於ては、最早消極的の修養を以て到底満足する事が出来ない。

元來、吾々の修養の意義を單に消極的のものであると考へる事は之れ一種過去の習慣に囚はれたものである。眞の修養は尙ほ日日の生活の内在つても必ず有り得る。彼の有名なる王陽明が其の弟子に修養は唯だ書齋に在つて書を読むと云ふ事ではない。日日活動の内在つて其の修養を爲し得るものであると云ふ事を教へた。例へば傳習錄の中で、彼の弟子の澄と云ふ者が嘗つて故

郷を離れて遠く王陽明の處に學問をして居つた。其の時に故郷からして自身の小供の病氣危篤である云ふ報知が來た。其の報知を聞いた澄は非常に狼狽し、憂悶して堪へなかつた。之れを見た王陽明は人間の修養は斯の如き際にあるのである。斯の如き際に修養せなければ、閑時の講學は何んの役にも立たんと云ふ事を述べて彼を戒めた。之れは即ち一種の積極的修養であつて、只だ書齋に在つて書を読むと云ふ事や修道院に入つて靜座をすると云ふ事が眞の修養ではないと云ふ事を意味するのである。元來消極的の修養は謂はば個人的修養であつて社會的修養ではない。例へば昔から禪宗の僧侶等の中には非常な名僧知識がある。然るに、之れ等の名僧知識は多くは僧院の内に座禪を事として己れ一個の修養を積んだものである。換言すれば利己的修養であつて社會的修養ではない。即ち道德的修養は個人一人の修養丈けでは甚だ不完全である。絶えず社會に交つて、社會の爲に努力することが又修養でなければならぬ。個人一個のみの修養ならば到底社會に道德的影響を與へる事は出來ない。其の點に於て社會的修養と云ふ事を爲すが爲には飽までも茲に云ふ積極的修養を重んぜなければならぬ。尙其の上に人間の精神と云ふものは絶えず或目的の爲に活用する事が必要である。恰も水の沈滞する處には其の水腐敗する如く、人の心も只

だ靜座のみを事とすると、遂には心が沈滞して、活潑の精氣を失ふに到る。彼の朱子も

人心常要^レ活、則周流無窮、而不^レ滯^ニ於一隅。

と云つた。此の人間の精神状態を修養法の上に應用して考へて見ると、日日多忙なる内に在つて反つて其の多忙なる時を活きた修養に用ゆる事が出來ると思ふ。

西洋に於ては既に古來から勤勞と云ふ事を非常に重んじた。例へば、希臘のソクラテスの如きは「勞働は神聖なり」と云つた。亦アリストツルの如きは「眞の生活は勤勉なる活動なり」と言つた。之れ等は皆勤勞と云ふ事が人間にとつて何より大切である。殊に人類文化の上に勤勞と云ふ事は非常な大切なものであると云ふ事を言ひ表したものである。然るに、東洋に於ては古來消極的の風習が多く、就中、印度支那の如きは陰者の生活をさも道德者の唯一尊重す可き生活方法である如く考へたのである。其の思想が古來我國に傳來して、今猶ほ勤勞と云ふ事を輕んずる風がある。然し現代は最早勤勞を輕んずる時代ではない。之れを經濟的道德の上から見ても、働かざる者は社會に生存する権利がない時代になつて來た。勤勞は世の中のあるあらゆる物資を生産するが、資本は直接生産に與らない。此の點に於て勤勞程、現代に於て道德的要素を包含して居るものは

外にはないのである。吾々が營々孜々として其の業務に務めると云ふ事は、最早、昔の個人主義的の消極的修養法ではなくして、實に現代の最も要求しつゝある積極的修養法と云ふ事が出来るのである。

以上の積極的並に消極的修養法は恰も車の兩輪の如くにして、吾々個人の一生涯に於ける最も有力なる修養法となるのである。

六 快樂は不道德乎

一

從來一般の道德上の考へに於ては、快樂と云ふことは總て不道德であると云ふ考へが多かつたのである。言ひ換れば克己と云ふ事が總て道德的であると云ふ考へが世界一般に廣がつて居つた。我國の如きも、古來道德は總て克己的のものである。快樂と云ふことは人をして不道德に陥らしむるものであると云ふ考へが一般に行はれて居つた。殊に此の考へは、我國のみならず、東洋一最古來から傳つた傳統的の精神である。その理由は前にも述べた様に東洋古來の道德は總て沒我

的であつて、自己と云ふものを否定する事である。従つて亦自己を樂しませると云ふことを不道德と考へたのである。佛教の如きは人間の快樂と云ふものを罪惡の如く考へて、其の快樂を捨てる事を唯一の修養法にしたのである。其の理由は諺にも云ふ如く樂は苦の種、苦は樂の種と云ふが如く、凡そ樂を味ふと其の後から必ず報酬として苦しみが來る。故に苦を避ける爲には樂をも捨てなければならんと云ふ佛教の思想に基くのである。然し此の考へは非常に消極的の考へであつて、宗教的の考へとしては好い事であつても、苟しくも實際社會生活の上に於ては、更に快樂と云ふものを是認して行かなければならぬ。然らば果して如何に快樂を正しきものとして考へる餘地があると云ふ事を述べて見たいと思ふ。

二

抑も人間の快樂の感情と云ふものは、種々なる點に於て吾々の實際生活の上に大いなる利益を與へる。其の利益を大まかに區別すると一つは社會的利益で、一つは個人的利益である。

社會的利益の方から云ふならば、人間の快樂と云ふ感情が有つて始めて社會的生活が圓滿に進んで行くのである。即ち社會に於ける個人と個人との間に親密な従つて愉快な感情が相互間に流

れる所から、愉快なる社會生活を日日營まれるのである。謂はば其の點に於て人間の快樂と云ふ感情は社會と云ふ機關に對しての油の如きものである。其の油が無かつたならば、總て世の中の生活は無味乾燥になるのみならず、絶えず個人間に争の絶える事はない。従つて社會一般の平和の幸福を求め得る事はない。

元來社會を人々が構成して行く上に於てその社會の爲めに必要な道德は大體三つある。古來聖賢は多く其の中の二つに就いて述べて來たのである。其の一つは仁愛とか、博愛とか、亦慈とか謂はるゝものが其れである。今一つは謙讓と云ふ事である。從來の我國の事情を考へて見ると矢張り此の二つの道德が盛んに行はれて居つた。又それに依つて比較的安寧秩序を保つて來たのである。其の第一に仁愛、慈悲の精神は佛教並に儒教が我國民に深く教へた。佛教の教へは飽までも己れの利慾を捨て、他人の爲めに謀らなければならぬと言ふことを教へ、亦儒教は孔孟の仁の教へに基いて、廣く人類を愛す可き事を教へた。それが爲めに從來我國民道德は己れを忘れて總て他人の爲めに力を盡すと云ふ美風を備へて居つた。元來此の仁愛の教と云ふものは、兎角人々が利己的で、己れの爲めには他人の利益をも齟齬せんとするものである處から、此の人々の利

己心を寛和する必要上教へられたものである。従つて仁愛と云ふ精神が吾々人類の社會生活には必要になるのである。此の仁愛の精神がなかつたならば、到底一時と雖も平和な社會生活を續ける事は出來ない。それが爲に佛教に於ても、儒教に於ても極力此の點を人々に教へたのである。

今一つの謙讓と云ふ道德は之れ亦非常に大切である。前の仁愛の道德と比較すると元より多少消極的の處がある。然しそれだけ實際的である。仁愛と云ふ事は普通一般の人には仲々容易に之を實行する事は出來ない。然るに此の謙讓の徳と云ふものは極めて常識的で、従つて實行が容易である。古人の教へにも「己の欲せざる處人に施す勿れ」と云つたのは、一つに此の謙讓の徳を言つたのである。人は例令、利己主義であつても多少常識の有る者は己の欲せない處を他人に強ゆる者はない。此の常識さへ持つたならば、吾々の社會生活と云ふものは非常に圓滿に進むものである。即ち互の權利を侵さず、義務を捨てず、各人共存の徳を維持して行く事が出来る。普通法律上の個人關係は皆此の謙讓の道德を基礎としたものである。單に法律のみならず、世の中の風俗習慣の如きも、凡て此の常識的道德の上に成立して居るのである。禮儀作法皆然りである。

以上の仁愛と謙讓の二つの徳は、人類が社會生活を營む上に於て非常に大切な道である事は言ふ迄もない。然し乍ら今一つ大切な社會的徳がある。それは即ち快樂と云ふことである。前に述べた如くに快樂と云ふ道德的の要素は、人類の社會生活を圓滿幸福にするものである。前の仁愛謙讓の徳も元より人類の生活を幸福にする條件であるけれども、直接幸福を齎すものは、即ち此の快樂的道德である。例へば今日一般に流行する處の文化的生活と云ふ事は、即ち此の快樂的要素を多く包む處の社會的生活を指して云ふのである。從來我國の文化は此の快樂的道德の要素が非常に足らなかつた。克己と云ふ事を主眼とした。故に、その結果として世の中の風俗習慣が兎角無味乾燥に陥つた。無味乾燥であると云ふ事から、自然、社會的生活が形式的に流れ、同時に自發的の要素が不足した。從來如何にすれば社會の生活を最も幸福に爲し得るかと云ふ事を如何なる人も充分に考へなかつた。社會は嘗だ謙讓の徳を以て、他人の迷惑にならない様に、他人の妨害をなさない様にと云ふ事だけを考へて居つた。従つて社會全體の幸福と云ふ事は一般に考へられなかつたのである。例へば卑近な例を以て云ふならば、從來行はれた小笠原流の禮儀作法と云ふものは出来るだけ快樂を欲する人間味を抑制して、嘗だ個人の生活を清く、正しく行はせる様に仕向たものであつた。食事をする場合に於ても出来るだけ沈黙の内に食事をするのが正しい禮儀であつて、食事中に他人と話をすることは寧ろ不禮の事とせられて居つた。之れは東洋古來の習慣であつた。吾々の享樂と云ふものは如何なる種類と雖も不徳である。殊に愉快に食事を採ると云ふが如きは、恰も禽獸の行に等しいと考へたのである。萬事斯の如き状態であつて總ての社會的習慣が出来るだけ寂しく、孤獨的に、生活を送ると云ふ事が何より大切な道德の様に考へられたのである。之れは要するに儒教の謙讓の徳と云ふ事が誤解せられた結果であつて、謙讓と云ふ事は只外面的形式の事と考へ、他人に迷惑を懸けない範圍に於て禮儀作法を守る。之れ以上に人を樂しましむると云ふ様な積極的の考へがなかつたからである。

此點に於ては西洋諸國では其の社會的風俗習慣が全く反對の性質を持つて居る。西洋人は一體に社交性に富んで居つて、人と交はつて親しむと云ふ事を常に考へて居る。又實行をして居る。彼等の間には例へば俱樂部組織の如きものが非常に發達する。共に愉快に遊び、又共に愉快に飲食をすると云ふ事が、彼等の無上の楽しみになつて居る。それが爲に反つて個人主義の文明に育つた彼等が社會的であつて、沒我主義の文明に育つた我々國民が反つて社會性を持つて居ないと

云ふ様な不可思議の現象が現はるゝのである。

例へば、英國人の如きは以上の社會的快樂と云ふ事を重大なる日常道德と考へて居る。日々、人と交る時に如何にすれば其の對者をして喜ばしむる事が出来るかと云ふ事を懸念して居る。従つて、英國人の道德的思想は常に快樂主義的である。蓋し其の快樂と云ふのは決して低級の快樂でなくして、常に人と交つて文學藝術を語り音楽を楽しみ、ホクリケットや或は銃獵や、其他一般の遊戯を以て愉快なる社會生活を爲して行くの意である。此の點は我國の風習は克己のみを道德として教へられた結果、今尙ほ衆と共に楽しむと云ふ事が充分に出来ないものである。古來我邦人は共同的精神に富むと謂はれて居るけれども、其の事實は反つて之れに反する場合が多い。換言すれば個人主義的である。之れは決して道德的個人主義ではなくして、嘗だ社會性の訓練が乏しいからである。其の結果我國民は平時にあつて最も階調ある社會生活が營まれない。或る一つの會合を催しても忽ちにして内訌が生じ、直に解散をする。其の他一般の社會の團體生活、例へば政治上の團體にしても、經濟上の團體にしても、一つとして其の團體の階調を保つことが出来ない。従つて其團體の目的とする處を果す事が出来ない。之れ等は全く快樂と云ふ徳を充分に身

に體驗しない結果である。吾々が眞に社會が快樂的道德を必要とするに云ふ事を知つたならば、必ず其の社會的快樂を求めたに相違ない。今後の我國の社會生活は専ら此の方面の積極的道德を教養せなければならぬ。嘗だ戰時に於てのみ共同的精神を振興するに止まらず、平時にあつて最も調和ある、又愉快なる社會共同生活を營む事が非常な大切なのである。

四

以上述べた處は、快樂が社會道德上に如何なる關係を持つて居るかと云ふ事を、論じたのである。今翻つて、之れを個人的生活の上に就いて考へて見やう。快樂は個人的生活の上に亦非常に道德的關係を持つて居る事は古來の聖賢が等しく言つた處である。孔子の如きも道德の極致は道を楽しむと言つた。吾々が心から愉快に道德を實行した時に初めて眞の道德に適ふのである。之れを今日の哲學や倫理の上から考へても、道德に快樂と云ふ要素の必要であると云ふ事は極めて明瞭な事になつて居るのである。例へば吾々が或る事を爲す時に、其れを愉快に遣ると云ふ事は、其の一事を成就する上に於て非常に大切な事柄である。勉強する場合にも愉快に勉強すると云ふ事は學問上の日進月歩を示すのである。今日の科學上から亦等しく其事が謂はるゝのである。

例へば進化論の上から、總ての生物、又人類一般に進化する場合は必ず愉快と云ふものが伴ふと云ふのである。單に肉體の場合を考へて見ても、身體が日々健康である場合には愉快なる心持ちが漲つて居る。之れに反して病的苦痛と云ふ事は吾々の身體の發達の阻害されて居る場合に起るのである。之れを精神上の方から考へても、吾々が愉快に勉強すると云ふ事が吾々の知的作用の進歩を示して居るのである。前にも言つた如くに總て吾々の知を好に進め、又更に好を樂に進めたときに、それが眞の行的知であると云ふ事を述べたのも皆之れに外ならないのである。現今の教育に於て亦此の快樂と云ふ事を教授上の最も大切な要素とせられて居るのである。例へば教育學上に於て彼のヘルバルトが云つた様に、教育と云ふものは興味中心でなければならぬ。換言すれば小學校の兒童を始めとし總ての學生と云ふものが、己の學科に對して深く興味を持つと云ふ事が、教授の効果を納める上に於て何より大切な條件であると云ふ事は疑ふべからざる教育上の眞理である。

一般の兒童が大人に比して遙か遊戯が好きであると云ふ事は、之れを裏面から云ふと、兒童の心が大人に比して日々發達すると云ふ事を證明するのである。即ち彼等が夢中になつて種々なる

遊戯をして居るときは、恰も草木が太陽の光線を吸て居る様なもので、其の愉快なる遊戯に依つて身心を發達せしむるのである。成長した者は最早小供の様に身心が發達せない。即ち身心が一人前となつて最早發達の餘地がなくなるのである。自然、大人は小供の様に愉快なる遊戯を爲す事が出来なくなる。之れ等の事情を考へて見ても、如何に愉快と云ふ要素が吾々の身心發達に必要缺く可からざるものであると云ふ事が明瞭になる。斯く考へる事に依つて快樂と云ふ事が亦道德に採つて非常に大切なものであると云ふ事が知らるゝのである。

五

抑も快樂には二つの種類が有る。一つは感覺的快樂、一つは精神的快樂である。感覺的快樂と云ふものは例へば食慾の様なものである。精神的快樂と云ふものは己の精神を満足せしむるものであつて、例へば親友に對して其の者の艱苦を救つたと云ふ様な場合に、自己の心に愉快を感ずる様な種類のものである。此の二つの種類の内ちでは一般に前者は兎角人間を不道德的に導く、之れに反して後者は人間を道德的に導くのである。世の中の人々は多く感覺的の快樂を採つて精神的の快樂を捨つる人が多い。従つて其れ等の人々は不道德に陥るのである。元來快樂と云ふもの

は以上述べた處の感覺的快樂の外のものは之れを直接の目的として追求する事は出来ない。寧ろ一つの目的が成就して始めて快樂と云ふものが之れに付き随つて來るのが一般である。例へば吾々が數學上の問題を勉強する時に其の問題が解決した時に無上の嬉しさを感じるのである。代數の因數分解を問題として、之れを數時間、或は數日の後、解釋されたときに、吾々は無上の嬉しさを感じるのである。之れ等の愉快は總て學生時代に青年諸君の等しく經驗せられた處である。此の場合には快樂を目的として其の快樂を追求したのではない。寧ろ數學の問題を解釋する事を目的としたのである。しかも其の問題が苦心の結果解釋されて、初めて愉快を感じるのである。之れ明に快樂それ自らを追求して得る事の出来ないものである。反つて他に目的があつて其の目的を果す事に依つて、初めて愉快を得るのである。之れを例へれば恰も明月に向ふ人の影の様なものである。影は己の進む後から随つて來る。若し之れを逆に影を追ふときは、其の影を捕える事が出来ないのと同様である。人生の萬事皆斯の如くであつて、自ら愉快を求めて愉快を得る事は出来ない。反つて己の道德的目的を完成する事に依つて、愉快は後より酬ゆるのである。一言にして謂へば道德的努力の報酬が愉快であると云ふ事が出来る。

私は常に土曜日曜哲學と云ふ事を唱道する。此の哲學は苟くも學生生活をした青年は充分に體驗して居る筈である。若し諸君に一週間の中で最も楽しい日は何日であるかと言ふ事を尋ねたらば、必ず諸君は土曜日と答へるであらう。なぜなれば日曜日と云ふものがその翌日に控へて居るからである。就中、學生にとつては土曜日の夜と云ふものが最も愉快である。翌日の日曜日の晝半にもなれば、最早、妙しく悲哀の感を持つに到る。然らば土曜日が愉快であつて日曜日が不愉快であるから日曜日を除いたならば如何。其の結果は土曜日までも不愉快なる日となるのである。之れを簡単に謂へば日曜日と云ふものを待ち設ける人の心と云ふものが最も愉快で、最も幸福であると云ふことになる。人生の萬事皆斯の如くであつて、己の最後の目的を果したならば最早愉快ではないのである。是を裏から云へば人は絶えず前方へ希望と云ふものを持つことが大功である。若し其希望が果されたら又次の^{希望}を創造して行く事が大切である。一つの目的を果したならば更に高き目的を造つて、一步一步向上する事が人生の最も大切なる旅程である。其れ故に若し人間の内で誰が最も幸福であるかと云ふならば、人生の旅程に於て絶えず土曜日の夜に居る人が最も幸福なる人と云ふ可きである。之れを即ち土曜日曜哲學と稱するのである。

以上人生の土曜日曜哲學から謂へば、青年諸君は正しくその土曜日に居る處の最も希望に満ちた幸福な人である。古人は「人生は羈旅の如し」と言つた。即ち人は呱呱の聲を上げて以來、死に到るまで、大旅行を試みて居る様なものである。下關から出發した旅人が、山陽道から東海道を通つて東京に着し、更に淋しき東北に行く様なものである。最も人生の華かな時代は青年時代で恰も東海道の旅程にある人々が正に都に入らんとする前の様なものである。如何に都が愉快なものであるかと云ふ事を想像しながら、車中に於て華かな空想をして居る様なものである。一旦、東京に這入つた時に想像する程の愉快を求め得ないで、再び寂しい心を持つて東北に向ふのが人生の真相である。東北に向ふ人は恰も六七十の老年者の心である。其の點に於て青年の時期と云ふものは人生、最も多幸多福の時代であると謂はねばならぬ。總て人間は快樂の境に這入つては眞の快樂を得る事は出来ない。例へば、彼の浦島ウラシマの様に一旦龍宮に行つて歡樂を盡した時に彼は既に人生の悲哀を感じて居つたのである。舷歌を歌つて海上を過ぎ行く舟を見た時に、再び故郷戀しく玉手箱を抱いて歸つて來たのである。總て人間の心理は快樂の境に在つて、快樂を得る事は出来ない。眞の人生の快樂は己の行く手の前に、希望と理想の光が輝いて居る場合に於てのみ得らるゝものである。人の道徳的的幸福と云ふものは、此の種類の快樂の外にはないのである。

以上の如く人生の快樂を考察する事に依つて、眞の快樂と云ふものと克己及び努力と云ふ事が非常に密接なる關係を持つて居ると云ふ事が明瞭になる。即ち奮闘努力と云ふ事が無くては、眞の快樂幸福と云ふ事が味ふ事が出来ない。之れを例へて見れば、高山に登るが如きものである。夏日、山に登る事は一面から見ると苦痛を求めて居る様なものである。然るに何故に人々は登山を好むかと謂へば、其の登山の苦しみに比較して、更に其れ以上の愉快が伴ふからである。富士の裾野から一步一步高きを極めて行くと、眼界が次第に廣がつて、初めは東海道の一部が脚下に見え初めたものが登るに隨つて箱根を越えて、東京に及び、更に頂上を極むるに到つて、太平洋の水平線が水天彷彿の間に遠く廣がるを見るに到る。其の一步一步の光影の展開は登山家の最も愉快とする處である。此の愉快は萬戸の富にも代へられないものと感ずるのである。此の登山の愉快は矢張り、精神上の道徳的愉快と同一であつて、己の克己努力に依つて一步一步自己の人格を向上擴大する様なものである。之れを道徳上に於ては自我實現の樂しみと謂ふのである。此の以外には人生の眞の愉快と云ふものはないのである。

以上述べた如く人間の精神的快樂と云ふものは、その人の努力向上の續かん限り無限であると云ふ事が出来る。然るに之れに反して前に述べた感覺的快樂と云ふ方は之れを無限に満す事は出来ない。必ず一定の制限があつて、其の制限を越ゆるときは必ず人間の不幸を招くのである。例へば食欲の如きものはその適例である。食欲から来る處の感覺的享樂は己の身體を維持する範圍に於て愉快を求める事が大切である。若し之れを極端に濫用するときには、必ず其の結果は不生となり、己の身を損ふのである。其れ故に此の種類の感覺的享樂は必ず一方に於て道德的の理性に依つて之れを導かねばならぬ。尙ほ其の上に此の種の快樂は必ず知足の法則に依つて之れを制限せなければならぬ。只だ己の有らん限りの慾を満すと云ふ事は人間の最も戒む可き事である。知足の法則と云ふのは己の社會的身分に應じて、衣食住の限度を定めると云ふ事である。之れは決して消極的の考へではなくして、吾々の社會に對する義務である。己の慾心を無限に延ばすが爲に、其の結果社會の人々に、物質的の惡影響を與へると云ふ事は現代の時勢から見ても不道德と謂はなければならぬ。己が物質的の成功をすれば其れ丈け一般の人々の不幸を來たす場合がある。

其の結果、世の中は益々貧富の懸隔が甚だしくなる。それが爲に世の中の忌む可き問題を惹起する恐れがあるからである。

元來感覺的の快樂と云ふものは之れを無限に増進させる事は到底出来ない。今日の心理學に於て刺戟と感覺的感性との間には一定の法則があつて、刺戟が大になればなる程感性の方が其の割合に増加せないと云ふ方則が発見せられて居る。其れ故に例令巨萬の富を持つて居る人と雖も必ずしも其の日の暮に困難をする様な貧艱者に比して非常なる感覺的愉快を持ち得る事は出来ない。其の點に於て感覺的の享樂と云ふものは、人間總てを通じて比較的平等であると云ふ事が出来るのである。

以上の刺戟と感性の間の心理的の法則を発見した人は有名なるウェーバアと云ふ人である。今此の人の發見した心理的事實を少しく述べて見やう。

ウェーバアの法則と云ふのは一言で謂へば、刺戟の程度が幾何級數的に進むに拘らず、一般の感受性が常に等差級數的に進むと云ふことである。例へば今一人の被験者があつて其の人をして目を閉ぢさせて、其の人の手の上に極く輕少なる重量ある物體を乗せ行く、其れが假りに、一

目に達したときに其の被験者が初めて重さを知つたとする。更に次第に重さを加へて、二匁目に到つた時即ち總計四匁目になつたときに被験者は再び重さを感じる。亦次第に重さを加へて十二匁目に達した時、即ち總十六匁目に達したときに、被験者は亦新に重さを感じる様になる。此の關係を數を以て現はせば、刺戟が2、4、16、の幾何級數的進行をするに反して、感受性の方は1、2、3と云ふ等差級數的進行を續けると云ふ事である。此の法則は總て如何なる場合に於ても皆同一である。例へば前に謂ふた處の食欲、即ち味覺の場合に於ても、其の甘味と御馳走の關係は矢張り等差級數と幾何級數的關係を保つて行くのである。

以上のウェーバアの法則は人間の感覺的生活の總ての場合に行はるゝのであつて、それが爲に吾々は感覺的生活に於ては出来る丈け知足の道德を守らなければならぬ。何となれば前に云ふが如く感覺的の刺戟が如何に強大であつても、之れを享樂する吾々の感受作用と云ふものは又其の割合に増大はせない。加之、一度強大な刺戟を受けた後はその刺戟を減削させる事に依つて非常な不愉快を感じるからである。之れを具體的に云へば、飽食暖衣して居る人に取つては今更從來の飽食暖衣の程度を減退させる事は出来ない。一旦、浪費的生活をした人が再び克己の生活

をする事は非常に苦痛になる。之れに反して平素質素の生活をして居る人は尠しの享樂でも非常な悦びを感じる。その關係をもつと適切に云へば、茲に一人の學生が懷中に十圓の金を持つて居る。其の時に故郷の父母から二圓の金を送金して來たとする。今一人は十萬の財産を持つて居る。其人が今茲に他人から二萬圓を受取つたと假定して、果して前の學生の感じた悦びを感じるか如何うか。此の金満家の悦びは蓋し遙か學生の其よりも尠いに相違がないと思はるゝのである。此の割合を以て考へて見ると、強ち金満家なる故に愉快を感じるとか、貧困者なる故に愉快を感じないと云ふ事は云はれない。寧ろ貧困者なる者程、身の幸福を求める機會が多く、且つ容易である。と謂はねばならぬ。其の結果として、吾々の感覺的愉快と云ふものは出来る丈け平素に於て克己の習慣を養つて置く事が肝要な事である。平素苦痛に堪へた者が其れ丈多くの快樂と幸福とを得る事が出来る。此の意味に於て、人類は感覺的の平等を常に持つて居ると云ふ事が出来る。即ち、貧困者と雖も富豪と雖も、その人々の心の中に現はれて來る歡喜と云ふものは決して大いなる差のあるものではない。謂はば一人の人が十の心の精力を持つて居るものとすれば、貧乏者も、富者も、其の點に於ては同一である。従つて外界の享樂的刺戟が如何に強くとも、只だその

人の受ける愉快は大同小異であると云ふ事になる。故に勢ひ、吾々の日日の感覺的生活に於ては知足の道を守ると云ふ事が何より大切な事になる。常に豐滿なる感覺的享樂を續けて居る者は其の結果は遂に墮落の淵に陥るのである。何んとなれば終には快樂の感受性を失つて無神經になつてしまうからである。

之れを要するに吾々は前に述べた處の精神的愉快、亦道德的満足と云ふものは無限に擴大して益々愉快を覺え、之れに反して感覺的物質的享樂は其の享樂の刺戟の度を増す事に依つて次第に墮落し、且つ亦道德的無感覺に陥るものであると謂はねばならぬ。

社會生活

一 自我論

宇宙間に於て若し最も確實な、然も明瞭なものが在りとするればそれは自我と云ふものである。其他のものは總て間接的のもので、若し一度自我の存在を否定すれば皆怪しくなるものである。最も直接的に存在してをるものがありとすれば、恐らくは我と云ふものに外ならない。例へばこゝに一つの書物が在る、机があると言ふようなことも、吾々にとつて明瞭な存在物と心得て居る。然し其等總ては自我と云ふものを通して始めて分るのであつて、謂はば間接的の存在である。然るに自我に至つては、尤も直接的で、之を疑へば總てのものを疑はねばならぬことになる。其れ故に宇宙間の事物を研究するには、先づ其の自我とは何ぞやを研究せねばならぬ。之を措いては他に如何なる科學と雖も到底成立し難い。其れならば科學と謂ふものは何故に自我を研究せないかと言へば科學者は之を以て非常に困難な事項として其の研究を放棄してしまふのである。而して

直に間接的事物の研究に着手するので、所謂内的存在としての自我といふことを見棄てて、外的の机書物を必ず在るものと假定してそれを研究して居る。然しその研究は甚だ不徹底である。假りに若し人生と謂ふ様な深い対象を研究する場合には其れ等の科學的研究では到底満足な研究は出来ないことになるのである。近世の有名な佛蘭西の哲學者であるデカールは其故に此の自我を以て宇宙萬物の知識の根本とした。自我がなければ如何なる存在物をも疑ふことが出来るといふことを言つた。彼の哲學に於ては其れ故に自我を知識の出發點として一大哲學を造つたのである。デカールは世の中の有らゆるものを疑ひ盡して、最後に「我思ふ故に我あり」と言ふことを發見して、茲に自我の根底を見出し、其れから有らゆる宇宙の現象を説明したのである。之を以ても如何に自我の研究といふことが大切であるかを知らるゝので、若し此の自我が充分に説明し得たならば、吾々の人生に於て凡そ不可解のものはないことになるのである。

抑も世の中の事物を説明するに當りて、最も説明の困難なものは誰れにとつても最も直接的な事物である。例へば、生命といふ様なことを研究する場合にあつても、之と同様で従つて研究が困難である。生命といふことは如何なる人と雖も其の存在を疑ふものは無いのである。今諸君に

命無しと言へば、如何なる人と雖も之れに反對するであらう。然らば今茲に諸君に其生命を具體的に説明せよと云はば、必ず其れを完全に説明し得る人はない。今日の如何なる生理學者醫學者と雖も人間の生命とは何ぞやといふ問題に對して完全なる答を爲し得るものは一人もない。今日の生理學に於ては、生命といふことは生理的の一つの假定とも見るべきものであつて、生命其者は依然として説明の出来ないものになつて居る。斯の如き説明の困難な理由は生命程吾々にとつて直接のものはない。其れ丈け説明が困難である。其と同様に自我も直接的なものであつて、反つて生命よりも更に直接的である。故に之れを完全に説明すると云ふことは、到底この小冊子に出來ることではないのである。乍併出來得ないとして棄て、置くべき事柄ではない。多少とも其自我の性質を説明して、吾々の自己修養の目的に供したいと思ふ。此處に自我の説明を下すに當つて注意すべきことは自我の説明には大體兩方面があると云ふことである。其の一つは自我の形式の研究、今一つは自我の内容の研究である。自我の形式的方面の研究は哲學上の難かしい問題になるから、今此處では其を除いて主として内容の方面を述べよと思ふのである。

自我の内容を説明するに先だつて、從来自我といふものに對して道德上から如何に考へて居つたかといふことを少しく述べてみたいと思ふ。自我といふものに對して從來の人々の考に因ると、大體二様の見方がある。或一派の宗教家や思想家は自我を非常に善良なるものと見てをるに反して、他の一派の人々は自我は悪いものとして考へて居るのである。之れを通俗的の言で云へば前者が性善説で、後者は性惡説である。此の二つの見方は西洋でも東洋でも古くから行はれてをつて、現今に於ても多少とも之の區別をしてをる人々がある。人間の本然の性即ち自我といふものは、根本的に悪いといふ見方は例へば東洋に於ては荀子、西洋に於てはボツプスの如きである。荀子は彼の孟子の性善説に反して、人間の本性は元々惡である。何んとなれば他人のものを欲しがる處から、人と争をする。又盜みをする。世の中の亂を妨ぐためには遂に法律と云ふようなものを造つて人の根本惡性を抑壓する必要があるのである。之明かに人間の本質は惡である證據であるとした。世の中には聖人と云ふものがあるけれ共、其は僞善者である。僞善者の聖人賢者が人間の惡を妨ぐ爲めに、道德や法律といふものを造つたのであると論じたのである。之の荀子の性惡説の系統は我國の徳川時代の刑法等に殘つて居る。元來東洋古來の法律思想は多く支那の法家と

稱せられてをる處の商子、申子、韓非子の如き學者の思想から出て來たのである。皆之等は荀子の系統を引いた學者であつた。一體法律的思想と云ふものは古來多く性惡説から出て居るものが多い。其理由は法律と云ふものゝ職能は、何れかと謂へば人の缺點を取締つてゆくと云ふ消極的のものであるからである。勢ひ人を目して天性善いものと見るよりは惡いと見る方に傾き易い。其故に此の性惡説は法律學者の間に兎もすると起る處の考へである。之に反して道德とか、亦教育とか、宗教とか謂ふ様な所謂文化的事業に従事する人々には寧ろ個人を善なりと觀てゆく方が多い。其の善を進め、其善性を發展させる事が道德宗教の目的であるからである。従つて其等の宗教家教育家倫理學者などは性善説即ち自我を以て本來善なりと考へる人が古來多いのである。尤も西洋に於てもホツプスは稍荀子に似て居つた人である。人を利己的のものと觀、人間の自我といふものを以て他人を顧みざる純粹利己的なるものと考へたのである。其れが爲めに彼は國家と謂ふものを造つて其の國家の主權に因つて凡て國民を束縛してゆくのが法律の目的であると云つた。此の説は云はゞ荀子等の性惡説と期せずして一致して居つたのである。

以上の様な性惡説から道德と云ふことを考へて見ると、自然、道德と謂ふものは自我を減す事

が道德であると言ふ様な考になる。是を没我的思想と云ふのである。此の没我的思想と謂ふものは西洋にも古來多少あつたけれ共、主として東洋に發達した思想である。例へば東洋に於ては佛教の如きに於ては自我を捨る事が何より大切な修養になつて居る。所謂佛教の解脱といふことは我と謂ふ束縛を離れて、全く自由な境遇に入ることと云ふのである。我國では佛と謂ふ字をホトケと和訓するのは解と云ふ言葉から變化したのである。即ち我執を棄てると言ふ意味を表したのである。此の佛教の思想は印度、支那、日本等の東洋諸國に廣がつて居る。其他儒教の如きも何れかと謂へば克己道德を教へるものであつて、國家の爲めに、他人の爲めに直ちに自己を棄てると云ふことを教へるのが其の根本思想である。其の流れが我國の武士道の上にも現はれて武士は飽までも自れを棄つる覺悟が大切である。死を觀る歸するが如きとか、死を鴻毛の輕きに比すと言ふ様な教へが武士道の中に瀰漫して居るのである。此の種の道德を稱して没我的の道德と稱するのである。之れに反して主我的道德と言ふものがある。主我的道德と言ふものは前の没我的道德に反して、飽までも自我を主張する事を以て道德とするのである。此の考へは西洋諸國に多いのである。西洋諸國に於ては古來自我といふものを善なるものと觀て來た。勢ひ善なる我を主張する

と言ふ事が、何より大切な道德と考へらるゝのである。例へば、西洋に於てはキリスト教の思想は主我的で、例へば聖書の内中には「人は、神の子なり」と言つてある。是は既に人の本性を神の性質と同様のものと觀たのである。神の心の一部分が、自の心に入つたのを良心と名付けるのである。近世新教を興したルーテルの宗教改革的精神といふものは、要するに倫理學上にいふ處の良心といふものを神の心の一部であると觀た點に有る。勢ひ基督教では自己を重んずるといふ事が何より大切な道になつて居る。其他西洋諸國に於ける倫理學者の説へる説も大體主我的道德説であつて東洋一般の思想の如く没我的道德を唱道する者は少いのである。一例を謂へば、今日の西洋の倫理學に於て自我實現説といふが如きものがある。自我實現説といふは己れの自我を飽まで主張してゆくこと、自己に持つて居る處の善なる性質を飽まで擴充すると云ふ事が、人間の何よりの道德である。例へば學者は學者としての自己のベスト、を果し、軍人は軍人として、實業家は實業家としての自己のベスト、を盡して行くと云ふことが何よりの道德になるのである。而して其自己の擴充の範圍が大きければ大きい丈け善人で有る。又道德的成功者であると、觀る見方である。この考へは希臘のアリストールの當時から既に謂はれて居る事で、現代に於てはグリーンと云ふ様

な有名な倫理學者が専ら唱導する處である。以上の如きものが主我的道德説と稱するのである。

三

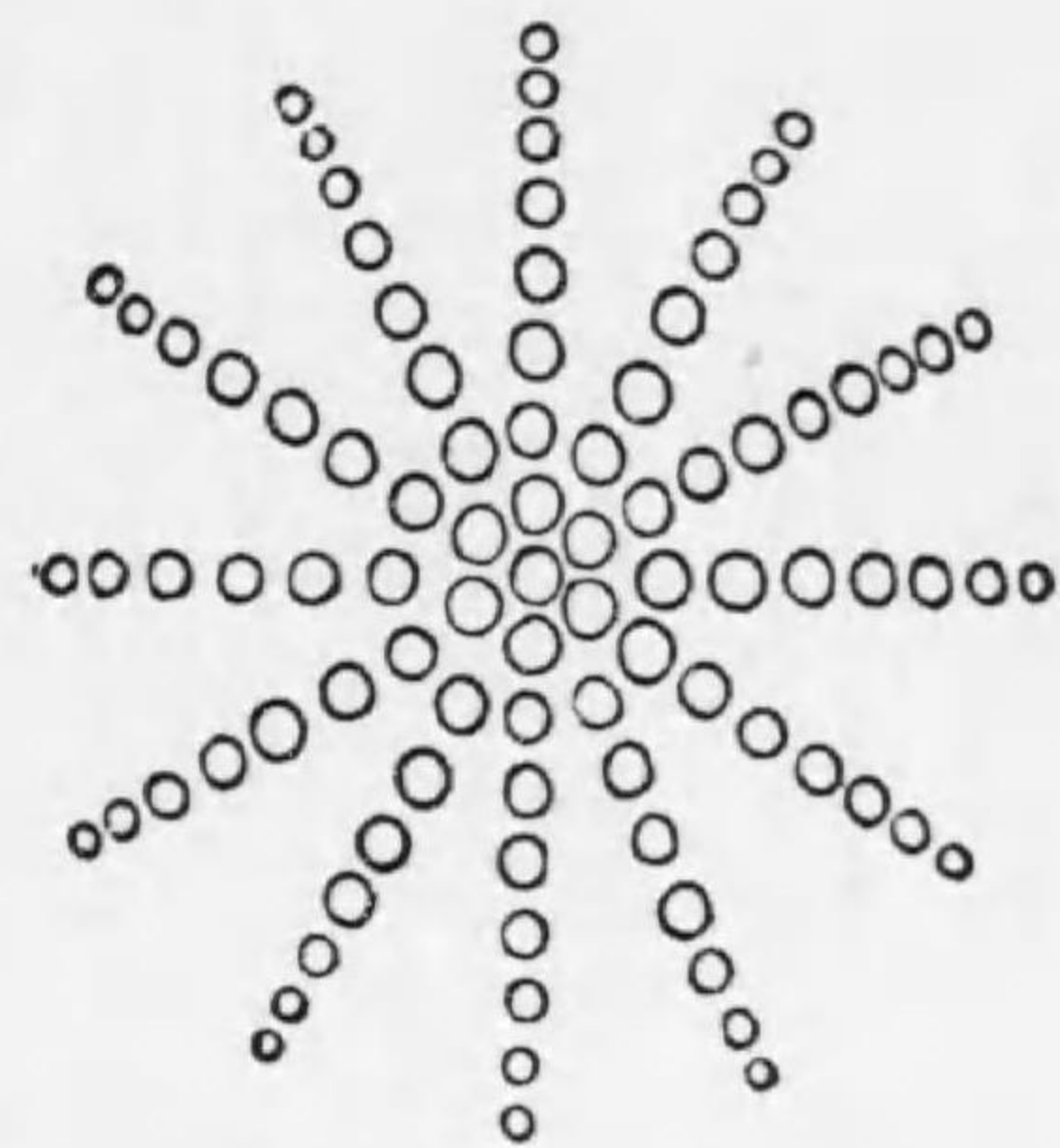
以上述べ來つた沒我的道德と主我的道德とが其ならば何れが正しいかと謂ふことはこれから述ぶる處の自我の内容の説明に依りて、充分に明になると信するのである。

偕て自我の問題は今日の學問で如何に研究していくかと謂へば、二つの方法がある。一つの方法は反省法他の一つは觀察法である。元來自我の研究は非常に困難なものであつて、之を例へて謂へば己れの目を研究する様なものである。目を研究するには其の目を以て目を見ろといふ都合な事が現はれて來る。自身の目で自身の目を見ろといふ事は、直接には何うしても出來ない。斯の如く自我を自ら研究するといふ事は、其の不都合なる點に於て目で目を研究すると同一である。其處で勢ひ如何なる方法を用ひるかといふと、例へば自の目の内に塵が入つたといふ場合には之を先づ鏡に照らして反射的に見るのである。丁度自我の場合に於ても、自我の性質を知らんとする爲めには、先づ其の反射鏡を用ひなければならぬ。其の反射鏡と謂ふのは、自我にとつては自己の周圍にある社會である。例へば自己の父母、兄弟、朋友、又學校仲間の如き者を謂ふのである。

である。其れ等の人に自身の我といふものが如何に映つて居るかと思れば、父母、兄弟、友達が自身を以て不親切な人間である、利己一偏の人間である、或は責任を重んじない者であると考へて居るか。亦は非常に親切な友情に富んだ善人であると見て居るかといふ事を自身の心に反省して観るのである。謂はば自己を社會鏡に照して、其の反映に依つて自我を研究するのである。之を指して自己反省の方法と謂ふ。第二の觀察法は前の場合と異つて、全く第三者が公平に觀察する方法である。自身の周圍の人々が自身を客觀的に研究する方法である。恰も醫者が他人の眼球を第三者として研究するが如き方法である。之を觀察法といふのである。大體以上の二つの研究方法に依り自我の研究をして行くのである。

以上の研究方法に依つて自我の内容を調べて見ると、自我の内容といふものは恰も一つの遠心的量を形成して居るのである。自我の内容を心理學的に研究して見ると、中央に一つの中心がある。其の中心からして内容が恰も月の暈の如くに廣がつて居る。其中心に近い内容程濃厚であつて、次第に中心を遠ざかるに従つて其の内容が淡く消へて行くのである。この形は恰も磁石か鐵粉を吸集したときの其に似て居る。丁度自我の内容が之れと同じく、其の中央に或る引力が有つ

て、其れに吸集されて、總ての自我の内容が暈の形に配列するのである。其の中心の引力といふものは果して何んであるかといふ事は非常に説明に困難なのである。この中心の自我引力は所謂自我の形式に屬する事で、哲學上の困難な問題であるから茲に省いて措く。兎も角もこの中心引



力に従つて自我のあらゆる内容といふものが引きつけながら一つの大きな暈を造るのである。其の内容の内でも中心に近い處のもの程其形が明瞭である。これを實例に依りて見れば、例へば自身の親兄弟といふ如き、又日日學びつゝある處の學校の課業であるが如き、自己にとりて最も利害休戚の明瞭なるもの程其中心の近くに現はれる。而して、あとは次第に利害の薄いものから、遠のいて行くのである。

例へば國家といふが如きものは餘程修養の積んだ人でなければ、自我の内容として持つて居る人は少いのである。嘗だ、修身教課書の上で抽象的に之を記憶するに止つて、決して己れの自我に現實な内容とはならぬ。自己から離すことの出来ない様な

密接な國家觀念といふ様なものは、一般の人に少いのである。然し例へば其國家觀念といふが如きも、若し國家に一朝事ある際は如何なる人々に取つても、愛國的感情と共に自我の中心的方面に明瞭な形になつて現はれて来る。即ち一度自國が他國と争を始めるといふ場合には、假令教養のない人と雖も皆國家の爲めに自ら振つて劍を採るといふ様になるのである。斯の如き場合に於ては、日常平和の際に自我の内容として稀薄であつた處の國家といふものが、今は非常な力を持つて人々の自我の中心的内容に現はれて来るのである。此自我の内容は多少人々に依つて皆別々である。其人の社會的職業、又廣く社會的位置に依りて其内容は變化するのである。例へて謂はば學校教育に従事する處の教師といふが如き者の自我の内容は、學校の學生といふ者が非常に大切な自我の内容を造つて居る。其の學生の中に勉強する者があれば、宛がら自己の幸福の如く其れを悦ぶ。又自己の教授して居る學科目といふが如きものも其教師に取つて非常に大切な自我の内容である。學生の自我の内容としては、故郷に遺した父母兄弟といふ様な者が非常に大切な中心的内容となる。又政治家といふ者になると世間の輿論といふものが非常に大切な自我の内容になるのである。其故に政治家は絶えず日々の新聞を手にして自己に對する世間の批判といふもの

を氣に懸けて居る。實業家は絶えず富の獲得といふ事に心を用ひて居る爲めに、經濟上の日々の出来事といふものが非常に大切な自我の内容を造つて居る。之等の處から考へて見ると自我の内容といふものは社會といふものを離れて存在するもので無いことが明である。前に述べた如くに教師といふ者には學生といふ者が大切であり、政治家には世論が大切であり、實業家には經濟的事項といふものが大切な内容であるとして見ると、總て人は自我の内容を社會から與へられたるものであると謂ふ事が出来るのである。換言すれば社會有つての自我である。

世間には稍もすれば極端な個人主義を唱へる者がある。自己は社會といふものに對して何等の義務を負はない。同時に權利も主張せない。自身は絶對の個人主義であると言ふ事を主張する者がある。併し此種の個人主義といふものは到底實際的の人間に有り得可からざることを空想して居るに過ぎない。若し社會といふものが無かつたならば、個人の自我と云ふものも成立しない。吾々が喜び、悲しみ、憤るといふ個人的の事項に就いて考へて見ても、其喜怒哀樂の原因となるものは常に社會的のものである。自己一個人のみでは怒ることも、哀しむことも、樂しむことも喜ぶことも無いのである。唯だ一枚の白紙の様なものになるのである、昔の人は社會を全く離れた孤獨

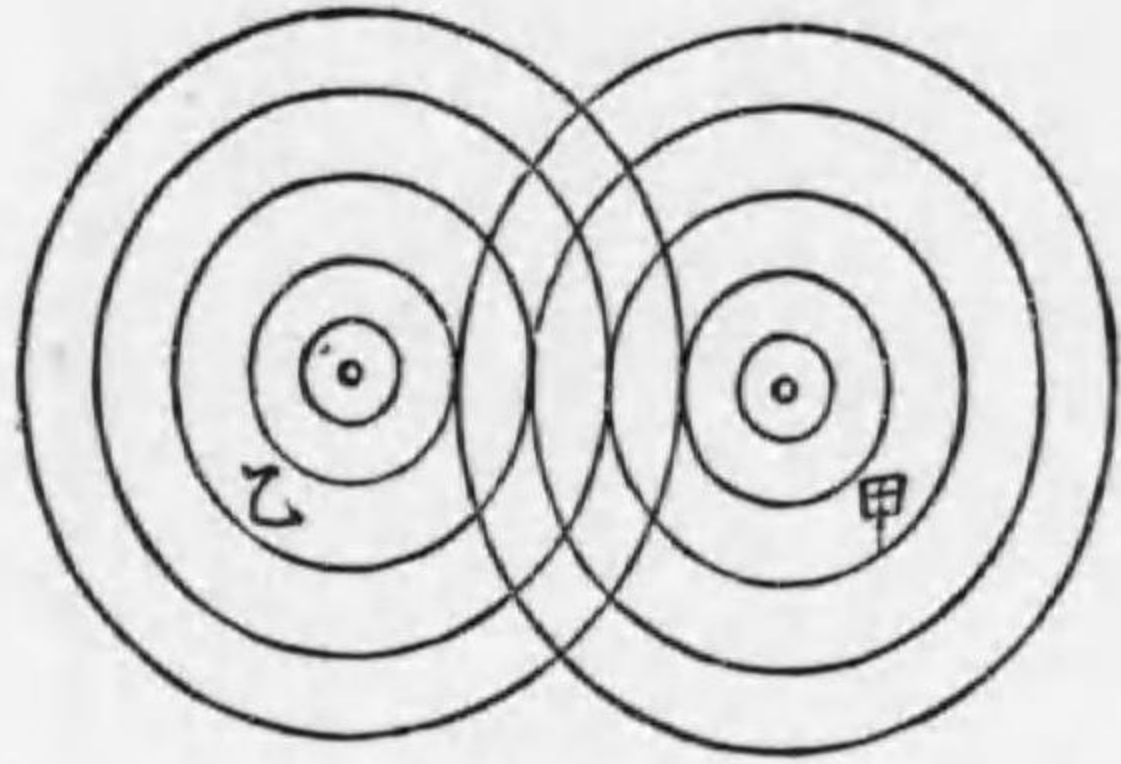
の生活といふものを屢々空想したのである。例へば英國の有名な小説家がロビンソンクルソーの孤島の生活を描寫した。其處ではロビンソンクルソーは全く社會から離れて、生活したものの如く書かれてある。然し乍ら好く之を研究して見ると、ロビンソンクルソーは其時社會から全く離れて居るのでない。彼が其孤島に於て丸木の家を造つたり、又魚を網で取つたり、毛皮を取つて衣にした。之等の衣食住の知識といふものは、彼が既に社會的に教へられたるもので有つて、漂流以前の社會的生活から教へられたのである。尙又彼の携へて行つた處の一疋の犬を愛したといふことも、又日々水平線上に助け船が現はれないかと絶えず憧憬して居た事も、ロビンソンクルソーに取つて、到底除く事の出来ない社會性を證明したのである。決して人は絶對的に社會から離れて生存する事は出来ない。又従つて社會を離れた個人の自我の内容といふものは理論上許すことが出来ないものである。我國に於ても從來佛教の感化で屢々世を捨て深山の奥に隠れた處の名僧知識があつたけれども、多くは絶對的の孤獨生活を送り得たものはない。例へば深山の奥に在つても俗界に於ける自己に對する批判を氣にして居つたのである。中には再び社會が戀しいとて歸つて來た者もあるのである。之等の點から考へて人は多少なりとも社會と云ふもの、中に浸

つて居なければ、自我の内容といふものが成り立たないと謂はねばならぬ。

以上述べた自我の内容としての遠心的の量は中心に近い内容程明白である。其が中心を離れるに従ひ次第々々に其内容が薄暈けて行くのである。従つて吾々の自我と謂ふて居るものには明瞭な境界線を立てることは出来ないのである。普通人々は自身と他人といふものとは明瞭に別れて居るものである。即ち独立的のものであると考へて居る。然し其は大なる誤りで、自身と他人といふものは反つて密接な関係のあるものである。

自身と他人との関係は圖に示せる様に自我の内容は他人の自我の内容と相接觸し、遂には其兩者の内容が共同に交叉するのである。之を普通、自我の滲入現象と稱する。例へば茲に一つの學校の學生が二人在りとして、其の甲の學生にとつては其學校の繁榮は甲の悦びとする處であり同時に、乙の學生にとつても其學校の繁榮は、同じく悦ぶ所である。若し其學校が衰微するといふ

滲入現象



事があれば、甲乙兩者にとり共同の悲哀となるのである。之れ明かに甲乙兩學生の自我の内容が互に滲入して、圖に示せる共同の部分を作るのである。之の共同の部分がある故に、始めて社會と云ふものが現はれて来る。一家、一村、一郡、乃至一國の共同的の生活といふものは人間に此の自我の滲入現象があるから始めて成立するのである。斯る共同社會が成立する處から又社會的道德といふものが現はるゝのである。母校を愛する愛校心、自國を愛する愛國心、皆之等は此の自我内容滲入の結果と謂はねばならぬ。然るに世の人々は此道理を充分に知らなかつた爲めに、稍もすれば道德及び法律に於て個人主義を稱へたのである。殊に十七八世紀から十九世紀の半迄といふものは、物質的科學が發達した結果、社會も一つの物質の様に考へ、恰も原子が相集つて物質を造る様に、個人が集つて社會を造ると考へた。例へば佛蘭西の革命時代に有名になつたルツソーと言ふ學者の如きは社會民約説を主張したのである。民約説といふのは獨立の個人々々が相約束して社會を造ると謂ふ説であつて、其れは恰も原子が單に物理的の法則に依つて結合した如きものであると考へたのである。然し實際の社會は決して斯くの如き物質的のものでなくして、前述の如く自我滲入に依つて始めから離る可からざる關係を以て居るのである。若し社會が單に個人

的約束に依つて社會を造つて居るとすれば、何時たりとも其社會を廢止し解散する事が出来る。然るに吾々は未だ嘗つて國家を廢止した事はなく、家族を解散したためしはない。自己の兄弟両親が貧困で有るからとて、故意に其一家を離散した人は昔から無い。自國が貧乏であるから其國籍を故意に脱するといふ人も未だ嘗て見ないのである。若し任意に國家を造るならば又従つて任意に國家を解散する事が出来なければならぬ。然るに二千五百八十年の長い我國の歴史に於て、未だ吾々は我帝國を解散した事はないのである。かの弘安四年蒙古襲來の時から、近くは日清日露の大戦に於ける國家の危機に臨んで、吾々は未だ國家解散を主張した事はない。危機の來たる毎に益々努力して國家維持のため義勇奉公を務めたのである。之等を以て見ても決して社會と言ふものは單なる個人契約で出來たのでなくして、前にいふ自我内容の密接なる滲入に依つて離る可からざる必然的關係を造つて居る事が知らるゝ。道德上から吾々は常に社會的責任といふ事を主張するが、之が單に契約的に考へて冷淡なる皮相的な權利義務のみからいふならば、決して責任といふが如きものは起らぬのである。なぜならば、個人の出來事が直接他人に影響を及ぼさぬからである。然るに若し自我の滲入に依つて吾々個人が離る可からざる連鎖を造つて居ると考へ

るならば、社會に於ける個人は他人に對して重大な責任が現はれて來るのである。例へば一家に於て、若し己れが不道德な行爲をすれば、親兄弟を始め、一家の全ての人々に非常に迷惑を及ぼす事になる。一校の學生が不名譽な行爲をした場合は、其影響が全校に及ぼす。斯くて一個人の道德的の責任といふものが非常に重大なものになるのである。今日一般に流行する處のディモクラシーの精神は之れに基いて居る。社會の各人が互に其共同の責任を重んじて、自己の職分を完全に盡す事が、眞のディモクラシーの精神でなければならぬ。元來個人が個人を個々別々のものと考へるのは、吾々の肉體上に於ける誤れる考へに基くのである。肉體上から人々はAの人とBの人とは個々獨立のものである。然しながら若し之を精神的又は無形的に考へるならば、他人と我と離る可からざる關係になつて居る。總て人々は他人であつて己れあり、己れあつて他人がある。換言すれば自我と社會といふものは相即的のものである。

四

以上述べ來た事は自我の内容が如何に社會に形成されて居るかと言ふ事を述べたのであるが、尙最後に其の自我の内容が如何にして發達し來つたかと言ふ事を述べて見たいと思ふ。自我の發

達を研究する爲めには兒童の精神を先づ研究する事が大切である。自我の最初の形は普通之を主觀的自我と稱せられて、比較的社會を離れた孤獨的なものである。然るに滿一歳頃になると、兒童は徐々に其自我の内容を社會的に發見する様になるのである。始めの内の自我の内容は極端に主觀的のものであつて、謂はば利己的のものである。凡そ自我は其始めに當つて自己の生命を保持する爲めの本能として現はれて來る。是を主觀的自我と云ふ。此の主觀的自我の内容は滿一歳頃の兒童に既に證明できる。此の頃の兒童は其片言の内ちに此の主觀的自我を現はす總ての言葉といふものは自我の内容を反映するものであつて、例へば吾々の話は己の心の中に在るものを言葉の上に表はすのと同じ事である。此の時代の兒童の言葉は世界中皆共通である。例へば西洋人は母親の事をママと謂ひ、我國の兒童はマンマと謂ふのである。之は何れも自我内容を説明したのであつて、一言にして云へば、食物と言ふ事を言ひ現はすのである。西洋人のママと言ふことは、吾々成長した者が考へて居る様な精神的の高尙な母親の意味ではない。兒童の言ふママは己れの生活に必須の母乳を求める意味である。吾國の兒童がマンマといふのと何等の相違はないのである。之を要するに此の時代の兒童の自我内容は、唯だ主觀的に、亦本能的に、己れの

命を維持する事のみを自我の内容として居ることを證するので、之が人間の最初の自我内容である。

此種類の自我内容は多くは無意識的に現はれて來る。決して人類丈けでなく、動物共通の自我内容である。此の自我内容のみであると所謂露骨な生存競争が行はれる。一般の下等動物の世界に於ては絶えず此の弱肉強食の鬭争が絶える事がないのも是に原因するのである。人類も此の種類の主觀的自我内容のみならば、到底社會を造る事は出來ない。即ち前に述べた様な自我滲入の現象が起らぬのである。従つて平和の社會は到底望むことが出來ない。然るに幸に人類には此の外に客觀的自我といふものが有つて、其れに依つて秩序ある平和の社會を營む事が出來るのである。然るに時としては人類の昔の動物時代に逆戻りして、此の主觀的自我に依つて露骨なる生存競争を戦はせる事がある。今日の如き文化の進んだ時代に於ても、時々文明國民間に大衝突を來たすのは皆此の主觀的自我の現はれるが爲めである。此度の歐羅巴の大戦争の如きも其の原因を糺せば、獨逸、英國、佛蘭西、露西亞等の國民間の主觀的自我の大衝突と見るべきものである。以上の主觀的自我は兒童の成長するに伴ふて次第に變化を來たし、更に新なる客觀的自我といふ

ものが現はれて來るのである。道德的自我は主として此の客觀的自我に基くのである。

以上述べた處の主觀的自我は多く不道德的原因となるものであるが、之に反して客觀的自我といふものは、自我をして益々道德的ならしむる基礎になるものである。此の客觀的自我は凡そ五六歳頃に成つて非常に顯著になる。兒童が滿六歳頃に成ると段々知識が殖へ、従つて社會的になつて來る。其れ故に世界各國共この時期に於て就學の時期として居る。我國に於ても徳川時代の寺小屋は凡そ此の前後から始つて居る。今日の小學校の入門期も凡そ滿六歳である。小學校といふものは兒童にとつて始めて社會的の生活を教ゆるもので、従つて兒童の自我は此就學期からして次第に社會的になる。學校に行くに従來家庭に於て經驗しなかつた事項が續々現はれて來る。一例を謂へば自己と同輩の多くの兒童が日机を列べて居る。一人の教師は此を皆平等に取扱ひ勉強する者は譽め、怠惰なる者は叱る。其處で始めて兒童の心に競争心、名譽心、嫉妬心が現れる様になる。之等の名譽心、競争心、嫉妬心は既に兒童の心に客觀的の自我が出來た證據である。

今日の心理學では客觀的の自我といふものを二つに區別して考へる。例へば米國の著名の心理

者ゼームスは、此の客觀的の自我を物質的客我と社會的客我と區別した。前者は卑近な例で謂へば衣服といふが如きものも一つの物質的客我である。何んとなれば一般の人々は衣服といふものに就いて絶えず心を引かれて居る。其の時々の流行に依つて自己の服裝を美麗にしようと思つて居る。就中、婦人は世界各國とも衣服に對する執着心が強い。極端な例を謂へば、女は衣服を大切にする事は自身の身體より以上の事がある。俗に「京の着倒れ」と謂ふが如くに、衣食住の内で食物よりも、住家よりも、何よりも衣服を大切にする。食物より衣服を大切にするといふ事は、既に身體よりも衣服を大切にするといふ事と同じ。斯く考へ來れば、人間は普通自我といふものを一個の身體に限つてをるが其は大なる誤りと謂はねばならぬ。物質的に考へても身體以外の物を自我の大切な内容として居る事が極めて明瞭である。衣服の外には所有品、己れの書齋の書物、遊戯の道具等も自我の一部である。更に廣めて考へて見ると、自身の住宅、財産、土地の如きも明に自我の内容である。

而して客觀的の自我の内に於ても此の物質的の自我といふものは、稍もすれば自我を不道德的に導くものである。何んとなれば盜賊は他人の所有して居る金錢財寶を自我の内容としたい處から遂

に盗をするのである。亦大なる別荘を造つて多くの人の住ふべき廣大なる土地を占領し、之を以て世の中の人々の羨望の的となるが如きは、明かに現代の成金の自我の根性を現はすものである。全て人類が所有欲の爲めに鬭争をするが如きは皆この物質自我の爲めである。

今一つの社會的自我若しくは精神的自我と稱せらるゝものは、多くは自我を道徳的に導くものである。其の初歩は兒童が既に家庭に於て之れを養ひつゝあるのである。例へば家庭に於ける父母・兄弟・姉妹・僕婢に對する兒童の愛情と謂ふものは既に此精神的自我を現はして居る。兩親が自身の行つた事に就いて悦んだ時に、兒童は又非常に満足に感ずる。兄弟に親切にした時に、其兄弟の悦びを亦己れの悦びとするのは、之れ明かに兒童の精神的客我を示して居るのである。普通此種の精神的客我を指して良心と謂ふのである。其れ故に良心といふものは絶えず、前に述べた所の主我的自我や、亦物質的客我といふものと争をするのである。稍もすれば主觀的的自我や物質的客我が自己の行爲を誘惑せんとした時に、此精神的客我、即ち良心といふものが現はれて其等の敵に打ち勝つて自己の精神的客我を満足させ様とするのである。之を指して道徳的努力と謂ふのである。斯くて吾々の精神的客我は先づ家庭に始まつて、次第に其の範圍を廣めて行くので

ある。多く此客我は成仁した人にとつては、多く自己の職業の範圍と一致して居る。例へば昔の武士といふものは自己の武士たるべき面目を重んじたのである。武士は嘘をつくといふ事を許されない。即ち武士には一言なしといふ武士階級の共通の精神から、若し人から自己の眞實を疑はれたる時には、其不名譽を除く爲めに切腹をしたのである。金を借りる時にも其證文に、若し此の金錢を期日まで返濟せなかつた時には、衆人の前で御笑ひ被下ても苦しからず候と書いたのである。之等は武士といふ階級の名譽を重んじて、其の階級に屬する人々に不名譽を與へまいとする處の心の働である。之れを裏面から謂へば、其の武士の精神的客我は武士階級といふ廣い範圍に廣まつて居るといふ事が出来るのである。之を兒童が家庭丈けの範圍を止め置くのと比較すれば、武士の精神的客我は非常に擴大して居るものと謂ふ可きである。更に卑近なる例を擧げて考へて見ると、社會的の個々の職業の範圍に於ても同一の事が謂はれるのである。例へば消防夫といふ者は消防夫としての責任觀念から、猛火の中をも突進する。兵士は平素事なき時に於ては必ずしも勇氣はないけれ共、戰場に臨んでは兵士たる義務を果して勇敢に戦ふ。醫者は自己の職業以外に於ては屢々不道徳をする事があるけれども、病人に對する投藥上に於ては全責任を負ふて之を實

行する。散髪師の如きは屢々仲間と争をする事があるけれども、彼等は未だ嘗つて自己の剃刀を以て斬合をした事はない。彼等に取つての剃刀は恰も、武士にとつての腰間の大小の如きものである。武士が帯刀して居つても武士の名譽に懸けて決して容易に抜ふとはしない。此點に於ては其の精神的客我の範圍の大小はあれ、皆それぞれ社會的位置に應じて其範圍が定まるのである。一見不道德的職業を持つて居ると見ゆるものでも、皆多少とも此種の客我を所有して居る。例へば博徒の仲間の如きも、其の中には博徒的の客我といふものがあつて、一種の習慣道德となつて力強く働いて居る。

前に述べた處の物質的の客我といふものも、次第に年と共に大きく成つて行く子供の内は慾は至つて小さい。僅か自身の玩具といふが如きものに止まつて居る。然るに年と共に衣服を要求し書物を要求し、進んで金錢を要求し、家屋を要求する。之れと同じく精神的客我也次第に修養と共に擴大して行く。唯だ違ふ點は、物質的客我の方は多く廣がれば廣がる程、自己を苦しめる。金錢や、財産が、殖へれば殖へる程、心配になる。別荘を到る處に持つて居る人は、其の別荘が風雨の爲めに壊れなれないかと日夜心配せなければならぬ。元より或處迄人間は自己の生命を維持

する丈けの財産と材料が必要である。然れ共其れ以上の物質は反つて自己を苦める。又自己の心を腐らせることになる。世の多くの財産家が財産を持たぬ人よりも、反つて煩悶と心配とを絶えずことがない。然るに之に反して精神的客我は擴大すれば擴大する程、自己の良心の満足を求めることが出来る。亦同時に人品を高ふするものである。精神的客我の範圍は、例へば愛家心、愛校心とか愛國心等に現はれて来る。愛家心を持つて居る人は、其家の全體を自己の内容とするのである。換言すれば自我の内容が其家全體を抱擁して居るのである。其故に其人にとつては、自身の家の衰微する事は宛然自身の身體を傷付ける様に感ずる。自身の父母、兄弟の立身出世は、宛然自身の出世立身の如く悦ぶ人である。何んとなれば、其の人の精神的自我は家全體に廣がつて居るからである。亦愛校心ある人は自己の母校の利害を以て、自己自身の利害と一致して考へて居る。其故に母校の繁榮を宛然自己の繁榮の如く悦ぶ事が出来る人である。従つて其の人の自我の内容は學校全體と常に一致して居る。斯くて吾々の精神的自我 謂ふものは絶えず自己を修養する事に依り、一家から一村に進み、一村から一國にまでゆく。而して其精神的客我の廣まつて國家全體を蔽ふに至つた時に之を愛國心と謂ふ。亦斯る愛國心を持つた人を國家の一大忠臣と

謂はるゝのである。我國の歴史に於て楠公の如きは其自我の内容が其國家を抱擁して居つた人であるから、之を一大忠臣として國民が崇めるのである。

斯の如き精神的自我の内容は、次第、次第に其人の修養と共に擴大して遂に國家に至り、更に進んで全人類をも抱擁するに到る。宗教家の中には屢々此種の大人格者が世の中に現はれた。例へばキリストであるとか、釋迦であるとか、ソクラテスであるとか云ふが如き人は、世界人類の幸福は自己の幸福と考へた人である。若し聖書の謂ふ處が正しければ、キリストが全人類の罪の救済の爲めに、十字架に登つて満足して死んだ。是は基督の精神が此全人類の幸福を自己の幸福と考へたからである。釋迦や、ソクラテスが悦んで大往生をしたといふ事も、其の釋迦やソクラテスの自我の内容が全人類を蔽ふて居つたからである。其故に基督や、釋迦や、ソクラテスが、一見自己の人體を犠牲にして世界人類の爲めを計つた如く見ゆるけれ共、實は自己を捨てたのでなくして、反つて自己の満足を得て死んだと謂ふ事が出来る。其意味に於て之等の聖者は其人體を失つたけれども、無形の我を今猶ほ人々の心の中に遺して居る。

偕て始めに述べた所の主我的道德と沒我的道德と何れが正しいかと謂ふ問題は、茲に到つて明

瞭に解釋する事が出来る。元來道德上に於て、普通云はれてゐる處の犠牲といふ事は實は確實な意味ではない。犠牲といふ事は自己の自我を捨て、他人の爲めにするといふ事である。然し乍ら眞の道德は自己を捨てるのではなく、反つて自己を擴大するのである。之を他の言葉で謂へば自我を實現するのである。自身を捨てるといふ事は眞の道德の意味でなく、自己を捨て、他人の爲めに盡すと云ふ事は既に水臭い事柄ではないか。他人の爲めを考へるといふ事は、宛然自己の事を考へると同様に、換言すれば他人の痛さは自己の痛さであるといふ事にならなければならぬ。自身の親友が苦しんで居る事を自身の苦しみとするから、始めて其親友の爲めに力を盡す事が出来るのであらう。自身の國が危險に陥つて居るといふことを考へた時に、其れが宛然自己の危難である如く實感することに依つて、始めて國家の爲めに盡す事が出来る。之を愛國の體驗といふのである。此意味に於て吾々は現代の忠義と謂ふことを、新しく解釋せなければならぬと思ふ。忠義と謂ふことは唯だ文字通りの國の爲めに身を捨てるといふことではない。反つて國家と謂ふものを自我自身の内容にすることである。其れでこそ始めて眞の忠義と謂ふことが出来るのである。斯く見た時に吾々の道德は單なる沒我的道德ではなくして、主我的道德である。亦然し沒我

と謂ふ意味を主観的自我や物質的客我といふものを捨て、精神的客我と謂ふものを益々認める意味ならば其でもよいのである。

要するに人間のなす可き道は、道德的自我を益々實現することである。如何なる人間にも此道德的自我の種子が生れながらに有る。其の種子が樅の實の如くに將來亭々たる喬木となつて、天を蔽ふ如く成長し、何百万の實を結ぶに至るのである。斯の如く自我は斯の人々の努力如何に依つて偉大なる人格となることが出来るので、之が眞の自我實現の道德である。

二 個人的本能と社會的理想

一
現今は人間の本能に就いて色々研究せられて居る。之れを道德上から見ても、本能は善なるものか悪なるものかと云ふ事に就いても、世の中に多くの議論がある。併し本能が善いとか悪いとかは始めから定める事は出来ない。或時には善い事もあり又或時には悪い事もある。例へば、吾々の食慾の本能は生命を維持する上に於ては是非無くてはならぬ。其點から云へば食慾は大切であ

る。然し食慾ある爲に盜の心を起す場合もある。此場合は不道德と謂はねばならぬ。又吾々は常に競争心を以て居る。之れも一種の本能である。競争心がなければ人は向上することは出来ない。然し競争心がある爲めに屢々他人に害を與へる事もある。其故に一概に善とも悪いとも云ふ事は出来ない。本能が善いとか悪いとか云ふ事は、其の本能を用ひて、或人生の理想又目的を果す場合に善いとか、悪いとか云ふのである。従つて本能自らは善とも悪いとも云ふことは出来ない。之を例へて謂へば、本能といふものは、恰も繪畫に於ける繪具の様なものである。繪具丈では繪になることは出来ぬ。若し人が美術といふものは只一枚の紙と、繪具丈で出来て居ると思つたらば其れは大なる誤りである。繪具には、黒もあり、白もあり、黄色もあり、赤色、色々ある。然し此處に一人の美術家が其れを以て繪を畫くに非ざれば、美術としての價値が現はれない。全く繪の畫けない又美術的觀念のない人が其繪具を只紙の上に塗つたとて、美術的にはならないのである。此の繪具が一個の價値ある繪畫の作品となるには、必ず其處に畫家の美術的觀念がなければならぬのである。其故に美術と云ふものは繪具にあるのではなくして、寧ろ其の作者の藝術的精神、又美術的觀念にありと謂はなければならぬのである。本能と道德との關係も之と同様で

ある。即ち本能丈あつたからとて道德にはならない。其本能が善なるものとなるには必ず道德的觀念が其處に加つて居なければならぬ。食欲と云ふことも其丈けでは道德にはならない。其人が或國家に對する使命を果す爲に自身の命を長へる必要がある。其場合に其命を保持する爲に食欲と云ふ本能が利用されるのである。其結果食欲が道德的のものとなる。競争的本能も同様である。今日の人々は兎もすれば競争的本能は世の中の平和を亂し、人類を鬭争に導く。之を國民的に見ると軍國主義を起す原因になる。其れ故に惡であると考へる人が多いのである。然し乍ら競争的本能が惡になると云ふことは、其の本能を道德的理想に依つて導かない結果である。之れを理想に依つて導けば寧ろ世の中の文明を發達せしむる有力なる原因になるのである。

現今のあらゆる社會問題と關連して、人間の本能と云ふことが最近益々研究せらるゝようになつて來た。殊に現今は社會主義的思想が流行すると共に、現今の社會組織といふものは餘りに人爲的である。自然から甚だしく遠ざかつて居る。人間はもつと自然に立戻つて、原始的の状態になつた方が反つて好いのではなからうかと云ふ様な議論が益々盛んになつて來た。然も此種思想は既に過去に於て佛蘭西革命時代にも現はれたのである。例へば、當時の時代精神を造つたと謂

はれて居るルツソーの如きは、總て人間は自然に歸らなければならぬ。從來の人爲的社會の組織では反つて人間の本性を破壊するものであると云ふ様な説を盛んに唱へたのである。現今も稍其の佛國革命時代に似通つて來た。歐羅巴の大戦の結果は種々なる點に於て社會改造の機運を促すに到つた。殊に露西亞の如きは眞先に社會改革を實行した。併し其の革命の結果が果して理想的に社會が改造されたかと云ふと、寧ろ失敗に終つて居る状態である。其結果自然に歸ると云ふ問題の如きは、唯だ簡単に即決することの出來ない問題になつた。即ち人間の自然的本能と云ふものは、其の儘に放任して置いて善いものが惡いものかと云ふ事は、益々學問上怪しくなつて來た。現代に於て社會革命を鼓吹する人々の思想の中には、時とするとき非常に誤つた考へを持つて居る人がある。一例を謂へば社會に個人の所有權と云ふものを許すが爲に、反つて世の中が亂れる。所有權を取去つて自然に歸れば人々は互に争と云ふ事が無くなる。即ち世の中が平和になると云ふ様なことを考へる人がある。斯の如く論ずる人に限つて、人類の原始時代が理想的であると夢想して居る。原始時代が果して理想的であつたか、又平和であつたか甚だ疑しい。所有權の無い時代に果して人々は相争はなかつたかと謂へば、其れは寧ろ反對であつて、個人は互に露骨な

る生存競争を行つたのである。原始時代の人類は恰も一般下等動物の様な性質があつて、唯だ本能だけで生活をして居つた。従つて、互に謙讓の道を知らなかつた。其結果は一片の肉を多くの犬に與へた様なもので、此肉を互に掠奪せんとして非常な争をしたのである。日日闘争が續いて其れが爲に弱肉強食の悲惨な状態に陥つた。之れが原因となつて原始時代に於ては非常な氷い年月の間人類文化の花が開かなかつたのである。抑も人類の文明が現はれ出したのは未だ過去四五千年位のものである。其以上の幾萬年と云ふものは所謂原始の闘争時代である。人文が發達したのは所謂社會組織が形造られてからである。農業時代に入つて世界の人類は漸く社會組織を形成するに到つた。此社會組織が發達するに隨つて世の中に道德と云ふものが現はれて來た。今日の法律は即ち其の道德が社會組織に應じて成文律となつたものを指して云ふのである。此處に到つて初めて平和の時代が現出して來るに到つた。例ば今日の法律として現はれた所有權と云ふが如きことは實は社會組織の特に産み出した事である。従つて此社會組織が作つた所有權を破壊する事に依つて必ず世の中は亂るのである。單に所有權を無くしたからとて平和が來ると考へるのは餘りに安價なる抽象論と謂はなければならぬ。今日の社會問題となるのは今日の社會組織を

破壊するのではなくして改造する問題である。然かも其の改造は出來るだけ、人間の自然的本能と適ふものにし無理の起らない様に、新なる組織を造り出すといふ事にあるのである。

二

人類の本能には色々ある。其中でも現今特に人の注目を引く社會的の本能としては自由競争の本能である。今一つは矢張り社會的の本能の一つとして前者に反する相互扶助の本能である。今日は此の個々の本能に關して世間の人々は非常に議論を戦はして居る。今迄の處では人間の競争の本能と云ふものは人類の平和を亂すものである。須く斯の如き本能は絶滅せなければならぬ。其れに反して、相互扶助の精神といふものを助長せなければならぬと云ふのである。然し此議論も其儘採用する事は出來ない。前述の如くに本能其れ自らでは善惡を分つ事は出來ない。唯だ此本能を道德的の標準に依つて指道して始めて善い惡いか定まるのである。道德的の指道がなければ例令へ相互扶助の本能と雖も、好いものとは云ふことは出來ない。

抑も競争の本能と云ふ事はダウインの進化論に依つて盛んに唱道された事柄である。ダウインの言つた進化といふのは一般の生物間に行はれることであつて、生物が互に生存競争をする事に

依つて弱者や不適者は滅び、強者や適者が世の中に生存して、それが生物一般の進化を促したのであると云ふ説である。此説が廣く一般の社會問題に應用せらるる様になつて、第十九世紀の後半第二十世紀の初頭に到るまで廣く世の中に行はれたのであつた。今回の歐羅巴の大戦争までは政治界、經濟、及至、教育及學術界に於ても廣く此進化的思想が行はれて、社會の進歩は優勝劣敗の生存競争に基くものであると云ふ思想が流行した。其結果として政治的には國家間の競争を起した。強國は弱國を併呑して誰一人として其れを非難する者がなかつた。遂に極端まで進んで「力は即ち正義なり」と言ふ様な議論さえ世の中に唱へらるるに到つた。今回の歐羅巴の大戦の如きも、實は此の進化的思想が原となつて世界各國の露骨なる自由競争を促し、其結果大戦となつたのである。斯の如き事情に立到つたといふことも、競争本能といふものが悪いのではなくて、其競争本能を導いて行く道德的理想がなかつたといふことが悪いのである。

然るに歐羅巴の大戦争があつて以來、世の中は益々平和を要求する様になつて來た。戦争の結果戦争と云ふものは利益幸福を人類に與へるもので無い。寧ろ戦争は人類社會に悲惨な結果を持ち來たと云ふ事が解つて以來、現今は益々平和を要求するようになって來た。従つて、例へば

クロボトキンの相互扶助論と云ふ様なものが、世の中の人々の注意を引くに到つたのである。實はクロボトキンの「相互扶助論」は千五百〇四年に既に第一版が出版された。然し其の時代は前述の如くダウイン以後の優勝劣敗、生存競争、等と云ふ競争本能を元とした説が世の中に多く採用せられて居つたから、此「相互扶助論」は世の人に顧みられなかつた。反つて當時世の中の嘲笑を招いた位である。然るに今回の戦争の悲惨な結果は遂に今迄顧みられなかつた此の相互扶助論が世の中に歓迎せらるゝ様になつた。此相互扶助論は矢張り一般の動物の研究から現はれて來た説である。クロボトキンは多く西比利亞等の野を歩いてダウイン等の餘り心付かなかつた種類の動物を研究した。其結果、蟻であるとか、蜂であるとか、小鳥であるとか、猿猴等の種類に於て相互扶助の本能が著しく發達して居るといふことを發見した。此點はダウイン等の心つかかなかつた點である。ダウインは生物の進化といふ事は専ら自由競争、優勝劣敗の本能に依るものであると云ふ事を述べたのである。然るにクロボトキンは比較的群棲する處の動物は、反つて其仲間をいたはり、相互に扶助をして、其種屬の保存を計つて居ると云ふ事を述べた。其點に於ては人類も生存競争の本能と共に、他方に於て強く相互扶助の本能を持つて居ると云ふ事が明である。従つて専ら生

存競争といふ事に重きを置いて人類社會の發達が考へられて居つたのを、此の相互扶助の説が承認せられて、益々人類は互に愛せなければならんと云ふ説が識者間に唱へられて來たのである。

三

以上の如く、或時は生存競争の本能を重んじたり、或時は相互扶助の本能を重んじたりすると云ふ事は、之れ明に時勢の變化である。而して、其時勢の變化といふ事は人間の社會的道德に對する考へが常に變遷して居る證明である。言換れば本能其ものが善い惡いと云ふことではなくして、人類の社會的理想に依つて本能に對する見方が變つて行くのであると云はねばならぬ。今日の人は競争と云ふ事を非常に悪い事に思つて居る。然し競争の無い處に進歩はない。例へば學校教育に於ても學生を勵す方法として、競争原理と云ふものを實際的教育の中に採用して居る。多くの學生を一つの教場に集めて、互に競争心を起さして、切磋琢磨させると言ふ事は非常に大切な教授法である。其點に於ては試験もある處まで有力なる教授法となるのである。若し競争と言ふ事が悪ければ、今日迄の教授法は總て、捨て了はなければならぬ。亦學生をして競争させるといふことは非常に悪い結果を來たす可き筈である。然るに事實は其に依つて學生の智能が發達す

る處を以て見ると、反つて教育上の競争原理は非常に大切な事であることが判るのである。只此處に注意す可き事は教育上に於ける競争原理と云ふ事は、其背後に教育の道德的理想と云ふものがあるからである。教師が其教育的理想を標準として、學生をして競争をせしむるから何等の弊害が現はれない。反つて教育上大なる効果を納める事が出来るのである。之れを以て見ても競争本能と云ふものは人間に採つて善でも惡でもない。之を指導する道德的理想の有無と云ふことに依つて善惡が定まるのである。又其と同時に相互扶助と云ふ様なことを一概に道德的だと云ふ事は出來ない。例ば若し極端な相互扶助が行はれたとするならば、人々は皆獨立心を失つて了つて、只他人に依頼することとなる。依頼心を起させる結果非常な不道德的現象が顯はれる。彼の有名な國のスペンサーと云ふ倫理學者も其點に就いて警告を與へた。彼が云ふには道德的利他と云ふ事な英を世間の人は非常に推賞するけれ共、其れは極端な利己の行はれる場合に推賞す可き事である。例へば極端な利他のみが世の中に行はれたならば、人々は獨立自營の精神を失つて、膏だ乞食根性又依頼心を助長するに到るであらう。此事は相互扶助に於ても均しく言ひ得る處であつて、若し相互扶助と云ふ事が極端に行はれたならば、其の結果は不道德になる。現今、我國に於

ても文明の行き渡らぬ田舎に行くと、尙ほ昔風の極端なる依頼的精神に依り生活して居る人々がある。之等は次第に教育に依つて其の依頼心を取去る事が出来ると信するけれ共、其の依頼心が永く残つた場合には其地方と云ふものは決して發達するものではない。各個人が互に競争的に努力向上すると云ふ事に依つて、地方の文化が發達するのである。其點から單に相互扶助のみが道德と云ふ事は出来ない。矢張り相互扶助の本能を道德的理想に依つて指導する事が大切で、其れに依つて始めて價值あるものとなるのである。

四

以上の如く考へ來れば、本能と云ふものと道德的理想と云ふものとは常に連絡して居なければ世の中に用を爲さないと云ふ事は明である。之を現代の社會生活に於て見ても、極めて明白である。吾々の日日の採用して居る社會制度と謂ふものは多くは人間の本能を材料として、其の材料の上に何かの道德的理想を織り込んだものである。此兩者は、例へば、織物に於ける立の絲とぬき絲の様な關係である。前者が社會生活の資料であるとすれば、後者は社會生活の形式である。社會生活の形式はあらゆる法律・政治・教育、其の他一般の社會制度がそれである。其社會制度は

明に人類の道德的理想を表現するもので之れに依つて人類の幸福を求めようとするのである。表現した制度の形式の中に這入つて來るものは人間の本能である。極く卑近な例を以て謂へば、吾々が三度の飯を喰ふと云ふ社會的の禮儀作法も、其れが最も人間の肉體的生活の理想を行ふのに最も適切な作法であるからである。若し吾々の食欲と云ふ本能を極端に亂用したならば遂に己の身體を破壊するに到るのである。亦世界各国に於ては法律上未成年者に對して禁酒禁煙を命じて居る。之れも未成年者の本能を恣にして飲酒喫煙を許すときには、時々刻々、發達の途中にある處の青年の身體を破壊する恐れがあるからである。即ち肉體發達に關する道德的理想に依つて其本能を導いて行く一つの法律であると云はねばならぬ。

斯の如く考へて來ると世界各国に行はれる家族制度、教育制度、其他あらゆる社會的の制度と云ふものは、皆人間の幸福といふ事を理想として、其の道德的理想に依つて、人間の本能を整頓する處の方法であるのである。斯の如く人間の理想と本能と云ふものは適當に調和する事に依つて、始めて人生の眞諦を得ることが出来るのである。又其處に人生の妙味があるのである。

個人的自由と社會聯帶責任

一

現代社會問題に於て最も根本的、しかも最も解決に困難なる實際問題は、個人の自由と云ふ事と社會の聯帶責任と云ふ事との關係である。此の二つは非常に密接なる關係があつて到底區分することの出来ないものである。然し現今の人は稍もすれば社會は個人を束縛するものである。亦之れに反して個人の自由を尊重せんとすれば、社會や國家を破壊せなければならんと云ふ様な間違つた考へを持つて居る。然らば此の兩者の關係を如何に見るか。

二

以上の社會と個人の關係を説明するに先だつて、所謂個人の自由と云つて居る事は如何なる意味であるかと云ふことを一應研究する事が必要である。元來自由と事ふ事は世間では色々解釋して居る。然るに學問上から確實に考へて見ると、自由と云ふ眞の意味は必ず其の半面に責任と云ふ意味が附隨して來るのである。

世人は自由と云ふ事を自由放任と云ふ意味に解して居る。然し乍ら自由放任と云ふ事は眞の自由の意味ではない。總て事物には原因結果の法則があつて原因だけがあつて結果がないと云ふ事もない。結果があつて原因がないと云ふ事もないのである。従つて其の意味に於て世の中に絶對的自由と云ふものは無い筈である。絶對的自由と云ふ事は何處にも原因がなくして一つの事柄が行はれると云ふ事である。斯の如き事は全々奇蹟であつて、此の地上の生活には決して見る事が出來ない。即ちそれは偶然の出來事である。更に言ひ換れば原因の無い結果である。何んとなれば原因の無いところに事が起れば、其れが眞の絶對的自由である。然し斯の如き事は天地間の法則を破つた事で、全然有り得べからざることである。吾々が偶然と云ふ言葉を用ゆる時は、原因が嘗だ不明と云ふ事であつて、原因がないと云ふ事ではない。世人は稍もすれば己の欲する儘と云ふ事を自由と云ふ意味に取つて居る。それは眞の自由でなくして束縛である。何んとなれば欲すると云ふ事は、己の慾や、本能が之れを命ずるのである。其の本能に依つて命ぜられたる儘に飲食し、享樂をすると云ふ事は、その個人が本能に依つて束縛せられて居る事になるのである。嘗だ束縛と云ふ事を外部的のみ考へず、内部的にも考へれば、肉慾の爲に縛られたと云ふ事になる。

亦精神的の利己心に依つても縛られると云ふこともある。結局、一見、自由の如くあつても其の實は非常な不自由の事柄になる。自由放任と云ふ事は反つて下等動物一般の方が遙か自由放任である。彼等は日々本能の命する儘に食を求めて彷徨して居る。然し之れは倫理的に云へば、彼等は絶對的に自由のない生活をして居ると見るのである。斯く論じ來たれば、世の人々の云ふ處の自由は寧ろ不自由な束縛の意義を誤り考へて居るのである。

三

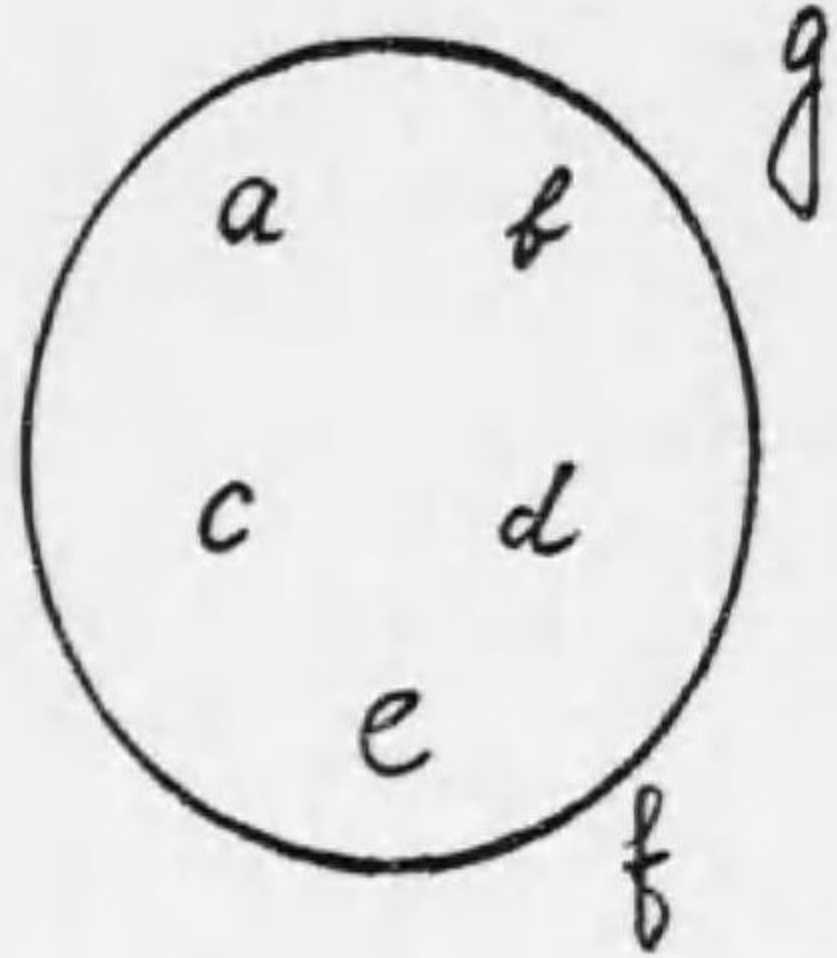
以上の如く人間の總ての行には絶對的自由と云ふものは決して無いとして見ると、残るものは相對的自由である。所謂、道徳上に云つて居る自由と云ふ事も、此の外にはないのである。相對的自由と云ふ事は選擇的自由と云ふことである。選擇的自由と云ふ事は一定の範圍内に於て一定の事物を選択すると云ふ事である。例へば圖に示せる様に圖の範圍内に於て a, b, c, d, e。其の何れを選んでも好いと云ふ意味である。其の以外に有るのやゝは如何ともする事が出来ないと云ふ意味である。之れを具體的に示せば、今、例へば自身の座つて居る處を自由に動く事が出来る。然し原因結果の法則を破つて、突然空中に浮び上げると云ふ事は出来ない。其れは即ち物理的の法

則を破る事になるからである。言ひ換れば自然法則は吾々にとつて或る制限を示して居るのである。其の法則の制限を受けない範圍に於ては立つて歩かうと、坐らうと、亦其の室を出て行かうと、吾々は自由を與へられて居る。即ち此の種の自由を指して選擇的自由と云ふのである。

以上の選擇的自由と云ふ意味を吾々の社會生活の上に應用して考へるならば、社會は正に其の選擇の範圍を示すものである。個人は其の社會の制限範圍の中で、自由の行動が出来る。即ち選擇的自由行動が出来るのである。例へば吾々の職業の自由と云ふ事は一つの社會一つの國家内に棲息して、其の社會國家の許す法律の範圍に於て、又其の國家法律に依つて保護せらるゝ範圍に依つて、或は官吏とな

り、或は實業家となり、及至、醫者となり、又教師となる事が出来る。又其個人の自由に任せて選擇する事が出来るのである。

此の選擇的自由を社會的生活に應用するときには、其の關係は恰も一疋の魚と一つの池の關係



の如きものである。魚は其の池の範圍内に於て自由に游泳する事が出来る。然るに一旦其の池中を出づれば魚には全く自由がなくなるのである。個人の社會に於ける關係も之れと同一である。即ち社會と云ふ池の中で自由なる運動が出来るけれども、其の池を一旦脱すると個人には全く自由がなくなる。何んとなれば其の個人に對して國家は何等の法律的保護も與へず、亦職業の自由も認めない。従つて衣食住の道を失つてしまふ事になる。此の點に於て社會と個人とは決して衝突す可きものではなくして、寧ろ相關的のものであると云はなければならぬ。之れを言ひ換れば社會が完全になればなる程、個人の自由が擴大する。又個人の自由を擴大しようとすれば社會を完成せなければならぬ。

春過ぎて初夏の候になると、各地の都會では金魚屋が金魚エ、金魚エ、と叫んで賣り歩く。吾々の少年時代は此の金魚を買ふ事を何より楽しみにして居つた。金魚を一二疋買つて圓い玻璃の瓶の中に入れる、金魚は人間の様に自覺心が無いから之れを小さい瓶だからとて不平を云はぬ。亦不平を訴る事もしない。然し此處に假令に自覺液が有りとして、此の自覺液を金魚に注射したと考へて見る。そうすると金魚は忽ちに人間の如く自覺をして、此の玻璃瓶が餘りに小さいと訴る、

勢しく泳げば忽ちにして頭を打ち、亦尾を傷つける。今少しく大きな自由の容器の中に自身を入れて貰いたいものと訴へる。そうすると、其の持主の坊ちゃんやんは金魚の云ふ事が尤もなりと考へて、之れを洗面器の中に移し入れる。金魚は自由な世界に來た事を喜んで、頻りに泳ぎ廻るけれども、暫くにして又不平を感じる。其の點は人間の心も同一であつて自由を感じる事は決して永久のものではない。金魚は更に大いなる容器の中に移さるゝ事を希望して止まない。坊ちゃんも其れを尤もの事として洗面器より更に大いなる盥の中に此の金魚を移してやる。金魚は其の盥の中で自由を楽しむ事は僅か一日か二日である。一兩日經ると金魚はその傍に大いなる泉水があつて満々たる清水が湛へられ、其の中に己れと同類の金魚も無數に居る。其の外には鯉、鮒、其の他の魚がさも愉快げに其の廣々した泉水の中を自由に泳ぎ廻つて居る。泉水の周圍には百花燦爛として開き競ひ、亦岩影には多くの魚の息ふ場所があり、金魚にとつて眞に羨望に耐へない。金魚は遂に耐へ兼ねて己れも其の泉水の中に移されん事を懇願する。坊ちゃんはその乞を容れて遂に之れを泉水の中に移してやつた。金魚は眞に愉快でたまらず、泉水の中を到る處游泳し廻つた。そうして多くの友達と交つて自由なる此の泉水をさも極樂の如く泳ぎ楽しんだ。金魚の斯くして得た

る歡喜は一週間乃至十日と經ぬ間に、亦もや、其の泉水の不自由を感じるに到つた。或日、沛然として夕立が降つて來た。瞬く間に泉水は雨水のために一杯になり、泉水の外の庭園も瞬く間に一面に雨水で滿される様になつた。其の狀、恰も大海の趣を呈するに到つた。金魚思えらく、斯の如き小さい泉水に居つて不自由を感じて居るよりも、いつそ一躍して彼の大海に飛出で、絶對無礙の世界に遊ぶに如かないと。其の決心と共に金魚は忽ちにして泉水を飛び出し、廣々と限りない世界に遁れ出た事を非常に喜んだ。然しそれは極めて暫くの間であつて、瞬く間に日は照り始め、地上の水は次第々々に乾き初めた。金魚は今や絶對絶命になつて遂に爲す可き術を知らず、已むなく轍の跡の僅かの水溜に氣息淹々として僅に生命を保つて居る。

以上述べ來たつた事柄は一つの譬である。此の場合の金魚は社會に於ける個人である。其の場合の玻璃の瓶を初め泉水に到るまで、之れ一つの社會である。社會と個人の關係は其れ故金魚と容器との關係である。金魚は容器の中に於てこそ自由に活動する事を得るけれども、一度其の容器を見棄てた時は、遂に轍の譬の如く忽ちにして其の自由を奪るゝのみならず、自由の生活をも破壊してしまはなければならぬ。亦此の關係は人間の場合も同一である。個人が自由を得んと

するが爲めには、如何なる場合にも、魚の容器に於ける如き社會が必要である。社會は一つの大泉水であつて其の中に社會水と云ふものが湛へて居る。此の社會水が無かつたならば人間は一日と雖も生存する事が出來ない。其の社會水は亦社會組織と云ふもので保護せられて居るのである。恰も池の水が堤防に依つて保護して居ればこそ其の泉水や池の中に魚が自由に游泳する事が出來ると同一である。此處に言ふ社會水と云ふのは無形であるけれども社會に於けるあらゆる道德である。社會に於ける個人は正しく此の道德に依つて日日の生活を營んで行くのである。其の必要缺く可からざる道德は恰も魚に對する水の如きものである。亦國家の組織や法律等は此の泉水や池の場合の堤防の如きもので、一旦之れを破壊すれば忽ちにして人類の生活は破壊されてしまふのである。世の中に此の關係を充分に知られない處から、稍もすれば國家を破り、社會を壊さんとする人がある。又極端な者は國家の制度、法律と云ふが如きものを破壊する事が、宛ながら個人の絶對的自由を得るかの如く考へて居る人がある。其れ等の人は以上の泉水を飛び出た金魚の如きものであつて、遂に堤防のない處に己一個の自由さへ失ひ、遂には自己の生命をも失ふことになる。

以上の點から見て個人の自由は社會の組織と云ふものと互に關聯して居るものである。決して兩者は衝突矛盾す可きものでないと云ふ事が明になる。此處に當だ注意す可き事は、個人の自由と云ふものは或一定の範圍内のことで、決して絶對的に其れ以上に出る事が出来ないと言ふ譯ではない。例へば金魚が玻璃瓶からして洗面器に移された時に、遙か多くの自由を得る事が出来た。次第に其の自由の範圍を擴大して遂には泉水に迄進む事が出来たのである。人間の場合にも之れと同様で個人の自由は決して擴大せないのである。其の個人の棲息する處の社會を益々完全にして益々擴大する事が必要である。社會が完全になればなる程個人の活動は益々自由になる。之れを理論的に云へば始めに述べた處の選擇的自由の場合に、其の選擇的範圍が廣がれば廣がる程選擇的自由が廣がつて行くのであると云ふ事が出来る。殊に人間の場合に於ては人間個人の力に依つて社會を改造し、自由活動の範圍を擴げて行く事が出来る。魚の場合に於ては自己の力で泉水を擴げる事は出来ない。故に當然、破壊的不平が起るけれども、人間の場合に於ては之れに反して飽まで自己の力に依りて其の社會を完成し擴大して行く事が出来る。其れ故に人間の個人的自由と云ふものは其の社會の完成の程度と比例すると言つても差支がない。現今はよく人々が

近世の政治史を指して個人の自由獲得史と云ふ様な名稱を付けるけれども、實は之れは誤りであつて、自由獲得にあらずして社會完成史と云ふ方が反つて適當であるのである。之れを要するに個人に對する社會の範圍は、自己の選擇的自由の範圍に歸着するのである。

四

以上述べて來た處の個人と社會との關係は、現代の社會に於ては其の社會の中の組合と組合との關係に於ても等しく考へる事が出来る。現今の文明國に於ては其の國內に多くの組合があつて其の組合は互の間に充分の連絡がとれて居ない。其れが社會問題を起す原因である、組合は其の自己の組合の利益のみを考へて、他の組合の利益、亦國家全體の利益を無視する傾がある。例へば労働組合は其の労働組合の利益をのみ求めて、國民全體の利益を無視する。資本家は資本家で己のみの利益を計つて、之れ亦國家全體の利益を考へない。其れが現代社會問題を起す所以である。其處で現今は其の點に於て益々個人間の聯帶責任を重んずるのみならず、亦組合間の聯帶責任を重んずる様になつて來た。此の組合の利己的行動と云ふものは、例へば一大家屋の中で多くの室があつて其の室に於て日夜共同生活をする人々のみが己れ等の室の利益のみを考へて、其の

一家全體を無視すると同じ事である。其の組合の利己的行動は遂には國家全體の利益を破壊する事になつて、其の結果、組合自らの生存をも其れが爲に脅さるゝに到るのである。

以上の社會聯帶責任の道德は最近世界各國に於て盛んに唱道せらるゝ處の新道德であるけれども、我國に於ては既に昔から佛教が此の事を教へて居つた。佛教に於ては三恩と云ふ人には大切な恩がある。其の中の二つの恩は多少對個人的の恩であるけれども、其の内の一つ衆上の恩と云ふのは正に此の社會全體から來る恩である。しかも其の恩は嘗だ社會が吾々に與へたものではなくて、寧ろ共同に平等の關係に於て己れ自ら恩を着ると云ふ意味である。即ち社會聯帶責任の意味であつて決して他人からのみ與へられる恩ではない。己れも其の一部分の恩を己れ自ら背負つゝあると云ふ意味である。言ひ換れば自ら恩を擔ふと云ふ事は自らの社會全體に對する責任を拂ふと云ふ意味である。

現代の社會は正に新道德興隆の時機であつて、昔の道德では最早用を爲さなくなつて來た。昔の道德は何れかと云へば嘗だ親密なる人間のみ行はれた道德である。謂はば、ナジミ道德であつて、ナジミの無い人間では道德が必要でないかの如く考へられたものである。尤も昔の人々と

雖もナジミの人々にのみ善い事をしてナジミのない人には悪い事をして好いと云つたのではなかつた。嘗だ昔の事情は比較的に人類の大集團生活と云ふものが無かつた。社會と云つても昔は僅かに村落と云ふ如きものであつた。今日の如き大都會と云ふ様なものはなかつたのである。村落と云ふ事であれば勢ひ道德はナジミの人の間に行はれる丈けである。其れ以上に強て知らない人々の間に迄及ぼす必要はなかつた。然るに今日の人類生活は益々大都會に集注する傾向が現はれて來た。其の結果は例へば二百万の大都會たる東京市民は同一の都會に生活して居り乍ら、全くナジミがない。電車の中で日日、我々の會ふ人は宛ながら路傍の人である。若し斯の如き場合に假りにもナジミ道德を實行したならば反つて非常な弊害が世の中に生ずる。

今日、尙ほ我國に於ては昔風のナジミ道德が盛んに行はれて、前述の如き社會聯帶責任の精神が未だ充分に起らない。其の卑近な例は東京の日々の電車内に於て屢々見る例である。例へば自身の傍に空席のあるときに前に立つて居る人がナジミのない場合には之れをすて置き、態々、遠くに離れて居る知人を呼び寄せて其の空席に坐らせる。此の種の習慣が社會一般に行はれたとすると、其れが爲に東京市全體の社會的秩序が自然、破壊されなければならぬ。亦社會共同責任の

必要なることは吾々が日夜使用しつゝある水道の如きにも見ることが出来る。夏口水が益々缺乏するときに、其の水を濫用する人は所謂社會聯帶責任を知らない人である。其の水の不足が東京市民全體に及んで居ると云ふ事を知り乍ら、之れを濫用する。他方に用ひて居る人が己れの知人でない、又は顔ナジミでない處から無責任に是を濫用する。然し其の場合眞に聯帶責任を感じて一杯の水を儉約すれば東京市民の一人の人が一杯の湯を凌ぐ事が出来ると云ふ事を知つたならば、決して水を濫用する事が出来ない。斯くあつてこそ新時代の新道徳を理解する人であると云ふ事が出来る。我國には昔から「旅の恥かきすて」と云ふ諺がある。之れ明に社會聯帶責任を知らん人のしたことで番ダナジミ道徳のみを心懸けて他を知らぬ人と云ふ可きである。此の種の道徳は昔の如く民衆の集團の小さき時に於てのみ用立つたものであつて、最早や現代の如く非常に範圍の廣い社會生活が組織せられる様になつては到底、其の用に耐へなくなつて來たのである。

以上の如く社會聯帶責任は現今の社會に於て非常に重要な社會道徳であるに拘はらず、時としてそれに絶對反對の現象が現はるゝ事がある。其の一例を云へば現今の社會問題の労働者と資本家の對立の如きである。元來、労働階級、資本階級と云ふものは社會の全部ではない。之れを

經濟的に見ても労働階級、資本階級の外に消費階級と云ふものもある。其の他國家の立場より見れば、敢て斯の如き二つの階級のみならず、其の他に之れと同等の階級が他に澤山に有る。例へば労働者に非ず、資本家にも非ざる教育者あり、醫者あり、亦宗教家あり、自由商業家もある。之れ等は皆それぞれ獨立の階級である。番ダ今日は經濟問題が比較的大いなる問題であるため労働階級、資本階級が互に争をするに過ぎない。其れが證據には昔宗教の盛んな時には宗教界と云ふものが今日の經濟界の如く多く社會問題を起して居つたのである。亦時としては軍人が社會の問題の中心となつた事もある。之れ等を以て考へて見ても、強ち労働階級、資本階級と云ふ様な特別のものを擧げて國家全體を代表する事は出来ない。其の以外のあらゆる社會も皆之れ等と同等の國家的責任と權利とを保有して居る。之れを單に經濟的に見ても、其の外に消費階級と云ふものがあつて、以上の二者と共同の責任を國家の爲に拂はなければならぬのである。現今、社會運動に従事する人が社會主義者の立場からして、特に労働階級、資本階級と云ふものゝ對立性を強く認めて、寧ろ彼等兩者が互に確執する様に努めるのは甚だ面白からぬ事柄である。亦其れが爲に階級意識を鼓吹することとなつて、平和主義を専らにする時代に於て尙ほ一種の戰鬥主義を

鼓吹するが如き観あるは甚だ道徳上遺憾な事である。

以上述べ来たつた處は、現今の社會生活に於て個人の自由と云ふものと社會共同責任と云ふものが一見衝突する如くであつて、其の事實密接な關係があると云ふ事を述べ来たのである。翻つて我國の現状を見るに、一面に於て社會聯帶責任の道徳が未だ勃興せざる故に他面個人の眞の自由が甚だしく制限せられて居る如く見ゆる。之れに乗じて破壊主義者は其の個人の眞の自由を擴大せやうとはせないで、社會生活を破壊し、我國體を損はんとして居る。今や此の日本の現状を救ふが爲に、眞の社會生活を建設し、益々個人の道徳的自由を尊重する様にせなければならぬと思ふのである。

社會的正義の成立及破壊の原因

社會的正義とは如何なる意味であるかと云ふ事に就いては、現今多く學者が種々なる方面から研究をして居る。併し之れを倫理學的に云へば、社會的正義と云ふ事は社會に於ける個人の權利

義務と云ふものが平均の状態にあると云ふ事で云ひつくす事が出来るのである。

數年前の米騒動の全國に行はれた時に、其の米騒動の原因が何處にあるかと云ふ事を、或中學の三年及四年の學生に出問した處が、彼等は一様に其の原因は社會の組織が平均を失つたと云ふ事にあると云ふ様な答をした。學者が色々研究して居つても、實は此の中學生の直觀的判斷の外には出でないのである。當時其の中學生の一人が答た中に、米が暴騰したからと云つて、其れを恰も米屋一人の罪の如く考へて之れを攻撃する事は甚だ間違つた事である。其の證據には、東京に於て米屋を攻撃した事から全市の米屋が皆閉店をした。其結果として攻撃した人達が翌日から米を喰ふ事が出来なくなつた。番だ一時の憤りから米屋を攻撃する事が決して米價を下げる事が出来ないのみならず、其の上に翌日から米を購ふことが出来なくなると云ふ處を以て考へて見ると、此の米騒動は正しく暴徒の擧であつて、決して社會正義に合する行爲ではないと言つたのは眞に若年乍ら正しき判斷と云はなければならぬ。

總て社會の組織と云ふものは、社會正義を基礎づけるものであつて、其の社會の組織を研究して見ると、始めて社會的正義は何んであるかと云ふ事が明になる。例へば前の米騒動の場合に於

て、假令に一軒の米屋の隣に肥料屋が有つたとせんか、米が高くなると云ふので私憤に任せて隣の米屋を攻撃したとすれば、其の結果は米屋が倒れる。其影響は農民に及んで、農民は作つた米を賣る處がない。米を賣る事の出来ない農民は必ず翌年から肥料を求めないと云ふ事になつて、結局、肥料屋の米屋に對する暴擧は己の職業の上に崇ると云ふ關係になつて来る。此の關係が所謂社會組織に基く關係である。決して世の中は啻だ一筋の簡単な關係ではない。法律上の權利義務と云ふ様な事も、啻だ法律の直接の適用としては個人的の權利義務の關係になるけれども、尠しく其の根本を研究して見ると、民法、商法あらゆる法律上の權利義務は皆此の社會的構成に基く全般的の關係であると云ふことが分るのである。

社會の構成は之れを例へれば、恰も蜘蛛の巢のように造られて居る。吾々個人は社會に於ける其の職務の如何に依つて其の蜘蛛の巢の或一點に位置を占めて居る様なものである。従つて吾々の行動と云ふものは社會全體に影響して来る。例へば蜘蛛の巢の一端に小石を投げると、其れが蜘蛛の巢全體に響いて全體を動搖せしむる。其れが激しくなれば遂に其れが爲に蜘蛛の巢全體を破壊し去る事がある。此の關係は社會に於ける總ての正義の關係に等しいのであつて、決して社

會は單に個人的に考へる事が出来ないのである。社會の組織は元來非常に複雑であつて、前に述べた米屋肥料屋の關係は最も簡單なる關係を例證したに過ぎない。實際の社會は更に複雑な組織を造つて居るもので、之れを有機的組織と稱する。即ち社會には或中心があつて、其の中心からして總ての社會的職業又社會的團體等が複雑な關係に依つて結合せられて居るのである。其れ故に社會を啻だ表面から見ると時として非常に矛盾して居る様に見ゆる事がある。然しそれは所謂矛盾衝突ではない。啻だ關係が複雑な爲に一見矛盾して居る様に見ゆるのである。矛盾と云ふ事は其れ自ら全く反對の事を云ひ現す言葉であるけれども、之れさへ社會の職業として考へると決して所謂矛盾衝突ではない。なぜならば矛盾を賣る商賣もあれば、盾を賣る商賣人もあつてこそ、社會の眞の分業組織が造らるのである。一見矛盾と盾とは衝突するが如く見ゆるけれども、社會全般の目的から見れば外敵を攻める爲に矛盾が必要であり、又外敵を防ぐ爲に盾が必要である。之れ明に社會國家の根本性から見て、所謂矛盾ではない。之れ明に社會が一大有機的關係に依つて造られて社會の各部分が複雑極まる組織になつて居ると云ふ事が判るのである。

以上の複雑な有機的關係を基礎として造られたものが所謂國法である。換言すれば國法と云ふ

ものは社會の蜘蛛の巢の關係を共同的に守る一つの手段である。之れを簡單に云へば、社會的正義を確保する爲めに法律と云ふものが今日の文明國には皆置かれてある。此の法律に依つて社會的正義が確實に保護せられて居る國を法治國と稱せられて居るのである。尤も此の法律は何れの國と雖も完全無缺のものではない。元來、法律の法と云ふ言葉の出る處は佛法の法と云ふ宗教的の意味である。佛教に於ては極樂國と云ふものを理想の國として居る。其處には完全無缺の精神的法則が行はれて居つて、其の極樂國に住む人々は自他の權利義務を尊重し、最も平和な生活をして居ると云ふ様な考へから法と云ふ言葉が出て來た。之れを極樂國からして地上に移した場合に所謂法律と云ふものになるのである。天國や、極樂やは理想的世界であるから其處に行はるゝ法は又理想的である。然し地上に於ける法律は常に完全を期する事は出來ぬ。従つて其の法律の不備に乗じて屢々世の中の正義を紊す者が現はれて來る。此の法律の不備を絶たず改造して行く事は社會的正義の原則に依らなければならぬ。

二

現今の法律に對する一般の人々の考は、法律は大體に於て人に善を進めるよりも惡を抑制する

爲めに存するものである。換言すれば法律は社會の職能として勸善よりも懲惡の方に重きを置く
と云ふ考へである。然し此の考へは將來に於て必ず變化す可きものと考へて居る。法律が單に懲
惡の意味に於て社會に存するならば、實は社會的正義を守る爲めには充分でない。社會的正義は
決して消極的のものではない。即ち人の權利を侵すと云ふ事のみが不正義ではなくして反つて己
の爲すべき職務を果さないと云ふ事が眞の不正義である。其の點に於て從來の法律家の考へた社
會的正義は未だ不充分のものと云はなければならぬ。即ち從來の法律家は消極的に他人の權利を
侵害せない事柄が社會的正義を維持する唯一の道だと考へたのである。然し今後の社會的正義は
其の法律的の消極的の考へを脱して、更に積極的に社會に於ける個人の職分と云ふものを勵げま
す意味に考へて行かなければならぬ。換言すれば己の職分を現實に行はない者を罰すると云ふ事
まで進まなければならぬ。其れであつてこそ初めて眞の社會的正義を維持する積極的法律となる
と信するのである。

社會的正義を根本とする法律の改造は、從來の權利義務と云ふ單なる個人的、又消極的考へを
今少しく道德的、亦積極的の考に修正する事にある。例へば、所有權と云ふ様な事柄も、其の所

有權を形式的に、外面的に見ないで、之れを内面的に見る事が必要ではあるまいか。抑も一個人の社會に對する權利と云ふ事は、内面的に、道德的に解釋すれば、其の一人の人が社會から與へられたる有形無形の資本としての社會的權利を活用して社會的正義の爲めに力を盡すと云ふ事が假定せられて、始めて其の人の國法的權利が発生するのである。茲に一人の官吏が有つて其の者の俸給と云ふものは、其の俸給に依つて國家の公職に従事する缺く可からざる資本である。又事業家が多くの財産を所有して居ると云ふ事は、亦其の事業家が國家の正義に盡す爲にそれだけの財産が資本として必要であると云ふことで、始めて財産權と云ふものが其の人に與へらるゝのである。即ち簡單に謂へば、總て國法の與へる權利と云ふものは其の人が國家に對して何か一つの職能を果す爲の資本として與へられたる權利である。従つて他人は其の權利を侵す事が出来ない。即ち其人に對する義務と云ふものが現はれて來る。

若し以上の様に權利義務と云ふ事を内面的に、亦道德的に解釋せないで、嘗だ、表面的に考へるならば、反つて其がために屢々世の中の正義が破らるゝ原因が現はれて來る。例へば今日投機的事業に依つて巨万の富を貯へて何等國家に貢獻する處のない者が多く見受ける。然し今日の法

律では此の富豪の財産權と云ふものを如何ともする事が出來ぬ。大いなる邸宅を構へ贅澤なる生活をして居る。しかし何等社會に對して己の職責を果すところがない。斯の如き場合に於て道德的の立場から之れを見ると、彼等は非常な社會の罪惡者である。云はゞ巨万の富を擁する權利は更になのである。將來の法律と云ふものは多少此の道德的の點に據つて權利の觀念を改造せなければ眞の現代社會の要求に合する事が出來ないと信ずる。

三

偕て、以上の如く社會の組織が出來て、其の組織の有機的關係から社會正義が生ずるものとすれば、此の社會的正義を破壊する處の原因は果して何んであるかと云ふ事が一見明瞭になると思ふ。

社會的正義を破壊する原因は歴史的に考察して見ると、非常に種類が澤山ある。然し其れ等を概括して考へるならば二つの破壊の原因に歸する事が出来る。其の一つは所謂暴君と云ふものである。此の暴君は現代の社會に於ては最早文字通りの暴君と云ふものなくなつて居る。嘗だ、過去の歴史のものであつて、例へば羅馬帝國時代のネロの如きものゝ外は最早や見る可からざる

ものである。殊に近世は世界各國共に政治が非常に進歩して、必ず一國の政事は民意に基礎を求めると云ふ有様になつて來て居る。殊に現代の如きは社會一般にデモクラシーの精神が行互つて居る。故に昔の如き文字通りの暴君と云ふものが最早見る事が出來ぬ。然し乍ら、その暴君は現代にない譯でない。只だ現代の暴君は種々なる形に變化して居る。其の一例を云へば、經濟界に屢々見る處の資本の合同と云ふが如きものである。之れをトラストと云ふ。トラストと云ふのは大資本家が己等の資本を一つに合して、小資本の興業者を壓制せんとするものである。之れ即ち經濟的の暴君である。幸に我國では此の種のトラストの弊害は未だ餘り現はれて居ない。然し亞米利加の如き大資本國に於ては其の弊害が極端であつて、代々の大統領は此のトラストを抑制する爲に常に努力をして居るのである。

猶ほ此の種の經濟的暴君に限らず、廣く社會的に一種暴君的行動をする者がある。其の結果は反つて古代の所謂暴君よりも大いなる損失を世の中に與へるものである。時としては其れが爲に折角多年建設した處の社會的正義を根本から破壊し塌する様な事が屢々ある。其の暴君と云ふもの、最も著しく現はるゝのが政治運動や、社會運動である。即ち政治的煽動者、社會的煽動者である例へば現今の我國の如きは、就中、此の種類の煽動者が日に月に増加して來る。煽動せらるるものは多く無知であつて、煽動者の奸計に陥つて居る事を一向心づかない。反つて煽動せらるる事を心好しとして居る場合が多い。此の種の煽動者は所謂現代式の暴君である。昔の暴君は多くの民衆を上から壓制を加へた。己の私慾の爲に民衆の利益を壟斷したのである。然るに今の煽動者は己の利慾と野心を完ふする爲に、下から多くの民衆を煽動するのである。之れ只だ上からと下からとの相違であつて、一人の私慾を完ふする爲に、民衆の利益を掠奪する事は其の結果に於て同一であると云はなければならぬ。故に之れ一種の社會的正義を破壊する暴君であると云ふ事が出来る。其の實例は我國の現社會に多々發見する事が出来る。政治界にあつては其の煽動者が最も有力な位置を占める。一般社會運動に於ても其の煽動者が最も虚名を得、又私利を計る事が出来るのである。之れに代へて一般民衆は如何なる處に己の不利益があるのか、又其の煽動者に依つて社會的正義が如何に破壊せらるゝかと云ふ事を全く自覺せず、啻だ群集心理に驅られて平然と構へて居る。

元來、以上の煽動者的暴君と云ふものが現代に勢力を得ると云ふ事は、其裏には國民が未だ充

分の自覺心を持たないと云ふ一つの證據である。若し國民個々が充分に自覺心を持つて居つたならば、決して煽動者の乗ず可き機會はないのである。殊に注意す可き事は東洋諸國民は多く傳統的に自意識に缺亡して居ることが煽動者に乗せらるゝ原因である。その理由は西洋文明は比較的個人主義である。亦主我主義である。主我的であると云ふ事は善にも惡にも人をして自覺せしむる。従つて西洋諸國の社會運動、政治運動と云ふものは割合に秩序正しく行はれる。従つて煽動者の乗ず可き機會が少い。然るに東洋諸國は古來其の文明が沒我主義的文明であつた爲に、兎角個人の自意識が發達して居ない従つて政治運動・社會運動と云ふ事になると群集心理が前に立つ。支那に於ては昔から附和雷同と云ふ言葉がある。之れ明かに國民の自覺心が不足して群集心理的に總ての社會運動の行はるる事を語つて居るのである。我國民も其の點に於ては、所謂・東洋の傳統的風習に囚はれて、兎角社會的正義を維持する事に不適當である。此の附和雷同性は例へば江戸つ兒の性質の内にも有る。昔から江戸の花と云つて火事を愛した。亦神田明神の祭騒ぎと云ふ事は此の群集心理の中に己の自覺を沒する事を悦びとした傾向から來るのである。此の傾向は敢て江戸つ兒のみならず、日本國民共通の性癖である。此の群集心理的傾向は前に述べた處の煽動

者をして虚に乗せしむる唯一の原因である。其の點に於ては今後の我國民の教養に於て最も留意すべき點で、努めて國民個々の自覺作用を促すことにせなければならぬ。

四

以上の社會正義を破壊する原因は、小數の人間が多數の人間の利益幸福を掠奪するにあつた。然るに今一つの社會的正義を破壊する場合である。今日の人は稍もすれば多數の聲は輿論なり、輿論は正しいと云ふ様な間違つた推理をして居る。然し正義と云ひ、亦眞理と云ふ事は、必ずしも小數多數に依るものではない。若し残らず總ての人が正しいと考へたことは多くの場合正義に近いものである。然し十人の中で八人迄正しいと考へても、其れは必ずしも正しくない事がある。之れを學問的に云へば一般的と云ふ事と普遍的と云ふことがある。其の場合に於て普遍の場合には眞理である。之れに反して一般の場合には未だ眞理と云ふ事が出來ない。例へば「 $1+1=2$ 」と云ふ事は如何なる人にとつても間違のない數理である。故に眞理であると云ふ事が出來る。之れに反して「 $2+2=5$ 」と云ふ事が或二三の學者が認めないと云ふ様な事があつたらば、それは未だ眞理ではない。之れと同様に政治上、社會上の一般の問題も、總ての人が残らず正しいと考へた時には

其れは社會的正義であるけれども、其の中の只だ一人の人と雖も其の多數の意見を否定した場合は未だ社會正義であると云ふ事は出来ぬ。

現今は政治界に於ても、亦其の他一般の社會問題の場合に於ても兎角多數の壓制が行はれる。普通、壓制といふ事は少數の者が多數を壓制すると云ふ様な風に考へて居るけれども現代の壓制は多數が少數の人の正義を壓制する事である。今之れを一つ一つ例を擧げて説明するに及ばない位である。例へば我國の政治界の現状を見ると、多數人の一黨がその白黨の私利を計る爲に少數の正義の士を壓制すると云ふ有様である。其れが爲にその少數の人々の利益幸福のみならず、延て國家全體の利益幸福を破壊しつゝある。此の多數の壓制と云ふ事はその弊害最も大である。少數の壓制の場合はその弊害は比較的容易に削除する事が出来るけれども、多數の壓制の場合には時あつて人力を以ては如何ともす可からざる場合が出来る。其の結果、少數の人が正義を主張しても多數の爲に壓倒せられ、遂に其の少數の人々は自暴自棄となり、遂に救ふ可からざる社會の混亂を來たすのである。之れを歴史上に於て見ても其の例は尠からずある。實際社會に於ては古より今日に到るまで事實、少數者の壓制よりも多數の壓制の場合が多い。昔から聖人賢人と云は

れた人々は、多く社會の盲目者に依つて空しく己の正義を通す事の出来なかつた人がある。其の人が偶々意思の強硬な場合には必ず其の多數の社會の人々より社會的制裁を蒙つたものである。例へばソクラテスの如き、時人から大いなる誤解を受けて、遂に毒を仰いで從容と死したのである。眞に恐る可きは此の多數の壓制が社會の正義を滅す事である。

以上の社會正義を破壊する何れの原因も之れを排除する爲には一般の國民を教育するより外に救済の道はない。今日の所謂デモクラシーと云ふ事も要するに此の國民的教育を盛んにし、國民個々の自覺心を發達せしむると云ふ事に外ならないのである。總て國民が残らず教育を受けて一般の社會的見識を備へる様になると、先づ少數の壓制と云ふ事は到底出来ない事になるのみならず、多數の人間が朋黨を組んで自己の私利を計ると云ふ事もなくなる。之れが眞の理想的社會であると云はなければならぬ。社會的正義を維持する爲の今一つの大切な事柄は、總て社會の人々が社會の全體的精神を確實に持つて、事に當ると云ふ事である。嘗だ、己の利慾を延す爲に社會全體の福利と云ふ事を考へない事が最も社會正義を破壊する原因になる。亦個人のみならず、社會のあらゆる團體組合と云ふ様なものが、其の團體丈けの福利を考へて、社會全體・國家全體

の福利を無視した時に必ず社會的正義が壊れる。又其れと同様に、官吏公吏も社會全體の利益幸福を顧みずして皆だ部分的の社會政策を施すと云ふ事は、其の結果は社會全體の均勢を失して、遂に社會一般の正義を破壊する事になる。之れ眞に慎む可き事柄である。要するに社會は個人的又部分的の心を以て向ふときには、必ず其の結果、社會全體の正義を破壊することゝなると考へなければならぬ。

國家生活と人類生活

一

現今の社會問題に於て一つの大きな問題は國家生活と云ふ事と人類生活と云ふ事との關係如何と云ふ事である。或人は人類生活を重んじて國家生活を輕んずる。又國家生活を重んじて人類生活を輕んずる人もある。實は此の兩者共に間違つて居るのである。國家生活と人類生活とは離す可からざる關係を持つて居る。換言すれば現實の國家生活を重んずることに依つて人類生活が完成し、又人類生活の理想を憧憬することに依つて國家生活が發達すると云ふことが出来るのである。

る。今其の兩者の關係を述べて將來の人類生活の理想に及ばふと思ふ。

二

先づ人類生活と國家生活との關係を一方面から觀察すると以下の如く考へる事が出来る。總て人類生活は二つの要素から成立して居る。一つは假りに横の要素と云へば、今一つは縦の要素である。横の要素と云ふのは、例へば世界の人類を人種の區別なく、民族の區別もなく、國民の區別もなく、加之、男女老幼の區別なく總て共通に考へれば、其處に人道と云ふものが成立する。即ち如何なる人にも共通の道德性と云ふものがあつて、例へば信義を守るとか、盗みをしてはならぬ、父母を敬愛せなければならぬとか云ふが如き事は、皆共通である。世界何れの國民と雖も之れを以て不道德と云ふものはない。即ち此の點に於て世界の人類を横に線を引いて全く共通に見出す事の出来る共通道德である。歐洲戦争の濟む迄は、此の人類共通の道德的精神が充分に發見せられなかつたのである。皆だ人種間の憎惡の念や、國民間の利己的感情の爲に、互に國家間の敵愾心を持って立つて居つたのである。其の極は遂に今回の歐洲戦争に依つて悲惨極まる結果を齎したのである。然し其れ以來戦争の慘害を知ると共に世界の人々は人類共通の此の道德に目

を向けるに到つた。今日各國民間には此の人道的精神が益々盛んになつて世界平和の爲めに或は萬國々際聯盟を造り、亦華盛頓會議を開いて世界平和を計劃するに到つたのである。之れ等は元より人類道徳の表現の一二であるけれども將來は益々發達して終には人類の恒久平和が完成するものと信するのである。

以上は人類生活の横の要素を見たのであるけれども、之れを縦の要素の方に付いて見ると、初めて吾々の國家生活と云ふものが亦人類生活の目的の上に大切なものであることが解るのである。縦の要素と云ふのは横の要素の如く簡單に説明する事が困難である。其れが爲めに稍もすれば人々は國家の如きは假令のものである。只だ人類生活のみが大切の如く誤解する人がある。然し人類の文化の發達を歴史的に見ると決して前に述べた様な横の要素のみで發達したのではない。反つて時間的に即ち歴史的に發達したのであることが判る。或一定の民族が有史前に幼稚乍ら既に或一定の文化を造つて居つた。それが時代を追ふに隨つて其の民族特種の文化が益々發達して來た。今日に於ては吾々は世界の人類は共通であると云ふけれども、其は文化發達の結果で、昔は寧ろ地球面に於ける人類は皆孤立的に社會的生活を營んで居つたのである。其が發達して今日の

程度に迄進むたのである。言ひ換れば古代程人類全體の間に共通の文化が無かつたのである。それ故に自然には世界の各民族は其の獨特の民族性の上に立つて、努力を重ねて各自の文化を造つて來た。其れ故に今日に於ては世界の文明國民は皆それぞれ違つた特色ある文化を所有して居る。其文化の特殊性が亦人類生活に大なる幸福を與へるのである。此の特殊文化の發達は恰も物理學上に於ける物體落下の場合の加速度の如く、今日に於ては益々其の特色を發揮する様になつて居る。例へば我國の如きも二千五百八十年間の長日月を以て我國獨特の國體を發揮するに到つた。此の點から見て世界各國の文化は其々人類生活の上に意味あるものと云はなければならぬ。英國は英國佛蘭西は佛蘭西、米國は米國、獨逸は獨逸と云ふ風に、それぞれ特殊の文明を以て人類文化に寄與して居るのである。之れを例へば吾々個人が獨特の個性の上に獨特の品性を造つて居つて其が又社會全體の幸福利益の原因となるようなものである。

三

以上述べた人類生活の縦の要素と横の要素と云ふものは、嘗だ抽象的に述べたに止つて實際の吾々の生活には此の二つの要素は決して別々に離れて現はれて居るものではない。常に兩者が互

に關聯し亦結合して一つのものとなつて現はれるのである。之れを實際的に言へば吾々は日々國家生活を營みながら、亦他面、人類生活を營みつゝあるのである。此の關係を今少しく人類社會の發達の狀態に依つて説明を加へて見たい。

人類原始の生活狀態と云ふものは今日の學者が色々の方面から研究しつゝある。然し乍ら、其の研究は研究の資料を得る上に於て非常に困難がある。何となれば原始時代の歴史と云ふものは今日見る事が出来ないからである。人類の歴史は人類が地球上に現はれて以來幾萬年の長日月を経て居る。其の中の極めて一部分に過ぎない。世界の歴史として最も古いものと雖も凡そ四ヶ年である。其れ以上の時代は歴史として書き示されたものがない。其の結果原始時代を研究しようとする今日、學者が考古學であるとか、人類學と云つた學問を利用して之れを研究して行くのである。

人類が此の地球上に始めて現はれた時には未だ今日の如き文明社會を形成して居なかつた。一般動物と同様に昏だ個々離れ離れに棲息して居つた。従つて人間と人間との間に種々なる生存競争が行はれ、其他にも下等動物と人間との間に激しき生存競争が行はれたのである。日日闘争の

絶える事なく、一時と雖も平和の時代がなかつたのである。然るに何時の間にか人類は先づ社會生活の第一步を造り出した。其れは今日尙ほ人類生活の形式の中に残つて居る處の家族生活である。此の家族生活は原始時代に於ては先づ母を中心として子女が一つの家を形造つて居つた。此の狀態は今日の下等動物の上にも多く見られる。例へば小鳥の巢立の前、又家畜が其の子を養ふ状態は、總て哺乳動物の必ず採るところの生活の一つの形式である。其の時代が過ぎると、例へば狩獵時代だとか、亦牧畜時代になると、漸く、其の家族生活が大きくなつて來て、之れを中心として一大民族の集團を造つて行く形勢が見ゆるのである。

一度此の家族生活が人類生活の中に現はれ初めて人間の社會生活の第一步が始まるのである。此の家族生活に於て一家族内の父母を始め子女は互に平和を守り、互に助け合ふと云ふ現象が現はれて來る。即ち之れは人間の道德現象の初めであつて、謂はば平和の天國が先づ家族生活に其の發芽を見出したのである。之れが次第に發達するに伴つて遂には今日の國家の如き大社會になるのである。此の原始時代に於ては一旦家族生活が形成されたけれども尙其の家族と他の家族との間には互に闘争が續いて居つた。其の時代には今日の如く垣一重で隣家と接して居つたのでは

ない。即ち己の家族と他の家族との間は絶えず衝突を惹起して居つたが爲に、成る可く遠隔な土地に各家族別々の生活をして居つたのである。其れが牧畜時代から農業時代に掛けて其の人類の社會生活は益々擴大して行つた。恰も家族生活の場合に於て親兄弟姉妹が互に睦しく平和の生活を營んだ如くに、此度は己の家族と他の家族との間に亦もや平和の關係が出来て來た。人間は只だ戰鬥をつゞける事に依つて何等の利益のない事を悟り、寧ろ協力一致して部落的の平和を保つ事を必要と感ずるに到つた。此處に於て部落と云ふものが初めて現はれて來た。之れが亦文明國に於ける自治的村落の制度となつて今尙ほ残つて居るのである。人類は此の村落生活まで發展するには非常に永い年月日を要して居るのである。言ひ換れば、各家族間に共通の道德的關係が出来るまでは非常な年月を要したのである。此の状態が今尙世界の野蠻人の社會に於て見出す事が出来るのである。

部落が亦合體して一國を造るまでは非常の永い年月を要した。之れを世界の歴史に於て見ても、最も鞏固な國家組織が發達するまでには容易の事柄ではなかつたのである。眞の國家生活は最近世のことである。今尙ほ野蠻人間に於ては部落と部落との間には非常な鬭争が續いて居る。其れ

が爲に國家を形成する事が出来ない。例へば臺灣に於ける生蠻人の如きは、丁度此の社會發達の過渡期に居るのである。其れが證據には時々、一つの部落が他の部落の者を襲撃して非常な慘劇を演ずる。従つて部落と部落との間には憎惡の念が日に増し激烈になる。生蠻征伐は今日尙此の部落の憎惡の念を利用して行はるのである。即ち臺灣警察官が一つの部落の不法行爲を攻撃しやうとする際には、其の隣の部落の生蠻を誘導して、之れが攻撃の案内者に當らしむるのである。之れは生蠻人にとつて最も不利益な事柄である。然し彼等には未だ完全な社會を造つて居ない。其のため其虚に乗ぜらるゝと云ふことになるのである。

部落間の平和的連絡がとれて一國を爲すと云ふ事も、其の原因は其の部落の人間の平和的精神に基くのである。所謂人類生活の横の要素が次第に自覺せられて遂に部落と部落との間に平和が結ばるゝのである。現今の文明國は過去幾千年間の努力に依つて、遂に此の程度まで發達して來た。即ち非常に複雑な國家組織を以て一大平和の生活を營むに到つたのである。

以上の人類の社會發達の狀況を考へて見ると一面に於ては人種とか、民族とか云ふものが、己の血族上の關係から團體を結んで次第に歴史的經過によつて社會生活を完全にしつゝ進むのであ

る。此の點から云へば人類の生活は皆縦の要素に依つて出来たものであると云ふ事が出来る。今日に於ても我國の如きは大和民族の血液を傳へて、建國以來三千年の長日月の間に國家を發達させて來たのである。今や其の特殊の民族性の上に立つて、特殊の風俗習慣を維持しつゝ今日に及んだのである。之れ明かに歴史的要素であつて、言ひ換れば縦の要素と見る可きである。

然し亦他面から此の社會生活の發達の過程を見るならば、其處に人間共通の人道的道德が發達しつゝあつた事をも窺知せらるゝのである。例へば先づ家族生活の起る前は人類は個々孤獨の生活を營んで居つたのであるが、年月の經ると共に己の血族間に共通の道德が現はれて來て、遂に一つの家の下に共に家族生活を營むに到つた。其の家族生活が更に發達するに及んで、家族と家族との間に亦平和の關係が結ばれ、遂に部落を造り、更に進んで國家生活まで發達して來たつたのである。此の共通的道德の發達を考へて見ると、之れ明に人生の横の要素を發揮して居つたと云ふ事が云はれるものである。

以上の如く個人生活が家族生活となり、家族生活が部落生活となり、部落生活が國家生活になつた勢を更に廣げて考へて見ると、必ず將來に於て人類生活は國家と國家との間に亦平和の關係

を造るに到るに相違がない。之れが即ち人類生活である。人類生活と云ふ事は其れ故に世界の國家と國家との間に連絡を結ぶに到る事を云ふのである。世人は稍もすれば世界的の國家を作るためには、現在の國家は必要がないと思つて居る人がある。其れは非常な誤りであつて其れが證據には現今に於て尙國家の中に村落があり、村落の中に個々の家族生活が今尙ほ現在して居る。しかも其れ等の家族や村落が社會組織の單位として現今非常に大切であると云ふ事は云ふ迄もない。其れと同じく將來に於て縱令、完全な平和なる人類生活が營まれるとしても國家の組織は又其人類の平和生活を維持するために缺くべからざるものとして依然として残るのであるのは理の當然である。

六

以上述べ來たつた事柄は、吾々の人類社會生活が自然的に如何に發達して來たかと云ふ事を述べたのである。然し乍ら人類の團體生活は單に自然の生活として見る事は出来ない。一面、理想的生活として見る事に依つて、初めて社會生活の意味が明瞭になるのである。此の理想的生活と云ふ處から見て矢張り、亦人類生活と國家生活との關係を他面から明瞭に出來ると信するのであ

る。之れを説明する爲には多少今日の倫理學哲學上の説明が必要になる。

之れを説明する爲には先づ根本的に人生の價值と云ふ事から考へて見なければならぬ。總て善惡といふ事は之れを倫理學上からは人生の價值的關係であると見るのである。今此處に善と言ひ惡と云ふものが初めから客觀的に存在するのではない。寧ろ主觀的に人生の目的と云ふ處から善惡の區別が生ずるのである。換言すれば人生の目的に叶ふものは善であり、目的に叶はぬもの又は目的を妨げるものは惡であると云ふ事になる。故に之れを價值的關係と云ふのである。此の關係は比較的に相對的の意味に於ても同一の事柄が言はれるのである。例へば經濟上に於ける價值と云ふ事は矢張り之れと同一の關係である。例へば此處に二種類の草木がある。一つは牧草であつて一つは花草である。例へば薔薇の如きものである。今之れを何れが善い草であるかと云ふ事を人に尋ねたならば、其れを明に孰れが善い惡い、と區別し得る者はないであらう。なぜならば草木其の物には善惡と云ふ性質は備はつて居ない。従つて其の場合に牧草よりも花草が善いと云ふ人があつたら、恐らく其の人は植木屋であるか、又は花草を愛する處の人である。何んとなれば其の人は己れの職業上又人生上から花草を必要とするからである。言ひ換れば其の人の目的が

花草を欲するからである。従つて其の人にとつては牧草と云ふものは何等の價值のないものである。此處に亦他の一人の人があつて花草よりも牧草が善いと言つたならば、其の人は必ず牧畜家である。何んとなれば其の人は己れの牛馬を養ふ爲に牧草を必要とするからである。即ち牧草が價值あり花草が價值ありと云ふ事は、牧草花草其物に價值があるのではなくて、之れを欲する人の心に價值があるのである。此の價值現象は經濟界に於て到る所に現はれる。例へば日目の米の値段が上下すると云ふ事、又極端な場合は書畫の如きものは之れを好む人に依つて其の價值が非常な相違を生ずる。之れ明かに物其物に價值があるのではなくして、之れを欲すると云ふ所にあると云はなければならぬ。

以上の價值關係を道德的に考へて見ると吾々の善なる行と云ふ事は其と同一である。其行爲の標準となる社會的の道德的目的があつて其れに依つて善惡の價值が定まるのである。之れを前の例に依つて説明すると、例へば家族生活が初めて現はれた時に、其處に最早一つの簡單な道德が発生したと見る事が出来る。言ひ換れば簡單なる價值關係が造られたと云ふ事が出来る。其の場合の社會的目的と云ふのは己れの一家全體の幸福と云ふ事にある。此の家族的幸福と云ふ目的が

現はれて初めて吾々が其の家の主宰者である親に對して孝をすると云ふ事が必要になる。其理由は孝の行が其の一家の幸福を齎すからである。即ち道德上善の行爲と云ふのである。是に反する者は不孝と云ふのである。不孝と云ふ事は其の一家の幸福の目的を妨げる行爲になるから、之れを惡と云ふ。その他、夫婦相和し、兄弟睦じくすると云ふ事は一家の幸福を計る上に於て非常に大切な道德となる故に、之れを家族道德と稱して昔から尊重せらるゝのである。

今日は前に述べた様にその家族生活が更に發達して部落生活となり、遂に國家生活まで進んで來たのである。其の結果として吾々の道德的價値は益々擴大し、前に言ふ家族道德の外に自治體に對する自治的道德と云ふものが發達し、更に進んでは國家的道德と云ふ處まで發達して來たのである。其れ故に今日に於けるあらゆる道德の源泉は明に國にありと云はなければならぬ。換言すれば國家全體の幸福と云ふものを現代に於ける人類の最高目的又は標準として、其れに依つて道德的判斷を行つて行かなければならぬのである。先づ其の點から見れば人類生活の最も自然な道德的標準は現在にあつては何んと云つても國家にありと云はなければならぬ。

現今、世人の或一部分に於ては道德には國境無しと云ふ説が行はれて居る。然し此の考へは非

常な誤りである。此の種の考へは多く淺薄なる人道論者の間に行はれる説であつて、例へば人類は四海同胞である。同じ人類の中に於て特に國境を造つて互に排斥する事は無益の事柄である。よろしく世界一團となつて人類愛の下に平和なる生活を営まなければならぬと云ふ説である。然し此の考へは實は極めて安價なる抽象論であつて、吾々人類の社會的生活の道德的價値關係を充分に心得ない處から起る考である。人類は只だ個々相離れた獨立のものでない。寧ろ個人と個人との關係は常に或一定の社會的目的に依つて結合されて居るのである。此の結合が人類の道德的生活に於て最も重要な事になる。嘗だ人道論者の空想して居る様に個人が個々相離れて只だ己れ一個の生活を營んで居るものではない。反つて人々は社會的組織に依つて有機的の價値關係を造つて居るのである。社會には一定の目的があつて其の目的を中心として人は皆道德的生活を營んで居るのである。人道論者の如きは、嘗だ個人の意義なき集合團體を以て國家と考へて居るのである。

七

以上の關係を更に他の方面から觀察すれば人間の生活は二重の生活をして居るものと見ることに

が出来る。即ち一つは普通常識的に考へらるゝ自然的生活である。今一つは理想的生活である。自然的生活から人生を見ると人間には總て價值關係と云ふものは起らない。従つて無差別平等である。多くの人道論者は此の點から人生を觀察して人間は到る處平等なりと考へて居る。しかし他面から考へて見ると人間程不平等な、亦差別的のものはないのである。其の差別不平等と云ふ事が實は眞の道德を説明するものである。卑近な例を擧げて云へば親あつて子あり、夫あつて妻あり、又君あつて臣あり、師があつて弟子がある。之れ等の關係は只だ自然的に觀察すれば全く意味の無い事になる。親子の道、兄弟の道、夫婦の道、朋友の道、之れ等の道と云ふ事は無形の事であるけれども、道德上最も大切なものである。其れが證據には一般下等動物には之れ等の道がない。何んとなれば彼等は啻だ自然的生活本能的生活をして居るからである。

人間の生活は此の點に於て禽獸の生活とは其の意味が非常に違ふ。人間は必ず社會を造つて其の社會の全體の目的と云ふ處から己れの生活を定めて行くのである。其の結果其の社會の全體の目的から見て、親子と云ふ價值關係が出来き、夫婦と云ふ價值關係が出来るのである。之れが即ち道と云ふものである。以上の人生の價值關係を前述した社會の發達の狀態から考へ合して

見ても充分に説明する事が出来る。即ち初めに於て吾々人類は家族生活と云ふ社會的價值關係を結んで居る。其れに依つて親子夫婦兄弟の道と云ふものが定まつた。此の價值關係が家族と云ふ平和な一小天地を造つた。其れが幾千年來の間の人類一般の努力に依つて更に大いなる平和的世界を造つて部落となり、國家となつたのである。其人生の價值關係の生活の様式として分業的組織が現れた。其故に國家の分業組織と云ふものは一面、生活の内容や資料の方から見れば自然生活であり、形式や理想の方から見れば理想生活になる。従つて、人間は一面に於て自然的生活を送くると同時に、他面に於て理想的生活を營みつゝあるものであると云ふことが出来る。此兩者は恰も盾の両面の様で、必ず常に併行して現はれなければならぬ。亦只だ理想的生活のみあつて自然的生活を失ふ場合には其れは空虚なる生活となり、亦自然的生活のみあつて理想的生活がない場合には其れは禽獸の生活となつてしまう。此の兩者の關係は人間の永い歴史の間に繼續的努力に依つて次第に建設せられて來たものである。今や正に之の二十世紀に入つて建設的努力が國家と國家との間にも價值的關係を結ばんとしつゝあるのである。此の國家間の價值關係が結ばれた時に眞の人類主義の道德が現はれるのである。其故に人間の道德的努力過程を無視して直ち

に人類道徳へ飛躍せんとする考のものがあれば、其れこそ抽象的の人道主義に墮して了ふのである。即ち換言すれば人道主義は國家主義を無視して其の目的を達する事は出来ないと言はねばならぬ。其は恰も今日の國家は家族道徳を無視する事が出来ない様に、人道主義も國家主義を無視する事は出来ないことになるのである。

八

人類生活と國家生活とは以上述べたやうに價值關係として見る事が最も適當である。今や其價值關係を國家と國家との間に結びつけて更に大なる人類生活へと進もうとしつゝあるのである。此人類生活の道徳的關係が果して今後何百年、又何千年を要するかは未だ容易に之れを豫言する事は出来ぬ。既に今日國際聯盟が造られ、又華盛頓會議に於て世界平和の基礎を造らんとして多くの世界の政治家が會議を開いて居る。然し其結果未だ充分の平和の理想に到着せない。世界恒久の平和を造る爲の會議であるけれども、其の實相を密に考へて見ると、矢張り其の平和會議の間にも未だ容易に國家的の私心が取切れない。従つて其の會議の結果は人類生活としての理想的平和にまで進んで居ないのである。然し、尠くも今日の會議に依つて向ふ十數年の間は人類間の

戰爭と云ふものは大體中止する事が出来るようになった。先づ之れは世界恒久平和に對する人類の努力の第一歩である。斯くして人類の一般努力が一步一步、國家的の私心を取去るようになれば、最後には理想的の平和の天地が生れるであらう。又是が人類最後の道徳的理想關係であると云ふ事が出来る。世人稍もすれば此の道徳的價值關係の年代を追ふて次第次第に擴大されて行く歴史的展開を無視しやうとする者がある。例ば輕薄なる人道主義を唱へる人の中には此の説が屢々行はれる。此種類の考へは人類の多年の努力と多くの困難に打勝つて理想の實現を試みる人類の苦心を全く閑却して居るからである。さもなければ人類の社會生活が以上の價值關係に依つて造られる事を理解せないで、只だ抽象的の個人的人道主義を唱へる爲である。

總て人類の生活には歴史的要素がなければ眞の實力ある人類生活を營む事が出来ないのである。歴史的要素と云ふのは、吾々の單なる抽象的の人類生活を指すものではなくして、最も現實なる生活を發展せしむる處に歴史的要素がある。之れが前に述べた處の縦の要素に當るものであつて、又他方から云へば歴史的發展の中に人類の價值生活關係が織込らると見るのである。例ば人類は先づ社會的生活の當初に於て一定の血族關係の上に民族的團體を造るのである。此民族的關係か

らして他の社會に見る事の出来ない風俗習慣が現はれて來る。其の風俗、慣習は主として民族的の精神を土臺として現はれる故に、其處に一種の特殊的道德精神が現はれる。之れを普通國體と稱するのである。亦其の國體の上に他の國家と異なる道德の現はれたときには是を國民道德と稱するのである。例ば我國に於ける忠孝一貫の道德の如きは矢張り我大和民族の民族的精神に基いたものである。又皇室に對する我國民の道德的憧憬は是又我國體の發揚に關するところであつて、云はば我國民の價値的生活から現はれたものである。決して自然的の生活丈けでは發生せなかつたのである。斯の如き國民道德が現はれると云ふ事は二千五百年の永き歴史上に我民族の現實的努力が現はれた結果と見ることが出来る。此歴史的努力を用ひずしては又最終の人類生活を完全に實現することは出来ぬ。其故に現代に於ける吾々の人道に對する努力は國家を見捨てて決して爲し得るものではない。必ず個人は國家を通じて初めて人道的目的に進むことが出来るのである。

人道と國家的道德との關係は是を少なき團體生活に譬て見れば、恰も學校のクラスに於ける生徒個人と云ふやうな關係になるのである。其のクラスを立派にすると云ふことは其中の一人々々が只だの抽象的クラス全體に對して力を盡すと云ふことではない。己のクラスを愛すると云ふこ

とは其のクラスに屬する生徒個人が各々切磋琢磨すると云ふことでなければならぬ。各生徒が己の義務を完全に果すことにある。即ち個々の學生が己の個性に隨つて充分自己を發揮する其の結果が其のクラス全體の發展を來たすのである。結局其のクラス全體の爲には其一級生の相互の道德的競争と云ふことが必要になるのである。夫以上の學校全體の發展を謀らんとするには、又各クラスが各々努力し、他のクラスと道德的の競争をすることにあるのである。此處に一人の學生があつて己れのクラスの爲又母校の爲に盡すとて、己れの爲すべき日目の日課を捨て、只だ學校の名を擧げる爲に、或はボートレース、或はベースボールの選手を以て任ずるとすれば、果して其れが學校全體の眞の發展に益するが怎うか。斯の如き行動が一見學校全體の爲の如くであつて、其の實反つて其の學生の本分を忘れ、又學校其のものの名譽を毀損することになるのである。此關係は國家生活と人類生活との關係にも説き及ぼすことが出来る。人道論者が稍もすれば國家生活を無視して空漠なる人道を唱へるのは、恰もベースボール選手として母校の名譽を上げんとする一學生の如きものである。其の結果は何等人道の本質的成功を求めるとは出来ないものである。若し眞の人道的道德の實現を見やうとするならば、よろしく國家の中にあつて其の國家

を最も完全にすると云ふことが、何より人道主義を實現する道である。恰も前述の一クラスの發展の爲には個々の學生が、互に己れの長所を發揮せんと努めることが一クラスの發展の目的に適ふことになるのと同一の関係である。今日の國家生活も是と同様であつて、吾々は一つの國家の中にあつて其の國を愛し、其の國の爲に努力することが、やがて世界全般の道德的目的を果すことになるのである。

元來人類の社會の道德的發達と云ふものは、一面から見ると非常に無差別のようであるけれども、多く夫の無差別は實際の社會生活に於ては見る事が出来ない。寧ろ人類的の生活は差別的原理から發達し來るものである。前に云ふ一クラスに於ても、その中の學生が若し全く同一の性格と同一の個性を持つて居つたならば、決して其のクラスは發達することは出来ない。何んとなれば切磋琢磨と云ふことが出来ないからである。學生の個性が夫々違つて居る處からして、此處に競争原理が行はれて、始めて其の一クラスが教育的の目的を達するのである。世界人類の發達も是と同一であつて、絶えず差別的の國民文化と云ふものがあつて、其の間に道德的競争が起つて次第次第に人類文化が發達して行くのである。若し世界の人類が全く同一の文化を持つて居つ

たとすれば、其處に競争原理が現すとが出来ないから、従つて人類文明も發達して來ない。比較的長年月の歴史と夫に伴ふ特色ある文化を有する文明國が世界に數多きことに依つて、始めて一般人類の文明が進歩して行くのである。此點から考へて見ると、吾々が己の國體を尊重し、其の國體を尙々發展せしむると云ふことが、結局世界人類の目的に適ふのである。例ば、吾々が友を選ぶに當つて如何なる方法を取るかと云へば、誰しも己の短所とする處を長所とする友を選ぶてあらう。是が眞の選友の道であつて、斯してこそ親友仲間と云ふことが出来るのである。此場合に友人仲間の利益幸福を求めようとするならば出来る丈け友人達の個性や長所の異なる者が集ることが必要である。其の結果は其の友人間に道德的の競争、従つて道德的の忠告や助言が互に交換せられる。其で始めて友人全體の發展を來たすのである。是は恰も國際間に於ても出来る丈け違つた文化を所有する國民が各々の國家的特色を發揮するのと同一の関係である。其で初めて世界全體の幸福利益を求めることが出来るのである。是等の點から考へて見ても、人類生活と國家生活と云ふものは決して矛盾するものではない。寧ろ道德的に云へば、國家的精神の偉大なるものは又人類精神に偉大なるものと云ふことが出来るのである。

人類生活

國民精神の相互の理解と尊重

一

歐羅巴の今回の戦争の原因を種々研究して見ると、政治的原因と經濟的原因、此二つが主なる原因であることは言ふ迄もない。併し是丈けかと云と怎うも世間の人が見落して居る方面があるのではなからうか。即ち交戦國が相互の國民的精神と云ふものを十分に理解すること、並に夫を尊重する事を忘れたと云ふことが、今回の大戦争の一つの大なる原因であると信ずる。其故に私は今平常から考へて居る、其の事を述べて見ようと思ふのである。

今日世界の平和を齎らす爲に、軍備制限、國際聯盟、國家聯盟と云ふやうなことの計畫が、世界到る處に種々考へられるやうになつたのである。其の内には私の云ふ國民精神の理解と云ふやうなことが、多少含まれて居るやうにも思はれるが、歸する所夫は政治上經濟上の問題ではなからうか。例へば今日の極東問題、太平洋會議、華盛頓會議と云ふやうなものでも、其真相を考へ

て見ると、眞に道德的動機が充分に動いて居るかと思ふことは疑問である。況んや、國民的精神の理解及尊重と云ふやうなことは一向に現はれて居ないように思はれる。然し眞の國際的平和を謀るには此要素を取り入れなければならぬ。此意味を入れなければ彼の會議の目的を果すことは出来ないと思ふ考を私は持つて居るのである。一寸御斷りして置くが私が特に國民精神の理解と尊重と云ふ二つの言葉を使つて居る事である。理解さへあれば尊重と云ふことは無益のように思はるのであるが、實は多少通俗的の私の區別であるけれども其意味を二つに分けて考へて見たいと思ふのである。

理解と云ふ意味は、私の考では言はば一種の普遍主義である。例ば日本の國には日本の道德的精神があり、亞米利加には亞米利加の精神がある。或は世界到る處にある。然し其各國民の精神を分析すると又其の内に共通の道德的精神と云ふものがある。今は其共通精神を貫ひて、一貫して國際的精神を起さう。而して平和の目的の爲に働かうと云ふやうな考が出て来る。其を私は理解と云ふので、極く通俗的の意味である。此理解と云ふことは、存外現今の世の中に於て一般に流行して居る考である。國際聯盟の中には却々澤山あるので、即ち共通性を引き出して、其共通性

の道德と云ふもので國際間の平和を造らう、斯う云ふ考である。併し私は是では足りないと思ふ。私は其他に尊重と云ふ意味を加えたいと思ふのである。夫では尊重と云ふことは怎う云ふ意味かと云ふことになるが、私の尊重と云ふことは違つた點を尊重すると云ふことである。例ば我々が御互に友達を拵へるにも、お前と私とは同じ性質であるからと云ふので眞の親友が出来るか怎うか、私共の經驗に依ると寧ろ自分の足りない所を友人が持つて居る場合に、其に對する畏敬の念から始めて友達となるのであると思ふ。此道理は矢張り世界の國民生活の上にも採用されなければならぬと思ふ。單なる理解主義は今日の淺薄なる國際主義である。怎うしても夫以上に、日本の國にないものを亞米利加が持つて居るとか、或は英國が持つて居、獨逸が持つて居ると云ふこと、又米國の方から言へば、日本は又米國が持たない可い所を持つて居ると云ふので、其處で始めて眞の國際聯盟とか、國家聯盟と云ふことが成立するのであると思ふ。若し私の言ふやうな理解と云ふことのみであつたならば、夫は普遍主義、世界主義で國際聯盟と云ふことにはならぬ。コスモポリタニズムは改造の時期に於ては就中唱道せられ、又個人として考へることも必要であるけれども、夫丈では不可ぬ。怎うしても其處に國民精神を相互に尊重すると云ふことが何よりも大切であると思ふのである。又夫が人道主義の理想に行く最も正當なる道行であると思ふのである。

前の理解の意味を、私は假りに世界的普遍主義と名附ける。或は世界的普遍運動と名を附ければ、後の方は國家的特殊主義、國家特殊運動と云ふことになるのである。斯う云ふと人は直に保守的で不徹底な處があると誤解するかも知れないけれども、事實其二つが相調和せなければ眞の國際的精神人道的精神と云ふものは出来ないと思ふ。又一方から見れば私の言ふ理解と云ふことは即ち人類社會の生活を横斷的に考へること、斯う云ふことは正しい言葉の使ひ方ではないけれども、云はば空間的と云ふことである。吾々人類の社會が今日に至る迄何千年間の發達をして來た状態を考へて見ると、何時でも縦の社會生活要素と云ふものに心づくのである。横の要素と云ふのは、今日一般の社會改造論者が論ずる所の其であつて、従つて改造論は大方、其空間的の説明である。然し其他にもう一つ縦の要素を入れなければならぬ。然らば縦の要素とは何ぞや即ち歴史的要素である。尤も世間には歴史主義を極端に唱へる人もあるのであつて、横の要素全部を見逃して、縦の要素のみで遣つて行かうと云ふのである。さう云ふ人の議論と云ふものは必ず

軍國主義と結び附いて、人道主義への向上と結び附いて行かぬ。縦の要素だけで世の中の生活を考へて見ると社會は皆特殊性のみを以て成立して居ることゝなつて、其の結果協同和親の途がなく喧嘩するより仕方がないことになる。戰爭是認論に陥るのである。此戰爭是認論は實は社會生活の一面觀であつて、今日の一般の世界改造、即ち私の言ふ世界普遍運動は絶対に無益なことゝなるのである。又是に反して世界普遍運動を唱へる人の多くは、人類社會生活の縦の歴史的、具體的要素と云ふものを全く抜にして考へて居る人で、屢々淺薄なる博愛論者の内にさうした思想が現はれて來る。是は西洋諸國にも澤山あるので、十八世紀の頃に英吉利、佛蘭西、獨逸、到る處に起つたフイランソロフィスト所謂博愛論者の運動と云ふものは多く夫である。佛蘭西の革命の如きも、矢張り縦の社會生活の要素と云ふものを全然抜にした結果、彼の馬鹿氣た騒ぎを起したのである。其點に就いては現下の我國に於ても充分考へる必要がある。世界諸國は怎麼短かい歴史を有して居るものでも三百年、四百年、五百年の年月は經過して居つて、其間に國民が相一致協力して拵へて來た特殊文化がある。其特殊のものを何處迄も尊重して行かなければならぬ。即ち此の縦の要素を我々が尊重することに依つて其處に始めて國家聯盟と云ふものが成立するのであ

る。若し社會生活の横の要素許りで行くと淺薄極まるコスモポリタンズムに陥るの他には途がない。従つて國家は不必要である。ウキルソンが國際聯盟と云ふことを考へたけれども若し此の歴史的要素がなければ缺點だらけで、其は單なる妥協説になり、單に八百長を遣つて居ることになるのである。國際聯盟、國家聯盟の思想も、私の云ふ意味の縦の要素を尊重しないならば、無益の業であると信するのである。私は何處迄も其意味に於て、一方に片寄らない兩方のものが我々人類社會に必要であると信する。一方に於ては、私の言ふ所の世界運動即ち世界の人類の普遍共通性の點を尊ぶことが必要であり。夫と同時に一方に在つては、全く共通しない特殊文化の状態に我々が居つて夫を互に尊重する。其意味で前者を私は理解と稱し、後の方に尊重と云ふ名を附けたのである。

二

斯う云ふ意味で、私は今後人類主義へ我々が進んで行く道は、其二つから來なければならぬと斯う思ふのであつて、さう云ふ立場に立つて先づ過去の狀態から少しく具體的に考へて見ようと思ふのである。即ち歐羅巴の戰爭は先程述べた如く、國民精神の相互の理解と尊重が足りなかつ

た。私の眼に映じた處では、獨逸の國民精神と、英佛の國民精神とが理解がなかつた。又尊重がなかつたと云ふことが、私は大いなる戦争の原因であると思ふ。夫で今少しく兩方の對立が互に理解し合なかつたか、尊重すべき怎う云ふ所を忘れて居つたかと云ふことを述べ、次で我國民精神にも及びたいと思ふのである。

先づ英國と獨逸の關係から云ふと、英國は歐羅巴の大戦争に絶えず獨逸を以て野蠻主義なりと呼んだ。獨逸は實に亂暴極まる野蠻主義であると英國は云つたが、是は私は一つは誤解であると考えて居る。元より全部だとは云はぬ。確かに野蠻の行爲のあつたことは事實であるが、夫は餘りに誇大視されて居るので、眞の獨逸の精神と云ふものを理解し尊重しなかつた。爲に時に夫を野蠻と呼んで居ると思ふのである。夫は英國のみならず佛蘭西もさうである。一寸云落したが、英國と佛蘭西とは夫では怎ふであるかと云ふことである。私の考へでは歴史的に觀察して英佛と云ふものは、佛蘭西の革命前後若くは其以前に於て、殊に亞米利加の獨立以前に於ては可なり互の理解と尊重とを缺いて居つたように思はれる。夫が印度の問題が解決し、佛蘭西は其以前可なり亞米利加に勢を持つて居つたが、亞米利加の獨立の爲に勢力がなくなつたと云ふことから、却

つて佛蘭西と英吉利は非常に近寄つて來たのである。換言すれば英國と佛蘭西とは今回の戦争前には非常に仲の好い國になつて居つた。仲の好いと云ふのは單に外交的の意味でなく、佛蘭西は英國を自身の兄のやうに考へて其文明を學び、自身の足りない所を英國から補ふと云ふことを考へて居つたので、今回の大戦前には此二つの國が互に尊重し互に理解して居つたやうに私は思ふ。故に其他の政治的理由もあるが、兩者間には戦争は起らなかつた。唯起るのは英佛對獨で、英國や佛蘭西の國民は獨逸の國民精神を理解しない。又獨逸は英佛の精神を理解しないと云ふことが戦争の大原因であると思ふ。英國は今述べたやうに獨逸は野蠻主義である。獨逸は甚だ野蠻的行爲を遣る國民であると云ふことを口を極めて云つて居る。所が我々第三者の眼を以て見ると、其は獨逸の國民精神から出て來たことで強ち悪く云ふに及ばぬことである。例ば獨逸は物事に對して科學的精神を非常に徹底的に用ゆる。是は哲學上から云ふならば非常に冷靜で所謂理性的と云ふことは、獨逸の思想を一貫した精神である。何處迄も冷やかに、物を極めて客觀的に見ると云ふことが獨逸魂で、科學的精神と云ふものは昔から獨逸の國民精神を一貫して居る。其處で例ば、毒瓦斯一つ拵へるにも、一見冷靜な精神からやつて行つたことで其處に行くと獨逸人は徹底

的に物事を遣ると云ふ精神を持つて居る。夫は英國人も佛蘭西人も彼に及ぬのである。獨逸人は一つのものに深く入り込む性分で薄つ平なことを嫌ふ。何處迄も身命を賭して迄遣ると云ふ深い精神が獨逸人の國民精神の特長である。夫が現はれて來ると英國や佛蘭西の國民精神には一種の野蠻風に見えるのである。グルンドリツヒカイトと云ふ言葉は獨逸人の一般語である。日本に於ても徹底的とか、根本的とか云ふ語が近來流行するのは矢張り恐らく獨逸の影響であらう。徹底的と云ふ精神は獨逸精神の特色で我國としては獨逸人から學ぶべき點である。けれども其徹底と云ふことは、英國や佛蘭西人から見ると誠に重苦しい。何だか頭から物が蓋つて來るような心持がする。又何だかこころ青白い顔をした怪物のやうに如何にも陰鬱な氣分を英國人、佛蘭西人に與へる。是は英語許りで外國のものを讀んで居る人には、獨逸の思想が理解せられない理由である。重苦くて嫌な氣分がするような感じがする。併し是は獨逸の特色であつて、夫を抜きにしては獨逸人の特色はなくなる佛蘭西人は人の知る如くユーモアのある國民で、物に對して多少たりとも諧謔氣分を持つて居る國民である。社交的氣分と云ふものを強く持つて居る國民である。其處へ持つて來てグルンドリヒカイトと云ふような言葉を聞くと堪らなく胸苦しい。夫で夫に對して一

種の反感を持つと云ふことになるのは理の當然である。併し獨逸に對しては夫を尊重しなければならぬ。英國の常識一點張りから獨逸のグルンドリヒカイトと云ふことを言はれると非常識の奴だと直ちに考へて濟ふのである。然し深く物を考へると、徹底的に物事を遣ると云ふことは獨逸人の偉い所であつて、寧ろ英佛人の學ぶべき性質である。即ち私の所謂尊重すべき性質であるので、是を英佛人が尊重しなかつた、理解しなかつたと云ふことが抑もの戦争の原因である。思想上の問題から云つても、經驗的といふことが英國風思想の特色である。獨逸人は孰か云はば形而上的、組織的である。哲學上で英國人は客觀的と云ふことを經驗的實在と云つた風に考へて居るが、其意味で獨逸の哲學に現はれる客觀的と云ふことを考へるとサツパリ分らない。獨逸人の客觀と云ふことを哲學的に考へると、其意味は寧ろ主觀的客觀と云ふ意味にある。認識的意味を加へて物が其處にあると云ふことは心ある故に云はるゝ。若し心の主觀作用がなければ云はれぬと云ふ處から一旦主觀に持つて來て、次で其主觀作用の内に更めて客觀法則とか普遍法則と云ふことを考へるのである。此の種の考へ方はカントを始め後々の獨逸の哲學者も皆是と同一の考へ方をして居る。又之を理解しなければ獨逸の深い哲學は分らぬのである。即ち換言すれば、英國は經驗的

で淺薄な意味に於ける客觀主義である。是も要は英國の常識性から來る結果である。英國の方から獨逸の方を見ると非常識に見えるのも尤もである。所が獨逸人の方から見れば、英國人は淺薄な常識一點の國民であつて哲學も何も知らない。道德上、倫理上の義務と云ふような言葉に付いても英國人の義務と云ふものは比較的相對的の義務と云ふ意味で、獨逸人の義務と云ふ意味は國家に對する意味であるとか又、哲學的にカント等の言つたような、絶對普遍の本務と云ふような意味に用ひられて居る。斯くの如く思想上に於ても片端からさう云ふ點に於て英國と獨逸が違つてゐるのであつて、其が元で英國と獨逸とが互に理解することが出來ないのは尤のことである。

尙ほ英獨の國民精神の相違の點に於て我々が注意させられることは利己主義と云ふことである。此利己主義と云ふことは、英國人特有のものであると云ふことを世間では云つて居るが、獨逸にもある。唯形が違ふので、英國のエゴイズムと云ふことは、善惡何れにしても個人的我と云ふことである。私の爲と云ふのである。悪いことをするにしても自身の利益と云ふ意味になる。即ち其處に他人が居つて亦私が此處に居ると云ふ風に人々を個々に分けて考へるので、相對自我と云ふことになるのである。可い意味に於ては、英國人は常識があるから、自身を抓つて痛ければ他

人を抓つたら定めし痛からうと云ふ氣兼道德と云ふものは確かに英國人の長所である。此點では獨逸人は確かに傍若無人である。獨逸の自己中心主義は絶對的のエゴイズムである。個人個々の利己主義でなくして絶對的の利己主義である。或は傍若無人の利己主義である。他人が側に居るから其人に對する氣兼をするると云ふ消極的の所はないのである。寧ろ強い大きな自己主張と云ふ方が可くはないかと思ふ。獨逸の方は自我を主張する際は他人と云ふものは眼中にない。彼處に他人が居るから勝手なことをすると他人が迷惑するだらうと云ふ言ふ意味の善意の個人主義は獨逸にはない。我と云ふものを中心にして物を考へるので、他人の存否は問題でない。ニイチエに出て來る「超人」と云ふ考は獨逸人が共同に持つて居る自我主張の精神である。然るに此考は英國人にはない。絶對的にないとは云はぬが、殆んど英國にはない思想で獨逸人の特色である。だから英國人は可い方から言へば、即ち氣兼道德を持つて居る丈け夫丈け獨逸人の態度を見た時に非常に惡感を催す。獨逸人と云ふ國民は實に怪しからぬ。自身が天下一と云ふ顔をして居つて他人のことは眼中にない。他國民に對する氣兼は少しも考へない。禮讓の道を知らぬ奴だと解釋して居る。所が克く考へて見ると、獨逸には其處に眞面目と云ふ分子が現はれて來る。我々は平素多くの